

昭和56年度秋田城跡発掘調査概報

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会
秋田城跡発掘調査事務所

秋田城跡正誤表

54 66

ページ	行	誤	正
2	28	X = -2,407 m, Y = 193,7801 m	X = -2,407 m, Y = 193,7801 m
4	4	S X561カマド状遺構	S X561 A カマド状遺構
	4	S X562カマド状遺構	S X561 B カマド状遺構
	6	X = 126,7483 m, Y = 133,4109 m	X = 126,7483 m, Y = 133,4109 m
		H = 48,685 m	H = 48,685 m
	11	S I 564堅穴状遺構	S I 563堅穴状遺構
5	4	平・丸瓦、格子目瓦	平・丸瓦、格子目瓦
7	表 III	繩目叩 $\begin{cases} r > L \\ r \\ \ell > R \\ \ell \end{cases}$	繩目叩 $\begin{cases} L \\ r \\ R \\ \ell \end{cases}$
	表 IV	模骨痕 繩目叩 $\begin{cases} r > L \\ r \\ \ell > R \\ \ell \end{cases}$	模骨痕 繩目叩 $\begin{cases} L \\ r \\ R \\ \ell \end{cases}$
8	10	板の型	板の范型
第23図		D	O
第24図		東西ベルト (10 E ライン)	東西ベルト (O E ライン)
34	第43図		須恵器蓋 4 (2-283)
35	第44図		鏡瓦 10 (2-251)
40	第49図		須恵器甕 2-327
41	6	色砂層出土遺物	褐色砂出土遺物
41	第50図	2 (2-307) A 11 (2-320)	2 (2-307) 11 (2-322)
51	表 XIV	繩目叩 $\begin{cases} r > L \\ r \\ \ell > R \\ \ell \end{cases}$	繩目叩 $\begin{cases} L \\ r \\ R \\ \ell \end{cases}$
51	表 XIV	模骨痕	模骨痕
	表 XIV	←	⑥ ←
63	20	X = 332,242 m, Y = -80,963 m	X = 332,242 m, Y = -80,963 m
		H = 37,299 m	H = 37,299 m

序 文

史跡秋田城跡の発掘調査は、昭和47年に秋田城跡発掘調査事務所を開設し、以来継続して調査を進めてまいりましたが、早いもので10年の歳月が経過しました。この間、急増する現状変更許可申請等に伴う事前緊急調査を行いながらも、基本的には秋田城跡解明のために努力してまいりました。特に今年度は、秋田城の内城地城と推定されている地区の調査に着手できましたことは大きな喜びがありました。

今年度の調査結果としましては、第32次調査で築地、溝状遺構、檜状建物跡を発見し、これまで推定の城を出なかった北外郭線屈折部が明らかになりました。また、内城解明の足掛かりともなる第33次調査では一本柱列による区画遺構、鍛冶工房跡、建物跡などを検出し、さらに50年度から継続調査を進めてきました鶴ノ木中央地区の第34次調査では、すでに検出されている沼地の西域を明確にしたほか井戸跡なども発見されました。

このように多大な調査成果を上げることができましたことは、常日頃ご指導ご援助をいただいております文化庁はじめ、宮城県東北歴史資料館、同多賀城跡調査研究所、秋田県、並びに多くの地元の方々のご協力の賜ものと深く感謝申し上げると共に、今後の調査につきましてもさらにご指導、ごべんたつを切にお願い申し上げるだいります。

本報告書は、今年度調査の概要をまとめたものでありますが東北古代史研究の一資料として活用していただくと共に、秋田城跡の保護対策の一助となればまさに幸いです。

昭和57年3月

秋田市教育委員会

教育長職務代行者 次長 池 田 正

目 次

I 調査の計画	1
II 第32次発掘調査	2
1) 調査経過	2
2) 検出遺構と出土遺物	4
3) まとめ	16
III 第33次発掘調査	17
1) 調査経過	17
2) 検出遺構と出土遺物	19
3) 各層位出土遺物	38
4) 墨書き土器と転用観	42
5) 第33次調査出土瓦	57
6) まとめ	60
IV 第34次発掘調査	62
1) 調査経過	62
2) 検出遺構と出土遺物	65
3) まとめ	75

例 言

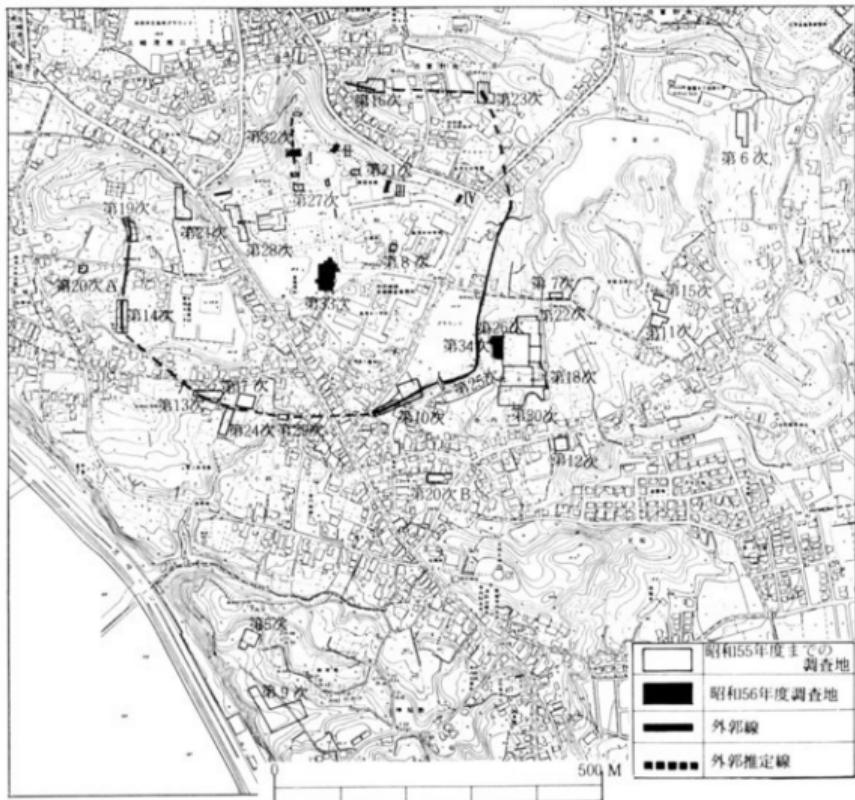
- 本概報の図面・遺物整理・原稿執筆・編集には、秋田城跡発掘調査事務所の各職員があたった。
- 各次数の担当は下記のとおりである。

第32次 石郷岡誠一

第33次 小松正夫、西谷隆、西島羽礼子

第34次 日野久

第33次調査出土の墨書き土器については、その一部の判読と赤外線テレビカメラによる写真撮影を、宮城県東北歴史資料館の平川南氏にお願いした。



第1図 秋田城跡地形図および調査地域図

I 調査の計画

昭和56年度の発掘調査は、50年度以来調査を継続してきた鶴ノ木地区と北外郭線のうち明確さを欠いていた北西屈折部の確認調査、それに秋田城における最大の課題でもあった正庁地域究明のための神社境内広場の計三ヶ所を設定した。

発掘事業費は、総事業費1,500万円のうち国庫補助額50%（750万円）、県費負担額25%（375万円）、市負担額25%（375万円）である。調査計画は次のように立案した（表I）。

表I 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘面積m ² (坪)	調査実施期間
第32次	護国神社境内北部	331 m ² (100)	4月5日～5月15日
第33次	〃 〃 広場	955 m ² (289)	5月16日～8月12日
第34次	鶴ノ木中央地区西側	1,024 m ² (310)	8月13日～10月31日

第32次調査は、昨年度第31次検出の築地遺構追求も大きな課題であったので想定線上に4ヶ所のトレーンチを設定して実施した。その結果、第1トレーンチとした外郭想定線上に築地痕跡、また築地崩壊後の溝状遺構と槽状建物が検出され北外郭線が明確なものとなった。しかし他の三ヶ所のトレーンチでは、築地遺構は検出されず、第31次検出の築地追求の目的は達成されなかった。

第33次調査は神社境内広場を、これまでの国営調査の結果を元に、また地形的条件から内城域と考えその東辺地域という仮定で実施した。調査の結果、下層東側からは重複する南北棟の建物跡、また上層からは、一本柱列による区画遺構の西南の一画とそれに開まれた形で鍛冶工房跡、建物跡、住居跡等が多數検出された。これらのことから内城地区の使用については、時期によって大きな相違のあることが判明した。

第34次調査は、50年以来調査してきた鶴ノ木地区の西北にあたり、この調査をもって中央平坦部については終了することになる。調査の主たる目的は第25・26次調査で検出されていた沼地の西限を追求することにあった。

調査の結果は井戸跡、土壤跡等の検出とともに沼地の西城を明確にすることができた。また高清水丘陵全体を覆っている飛砂が、調査区の西壁付近を東限とすることが判明するなど大きな成果があった。昭和56年度の発掘調査実施状況は次のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘面積m ² (坪)	調査実施期間
第32次	護国神社境内北部	299 m ² (90)	4月7日～5月21日
第33次	〃 〃 広場	1,162 m ² (352)	5月22日～9月25日
第34次	鶴ノ木中央地区西側	864 m ² (261)	9月26日～12月12日

なお第33次調査では9月19日現地説明会を開催し、一般市民への文化財に対する普及に務めた。

II 第32次発掘調査

1) 調査経過

第32次調査は秋田市寺内字大畑の護国神社境内北部に第1から第4までの4本のトレンチを設定して4月7日から5月21日まで実施し、その発掘調査面積は 299 m^2 (約90坪)である。

調査地周辺は、昭和54年度に第27次調査を実施しているが築地遺構は発見できなかった。しかしこの地域は東西に走る築地が北に折れ、舌状部に向って延びることが想定されているところである。また、55年度の第31次調査では築地遺構を検出している。そこで今次調査では、北辺外郭築地屈折部の検出と、さらに第31次調査検出の築地遺構の追跡調査という両者を主目的に実施された。

調査の結果、第1トレンチでは北辺外郭屈折部 S F 552 築地跡、S B 553 A・B 建物跡、S D 554～556 溝跡、S A 557 柱列が検出された。第2～4トレンチでは、第31次調査発見の築地遺構の延長部分は確認できず、わずかに第2トレンチで粘土の高まり S X 558 が検出された。他に S I 559、S X 561・562 などが発見されている。

第1トレンチ

・4月18-19日の日記より

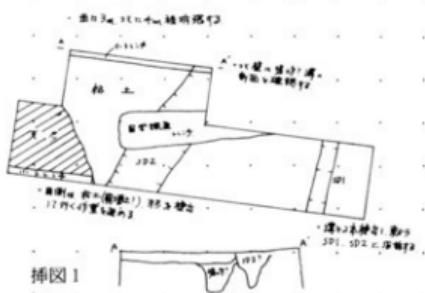


插圖 1

第1トレンチは、第27次調査地の北方、舌状部のつけ根部分に地形を考慮して任意に5m×25mのトレンチを設定する。ここは、昭和34年～37年までの国営発掘でトレンチによる調査が実施されている。

4月7日から表土除去作業を開始し、8日までに国営調査トレント、西側で瓦の混入する粘土面を追跡した結果、多量に瓦が混入しており、粘土面は崩壊土、崩壊瓦と思われる。東側砂屑

面で S A 557 柱列を検出する。10日～12日は、国営調査トレントを完掘後に断面で S B 553 A 建物跡東南部掘り方、S D 555 溝を確認する。さらに、崩壊土を掘り下げる瓦層を現して行く。13日、瓦層を精査中に格子目瓦が混入していることが判明する。北壁沿いに小トレントを設け掘り下げた結果 S D 554・555 溝に切られた S F 552 築地を断面で確認する。14日には、S D 555 溝を掘り下げ、南部で S D 554 溝、北東部で S B 553 A 建物跡の掘り方を検出する。さらに S F 552 築地を平面的に追跡した結果、小範囲ではあるが遺存していることが判明した。16日には、全景写真撮影を行う。17日に遣り方設定のため No.10 測量原点からトラバースして原点を移動し、基準点を X = -2, 407 m, Y = 193,7801 m, H = 47.99 m に設定した。22日まで 1 回目の平面実測を行う。23日～5月 1 日は、崩壊土瓦層を除去した地山層面で、崩壊土を埋土にもつ S D 557 溝を検出し、西半分を完掘後に断面図、写真撮影を行う。北部では粘土面を徐々に掘り下げる S B 553 A 建物跡の西南掘り

方を検出する。2日～6日には、SB 553 A建物跡、SA 557 柱列の断ち割りを実施する。SB 553 A建物跡の西南掘り方に重複する古い掘り方の存在が確認され、B建物跡とする。8日から15日まで各遺構、北・東壁の土層断面図、写真撮影を行い5月16日に第1トレンチの調査を終了する。

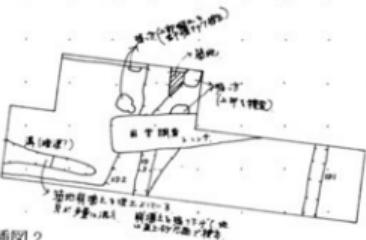
第2トレンチ

第2トレンチは、第1トレンチの東方約50mの地点である。ここは神社花壇の北部に当り、土手状の高まりが延びており、これに直交するように3m×13mのトレンチを設定した。4月14・15日に表土除去作業を行う。表土は厚い部分で約1mの新しい盛土で覆われ、その下部に約30cmの旧表土がある。16日には中央部でSX 550 粘土の高まりを検出する。粘土は固く、築地の可能性も考えられたが大部分壊されており詳細は不明である。18日、炭化物層下の褐色砂面で円形の落ち込みSK 560を検出する。また北側に延びるSI 559 竪穴状遺構を確認、床面まで掘り下げる。21日～30日は東・北壁の写真撮影、土層断面図作成後に平板で平面実測を行う。また第1トレンチ測量基準点から原点移動し、X=57.727m, Y=208.205m, H=43.442mに基準点を設定した。5月1日に埋め戻し、調査を終了する。

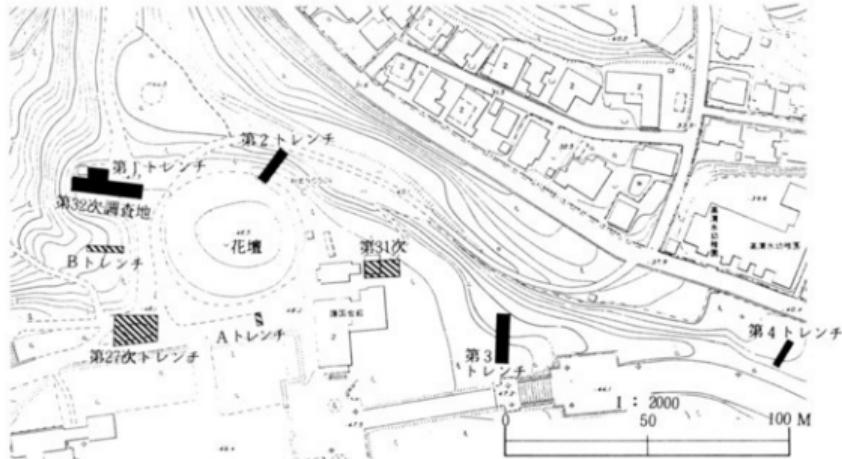
第3トレンチ

第3トレンチは、昨年度第31次調査地の東南約60mの地点である。ここは第31次調査で検出した

。4月25日～28日の日記より



插図2



第2図 第32次調査周辺地形図

築地の延長部と想定される地域で、土手状の高まりから北方に $3\text{ m} \times 16\text{ m}$ のトレンチを設定した。4月18日～24日まで表土除去作業を実施する。南側土手状の高まりは厚さ約 1.5 m の新しい盛土で覆われ、下部には旧表土が堆積していることが判明する。5月6日～11日は、焼土炭化物層面でS X 561 カマド状遺構、さらに下層で S X 562 カマド状遺構を検出するがいずれも擾乱が激しい。13日には地山砂層を現す。南壁際でピットを検出する。14日～17日には平面図、土層断面図を作成し、その後全景写真撮影を実施する。測量基準点は No.10 から原点を移動して $X = 126,7483\text{ m}$, $Y = 133,4109\text{ m}$, $H = 48,685\text{ m}$ に設定した。5月21日に埋め戻して終了する。

第4 トレンチ

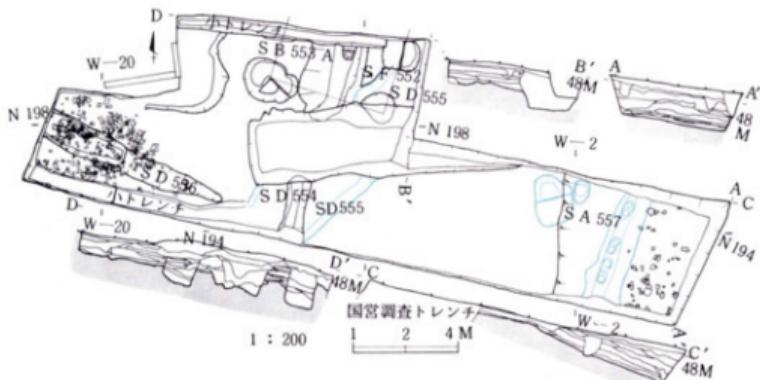
第3 トレンチの東方約 60 m の地点に $2.5\text{ m} \times 10\text{ m}$ のトレンチを設定した。南側の土手状の高まりは新しい盛土で約 2.8 m の厚さで堆積している。北側は、表土、赤褐色土を除去すると地山ローム層に至る。5月16日までに S I 564 穴状遺構を検出する。18、19日に平板による平面実測、さらに断面図、写真撮影を行う。測量基準点は No.10 から原点移動し、 $X = 240.2026\text{ m}$, $Y = 146.0894\text{ m}$, $H = 42.589\text{ m}$ に設定した。20、21日に埋め戻して調査を終了する。

2) 検出遺構と出土遺物

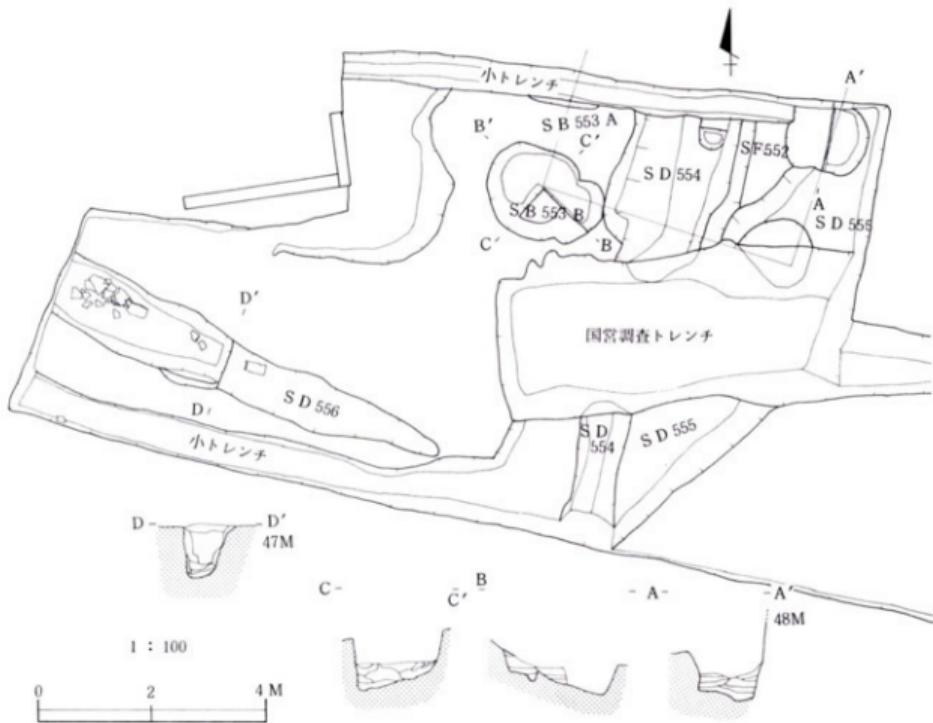
第1 トレンチ

S F 552 築地（第3、4図、図版2）

S F 552 築地は、トレンチ中央部北側で検出された。東側が S B 553 A 建物、S D 555 溝、西側は S D 554 溝によって切られている。南側については、築地検出面が表土からあまり深くないことや、地山砂が南に向って高くなっていることなどから擾乱によって削平されていると思われる。築地本体は、幅約 1 m 、高さ約 80 cm 、長さ約 1.5 m 程で現存している。構築方法は、地山砂層上に直接黒色土混りの粘土、赤褐色・褐色粘土を積み上げて版築しているが、版築の状態はこれまで検



第3図 第32次調査第1トレンチ検出遺構図



第4図 第1トレンチ西側検出遺構図

出されている築地に比較すると良好ではない。寄柱は両側面ともSB 553建物、溝に切られており不明である。

S F 552 築地崩壊土出土瓦

築地崩壊土から多量の平、丸瓦、格子目瓦が出土した。ここでは出土した瓦中、側縁、広・狭端部が残存しているものについて観察を行った。

平瓦（第5図、図版24）

復元したものも含めて、側縁、広・狭端部の残存しているもの83点について表Ⅲのように項目別に観察を行った。凸面はすべて繩目の叩きがあり、スリ消しはみられない。また繩文の原体はすべてL字である。凹面は一枚作りの特徴と思われる布目端がみられるもの26点、桶巻作りの特徴と思われる全面に布目のみられるものが1点、模骨状痕跡のみられるものが9点認められるが上端から下端まで通るものは少ない。また糸切り痕跡のみられる瓦が48点あり、糸の入る方向をみるとA→D10点、D→A11点、A→B・Dの中点に向うもの11点である。数は少ないが、AC、BCの中点からやや斜めに入るものもみられる。面取り技法については、圧倒的に側縁が④に、広狭端部



1 (2-064)



2 (2-065)

1 : 5

0 5 10 CM

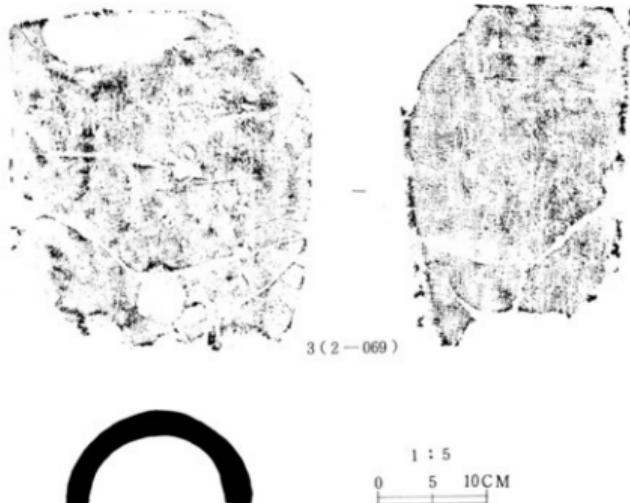
第5図 S F 552 築地崩壊土出土瓦

表III S F 552 築地崩壊土出土繩目平瓦

凸 面	凹 面	端 部	端 部
繩目叩 $\begin{cases} r > L \\ r > R \end{cases}$ 83	布 目 全 面 1 布 端 26	凸 面 側端盛り上り 57 側端まで叩き 26	広・狭端部
$\ell > R$ 0	粘土合せ目 0		① 0
繩目→スリ消 0	模骨状痕跡 10	② 0	② 0
スリ消 0	部分的スリ消 0	③ 10	③ 81
	糸 切 り 48	④ 4	④ 2
	糸切りの方向	⑤ 69	
燒 成	B A C D		
軟 質 58 (黒・灰白色)			
硬 質 25			

表IV 第1トレンチ東側出土繩目平瓦

凸 面	凹 面	端 部	端 部
繩目叩 $\begin{cases} r > L \\ r > R \end{cases}$ 31	布 目 全 面 1 布 端 15	凸 面 側端盛り上り 22 側端まで叩き 9	
$\ell > R$ 0	粘土合せ目 0		① 0
繩目→スリ消 0	模骨痕 3	② 0	② 0
スリ消 0	部分的スリ消 0	③ 7	③ 30
	糸 切 り 11	④ 0	④ 1
	糸切りの方向	⑤ 24	
燒 成	B A C D		
軟 質 19 (黒・灰白色)			
硬 質 12			



第6図 S F 552 築地崩壊出土瓦

が③に集中する。焼成は、黒色、灰白色を呈する軟質のものが58点、硬質のものが25点である。

丸瓦（第6図、図版24）

小破片が多数出土した。色調は黒色、赤褐色、灰白色が多く焼成はきわめて軟質である。凸面は繩目叩きの後にナデによって整形され、繩目の消されているものがほとんどである。側縁には分割線を有している。また中には明瞭に紐巻き痕跡のみられるものもある。

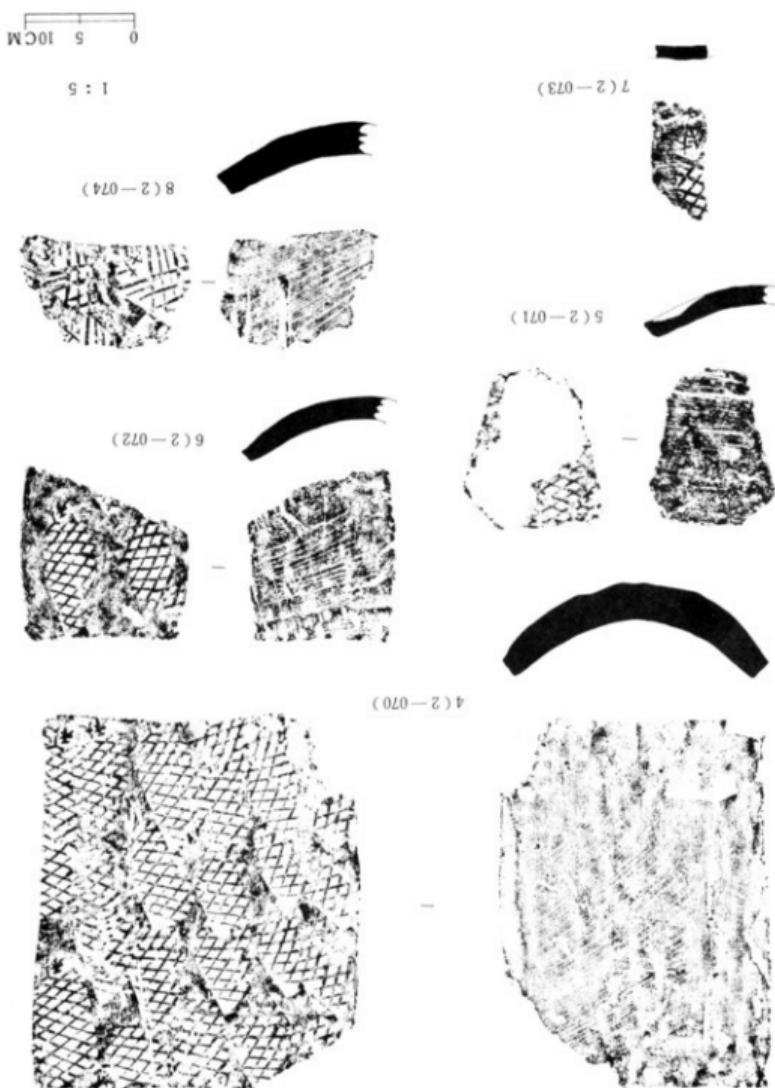
格子目瓦（第7、8図、図版25、26）

總破片数90点が出土した。内訳は、平瓦83点、丸瓦3点、不明4点である。いずれも焼成は軟質で赤褐色を呈している。砂を振りかける技法はみられない。平瓦についてみると、これまでみられなかった格子目の細かいものが出土している。また、「秋」の刻印が認められる瓦が5点出土しているがこれまで確認されている「秋」の字体とは異なる「秋」が新たに出土しており叩き板の型が異なるものである。格子目瓦の丸瓦はこれまでの調査では検出されていないが今回新たに出土した。きわめてうすく厚さは約1.2cmである。側面の面取り技法などは欠損しており不明である。凸面は格子目の細かい叩きが施されている。凹面には布目がみられ、紐巻き痕跡が認められる。

S B 553 A・B建物跡（第3、4図、図版2、3）

S F 552 築地を切って構築された東西1間（心で4.3m）×南北1間以上（心で2.1m+○……）の掘立柱建物跡で北で東に約17度振れている。掘り方規模はほぼ円形を呈し、径約1.5m、深さ約80cmを計る。埋土は赤褐色・褐色粘土、白色・赤褐色砂などである。柱痕跡は平面である

圖 7 S.F. 552 繪地網織土出土耳



程度掘り下げるでも確認できず、断面を切っても検出できなかった。埋土には瓦片が混入している。本建物跡は国営調査トレンチ、SD 555 溝によって一部切られている。

B 建物跡

A 建物跡の南西部掘り方の下部から新たに掘り方 1 個を検出し、B 建物跡とする。掘り方はほぼ円形を呈し、径約 1.2 m、深さ約 40 cm を計る。他の掘り方の検出に務めたが確認できなかった。

SD 554 溝跡（第 3、4 図、図版 2）

S F 552 築地、崩壊土を切って北北東に走る溝である。長さ約 7.2 m、幅約 2.2 m、深さ約 90 cm を計る。南側は SD 555 溝に切られているため幅、深さとも狭く浅い。埋土は上層が小粒の黄色粘土ブロックを含む赤褐色粘土、その下層に砂と赤・黒・黄色の粘土ブロックを含む層があり、最下層は少量の粘土ブロックを含む白色砂である。南側は黄褐色砂が主体である。溝内を精査したが特に柱列などは確認できなかった。

SD 554 出土遺物（第 9 図、図版 26）

埋土から「秋」の刺印が認められる格子目瓦の小破片が出土した。焼成は軟質である。

SD 555 溝跡（第 3、4 図、図版 2）

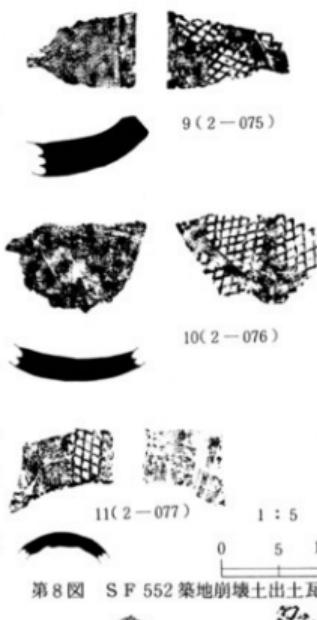
SD 555 溝は長さ約 9.2 m、幅約 3 m、深さ約 30 cm ~ 50 cm の北東方向に走る溝である。埋土は褐色、赤褐色の砂である。S F 552、S B 553 A、SD 554 を切っており、最も新しい溝である。

SD 556 溝跡（第 3、4 図、図版 3、4）

トレンチ西側の地山砂層面で検出した長さ 7.2 m 以上、最大幅約 1.2 m の西に延びる溝である。深さは約 90 cm 程度、埋土は、暗褐色、黄褐色の崩壊粘土であり、大きめの瓦片が多く混入している。

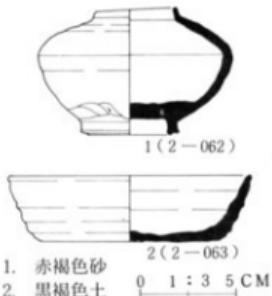
SA 557 柱列

表土下 20 cm の黄白色砂層面で検出した。長さ約 4.2 m、幅約 1.2 m、深さ約 80 cm の布掘りを行い、底部に長さ約 0.7 m ~ 1.1 m、幅約 30 cm の掘り方を掘り込んでいる。柱痕跡は、1 個の掘り方に径約 20 cm ~ 25 cm を計るもの 2 本たてるという組み合せで検出されている。深さは約 20 cm と浅く本来は埋土上面で確認できると思われるが、埋土内の精査では検出できなかった。柱間は一



第 8 図 S F 552 築地崩壊土出土瓦

第 9 図 SD 554 埋土出土瓦



第10図 第1トレンチ東側出土遺物

定でない。埋土から赤褐色土器坏の破片数点が出土している。

第1トレンチ出土遺物

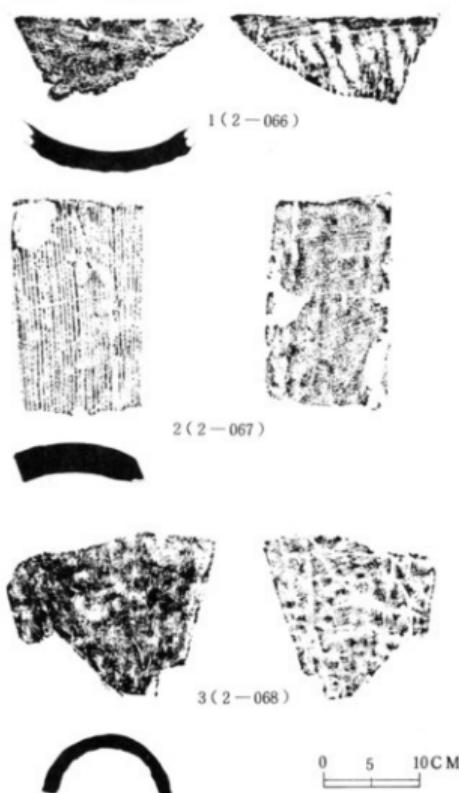
須恵器：1、2ともトレンチ東側から出土した。1は赤褐色砂出土の回転ヘラ切りの小型壺である。体部下端には手持ちのケズリ調整が施されている。頸部から胴部の一部に自然釉がみられる。2は黒褐色土出土の回転ヘラ切り無調整の壺である。口縁部には重ね焼き痕跡が認められる。焼成は良好である。

瓦（第11図、表IV、図版26）

トレンチ東側の黄褐色砂層から平瓦、丸瓦、のし瓦などが出土した。

平瓦：多数出土した破片から広・狭端部、側面の残存するもの31点について観察した。凸面の繩目叩きの繩文原体はすべて $\{ \}$ である。また凸面に糸切り痕が残っているものが3点ほど認められる。凹面の布目は、布目端のみられるものの15点、全面に布目がみられるものの1点である。模骨状痕跡が認められるものが3点あるが上端から下端まで通らない。明瞭に糸切り痕のみられるものが11点あり、A→D、D→Aと糸に入るものが多く、瓦の長軸に対してほぼ直交する形で入るものも4点ほどみられる。側縁、端部の面取り技法は側縁が④、端部が⑤に集中する。

丸瓦：焼成の軟質な黒色、赤褐色、灰白色を呈する小破片が出土している。3は凹面に明瞭に紐巻き痕跡がみられる。分割後側縁部に面取りを施してから焼成してい



第11図 第1トレンチ東側出土瓦

る。焼成は軟質で色調は赤褐色を呈するが二次加熱等を受けたものではない。このような丸瓦は少なく、焼成、厚さがうすいことなどから格子目瓦に伴う丸瓦の可能性もある。

のし瓦：完形品1点、破片1点の計2点が出土した。焼成は軟質である。側縁は一面が弧に対しやや外に開くよう面取りがなされ、一面は弧に対してほぼ直角、あるいはやや内面に切り込まれ、分割線がみられる。

第2トレンチ

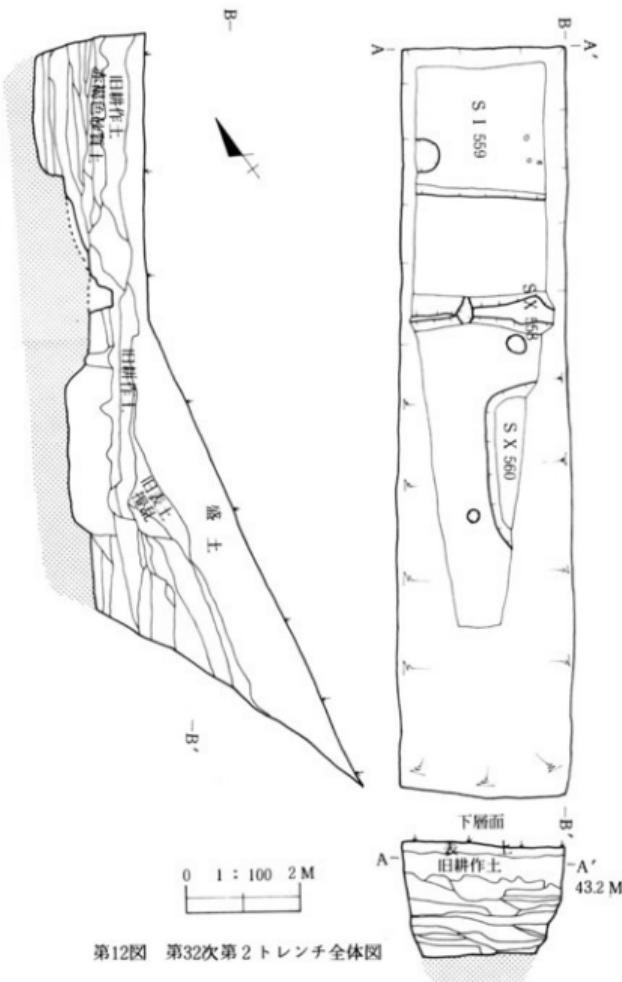
S X 558 粘土積土遺構

(第12図、図版4、5)

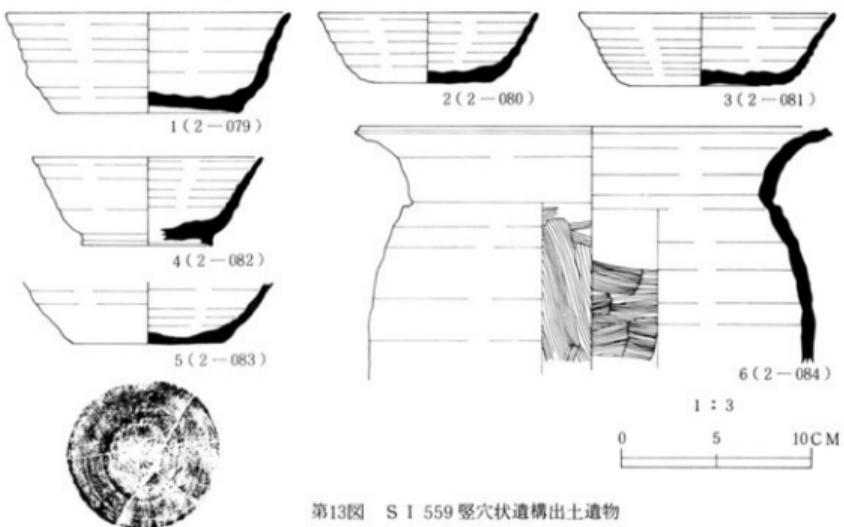
東南に延びる長さ約2.5m、幅約0.5mの黄褐色をなす粘土状の高まりである。大部分は攪乱によって壊されており詳細は不明であるが、地山砂に直接積まれていることや、東に堆積している炭化物層がこの高まりで止まっているなどから推定すると築地の可能性も考えられる。ただ検出範囲では版築は認められなかった。ちなみに、第31次調査検出の築地を北西に延長するとこの部分にのびてくる可能性がある。

S I 559 穴空状遺構 (第12図、図版4)

南壁の一部を検出した。壁の遺存状態はきわめて良好で、ほぼ垂直に立ち上がり壁高は約0.3mを計る。埋土は、炭化物層、赤褐色砂、汚れた砂層が堆積している。床面は地山砂層である。埋土から須恵器壺、土師器甕、瓦片などが出土している。



第12図 第32次第2トレンチ全体図



第13図 S I 559 穫穴状遺構出土遺物

S I 559 出土遺物（第13図・図版27）

土師器：5は内黒坏である。体部下端から底部全体に回転ケズリ調整を行っている。底部にはヘラか釘と思われる工具による刻線がある。内黒ははぜている。6は甕の破片である。頸部から「く」の字状に外反し、口縁部は内反する。外面に縦方向のカキ目、内面には横方向にカキ目を施している。

須恵器：2、3は回転ヘラ切り無調整の坏である。2は周縁にナデがみられる。4は回転ヘラ切りの台付坏である。周縁部にはナデがみられる。

赤褐色土器：1は回転糸切り無調整の坏である。内面赤橙色、外面茶褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。

S K 560 土壙（第12図・図版4）

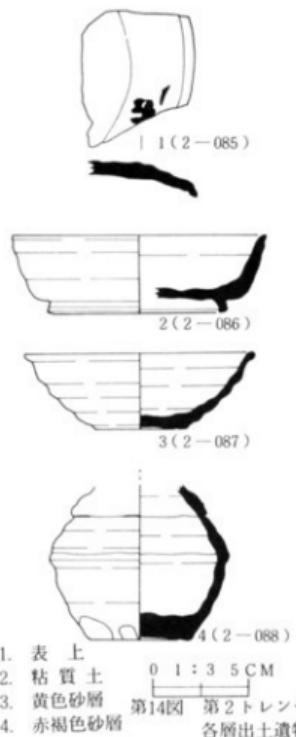
S K 560 土壙は、東壁際で北西部を検出した。径約3.1m、深さは約70cmを計る。埋土は暗褐色砂質土で炭化物が多量に混入している。

第2 トレンチ出土遺物

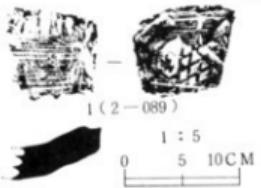
土師器：4は赤褐色砂層から出土した小型壺である。回転糸切りで、体部下端に部分的に手持ちのケズリ調整がみられる。また巻き上げ（輪積）痕跡が明瞭に認められる。

須恵器：1は表土出土の蓋の破片である。肩部に墨書がみられるが判読不能である。2は炭化物層上の粘質土から出土した台付坏である。

赤褐色土器：3は黄色砂層から出土した坏で、全体に磨滅が著しい。回転糸切り無調整である。



1. 表上
2. 粘質土
3. 黄色砂層 第14図 第2トレンチ 各層出土遺物
4. 赤褐色砂層



第15図 第2トレンチ出土格子目瓦
白橙色を呈する。

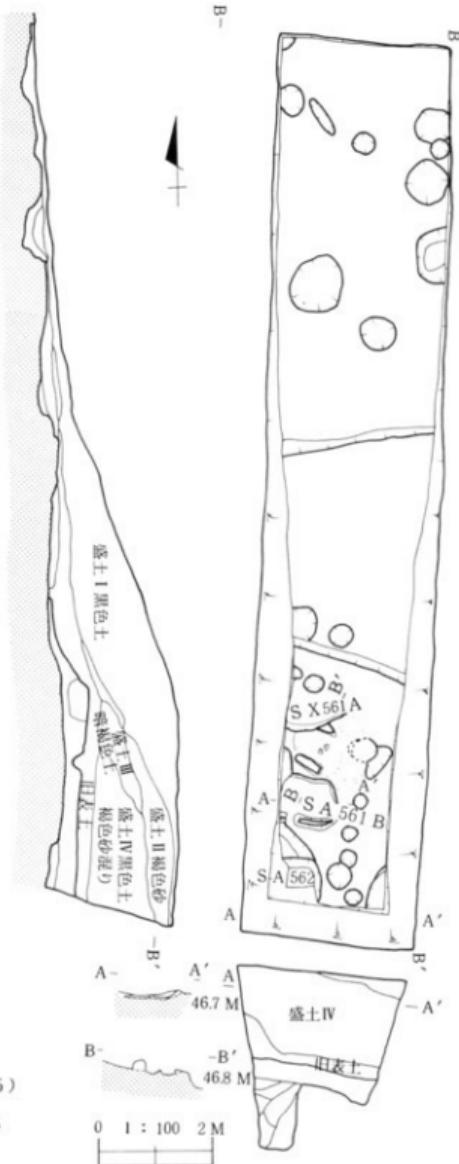
格子目瓦：トレンチ赤褐色砂から出土した。
た。「秋」刻印が認められる。

第3トレンチ

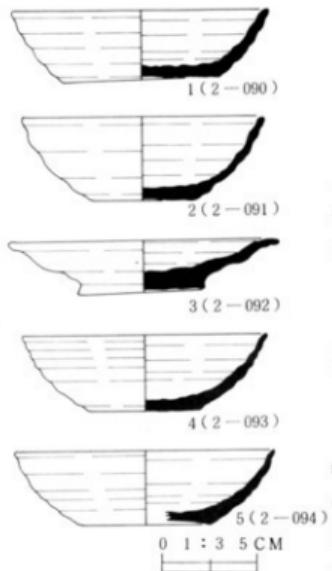
S X 561 A カマド状遺構(第16図、図版5)

旧表土下部赤褐色砂質土面で検出した北
西向きに付設されたカマド状遺構である。

粘土で構築された袖部はかなり擾乱をうけ
ている。焚口部分には多くの炭化物、焼土が認められる。



第16図 第32次第3トレンチ全体図



第17図 S X 561 A・B出土遺物

S X 561 A 出土遺物 (第17図、図版7)

須恵器：1は回転糸切り無調整の壺である。灰褐色を呈する。

赤褐色土器：2は回転糸切り無調整の壺である。底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至る。全体に赤褐色を呈するが、部分的に黒色を帶びている。3は回転糸切り無調整の皿である。口縁部がわずかに外に開く。内面肌色、外面は赤橙色を呈する。

S X 561 B カマド状遺構 (第17図)

S X 561 Aの下層面で検出した東向きのカマド状遺構である。袖部は粘土で構築されているが大部分壊されている。

S X 561 B 出土遺物 (第17図、図版7)

赤褐色土器：4、5は回

転糸切り無調整の壺である。
いずれも器形が酷似しており、底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至る。赤褐色を呈する。

S A 562 掘り方 (第16図、図版5)

トレンチ南壁際で深さ約70cmを計る掘り方を検出したが柱痕跡は確認できなかった。

第3トレンチ出土遺物 (第18図、図版27、28)

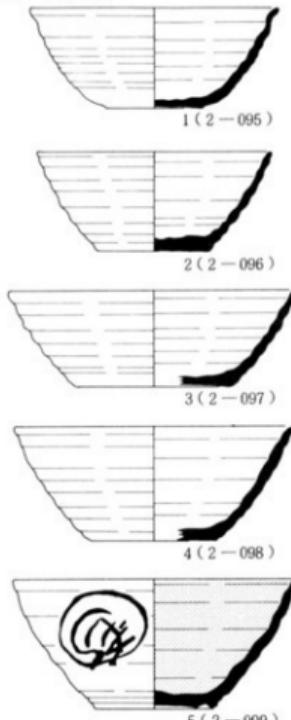
土師器：5は内黒の台付壺である。底部は回転糸切りでゆるく内湾しながら口縁部に至る。黒色処理は内面全体、外面口縁部に施しており、内面底部は放射状、内外面体部は横方向にミガキを施している。体部には墨書きがあり「利」の異体字の「物」と判読できる。

赤褐色土器：1、2、4は黒褐色土層出土の壺である。いずれも回転糸切り無調整である。1は一部に媒状の炭化物が付着しており、体部上半が黒色を帶びている。3は赤褐色砂層出土の回転糸切り無調整の壺である。胎土はもろく、うすい茶色を呈する。

第4トレンチ

S I 563 整穴状遺構 (第19図、図版5)

東西1.3m以上、南北約1.1mの長方形を呈する。埋土は暗

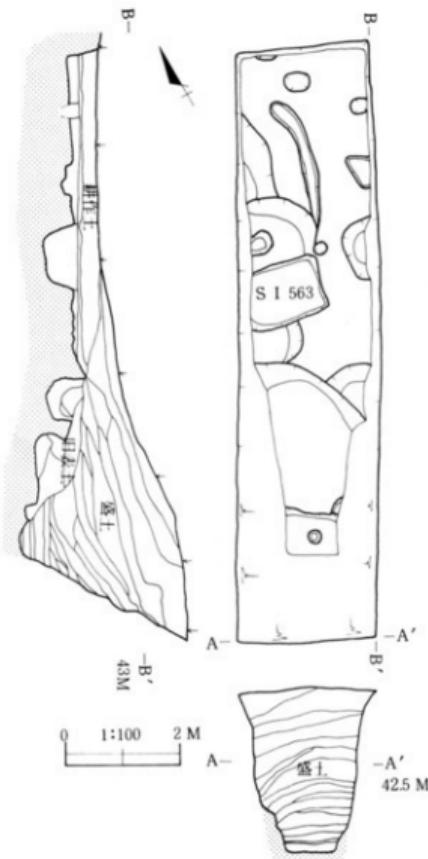


1.2.4. 黒褐色土

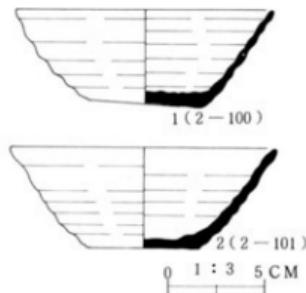
3.5. 赤褐砂層

0 1 : 3 5 CM

第18図 第3トレンチ、各層出土遺物



第19図 第32次、第4トレンチ全体図



第20図 S I 563 窒穴状遺構出土遺物

赤褐色土であり、赤褐色土器が出土している。

S I 563 出土遺物（第20図、図版28）

赤褐色土器：1、2とも回転糸切り無調整の壺で、底部からほぼ直線的にのびて口縁部に至る。

1は内面赤橙色、外面肌色を呈し胎土中には小石粒を多く含む。2は赤橙色を呈し、外面は磨滅が著しい。

3)まとめ

北辺外郭屈折部の把握、第31次調査検出築地の追跡という目的で調査を実施した。

これまで、西外郭線は第19次調査地（焼山）北部で東方に曲がり、護国神社北部を東西に走ることが確認されている。しかし、その先は第27次調査地付近で北に折れ、北方の舌状部に延びるであろうという予測だけで明確でなかった。しかし今次第1トレンチの調査で狭い範囲ではあるが明確に築地遺構を検出し、さらに築地延長部の調査区外にも土手状の高まりが続いている。以上のことから神社北部の北辺外郭屈折部の位置が決定した。また築地崩壊後に溝状遺構、掘立柱建物が構築されており、これまでの外郭線調査検出遺構とはほぼ同様な規模、共伴関係にある。

第2～4トレンチの調査では、築地遺構は検出されず、トレンチを設定した土手状の高まりはすべて後世の土盛であることが判明したため今後の課題として第31次調査検出の築地遺構を追跡する必要性が生じた。

今次調査の遺物については築地崩壊土から多量の瓦が出土したので、これについてまとめる下記のようになる。特に問題となるのは格子目瓦が瓦層中に多量に含まれていることであるが繩目瓦との比率では繩目50に対して格子目瓦1である。これまでの外郭線の調査では崩壊土からの格子目瓦の出土例はない。秋田城では格子目瓦については、上層から出土

することや、同范型の格子目瓦が出土した昭和町「羽白目」遺跡では糸切り底の須恵器壺と共に伴する（註1）ことなどから比較的新しい時期の所産と考えられている。しかし今次調査で崩壊土瓦層から出土したことにより、築地の存続年代、あるいは城内における特に内城に接する北外郭線の性格等が新たに問題となってきた。また格子目瓦の年代についてもさらに検討を加える必要が生じた。いずれにしろ現段階では明確に遺構中から土器と共に伴して出土する例などはなく、今後資料の増加を待ちたい。

出土した格子目瓦の中に計5点刻印銘瓦が確認された。これまで秋田城では刻印型を「秋田瓦」、「高水」、「秋」の三種類と考えられている（註2）。今回確認された刻印記銘は、「秋」だけであるが、「秋」の字体、格子目の大きさなどがこれまで出土の記銘瓦と明確に異なるものが2点認められる。以上のことから刻印型は四種類になる。すなわち「秋田瓦」、「高水」、それに「秋」が二種類である。

註1 奈良修介・富樫泰時・鍋倉勝男「羽白目遺跡調査報告」『秋田考古学』第25号、昭和45年

註2 小松正夫、「秋田城出土瓦について」、『東北考古学の諸問題』東北考古学会編、昭和51年

III 第33次発掘調査

1) 調査経過

第33次発掘調査は、秋田市寺内字大畑を対象として5月22日から9月25日まで実施し、その調査面積は1,162 m²である。

調査地は県護国神社境内地区に位置し、昭和34年～37年には国営（現文化庁）による発掘調査が実施され、柵列、建物跡等の遺構が検出された。その結果、発見遺構や地形的条件から秋田城の政庁城内域と推定されている地域である。付近一帯の地質は、高位に位置しながら飛砂の堆積が認められ、その厚さは約1mに達する。

地区設定（グリッド）は、秋田城測量原点No10（X = +45.618・



第21図 第33次調査周辺地形図

$Y = -22.912$)を調査原点とした。

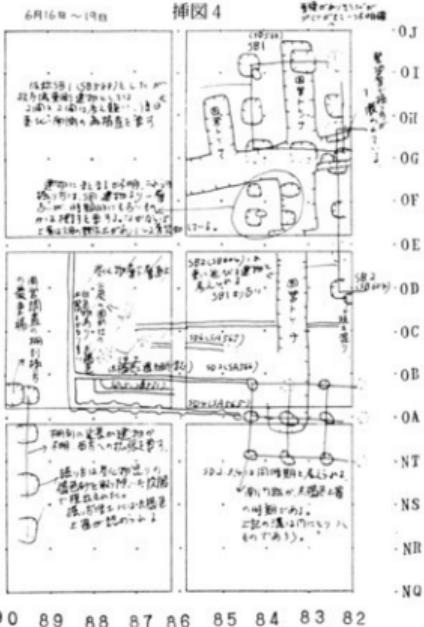
調査地内の表土剥ぎおよび国営調査トレンチ埋土除去作業は重機によって実施した。その結果、調査地南側では護國神社建築の際の整地およびそれ以前の畠耕作土が約1m程堆積していることが判明した。またさらに下層は黒色砂、北側では厚さ20cm~30cmの表土下は黄褐色砂、東側では粘質の褐色砂でいずれも赤褐色土器を多量に含んでいることが判明した(6月8日)。調査地南半の約半分は黒色砂から赤褐色砂となり、遺構は認められず地山飛砂層に近似する砂質を呈している。北半分については、黄褐色砂を除去した時点で炭化物の落ち込みが認められ、追跡した結果OD~OI-85~88グリッドにわたる長方形のプランが確認できた(SX 582)。また竪穴状落ち込みの炭化物層は、数センチの薄い間層を挟んで二層に大別できる。なお炭化物層およびその直上の赤褐色土には多量の赤褐色土器が認められた。OB-C-88グリッドで確認した旧トレンチ内底面(炭化物層)では、南北に延びる幅30cm程の溝状遺構が検出され(SA 564)、また東側では同トレンチ壁に数個の掘り方が確認され建物の存在が推測された(15日)。上述の掘り方を追跡した結果、2間×2間の建物跡(SB 588)が検出されたが、掘り方には重複が認められるところから北および東へ延びる可能性も考えられた。

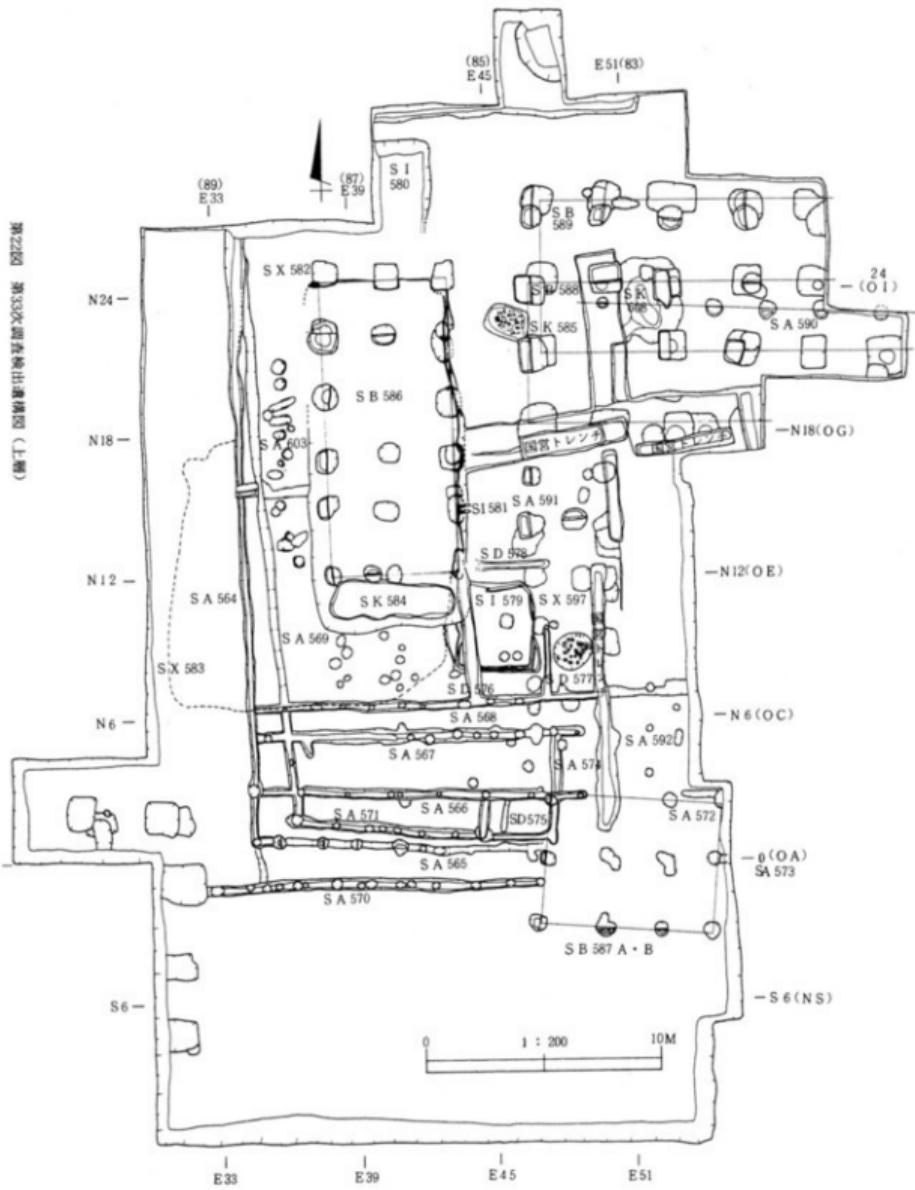
調査区中央部では東西に延びる3本の溝状遺構(南からSA 565, 566, 567)が検出され、精査の結果、前述のSA 564と同時期、しかも同じ一本柱列であることが確認された。また東西一本柱列のうちSA 565は東南部で

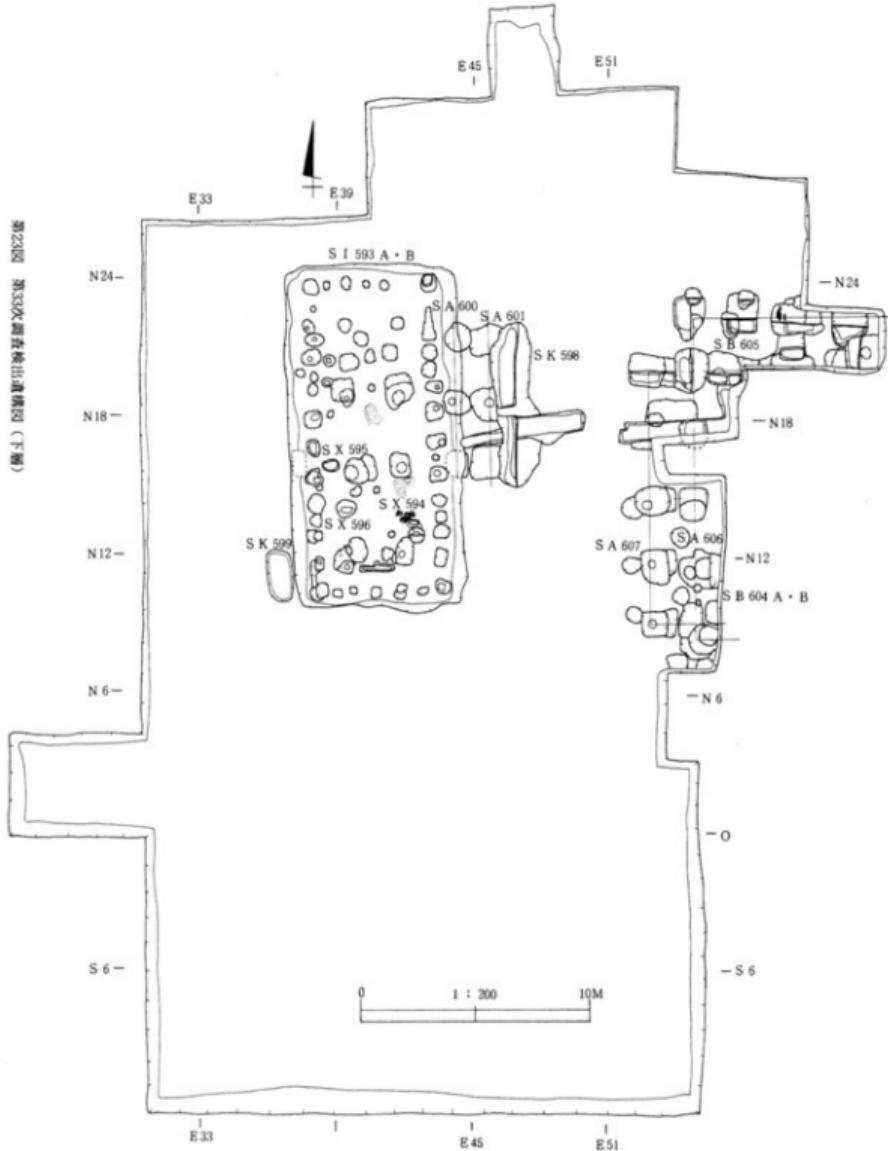
6月14・15日 挿図3

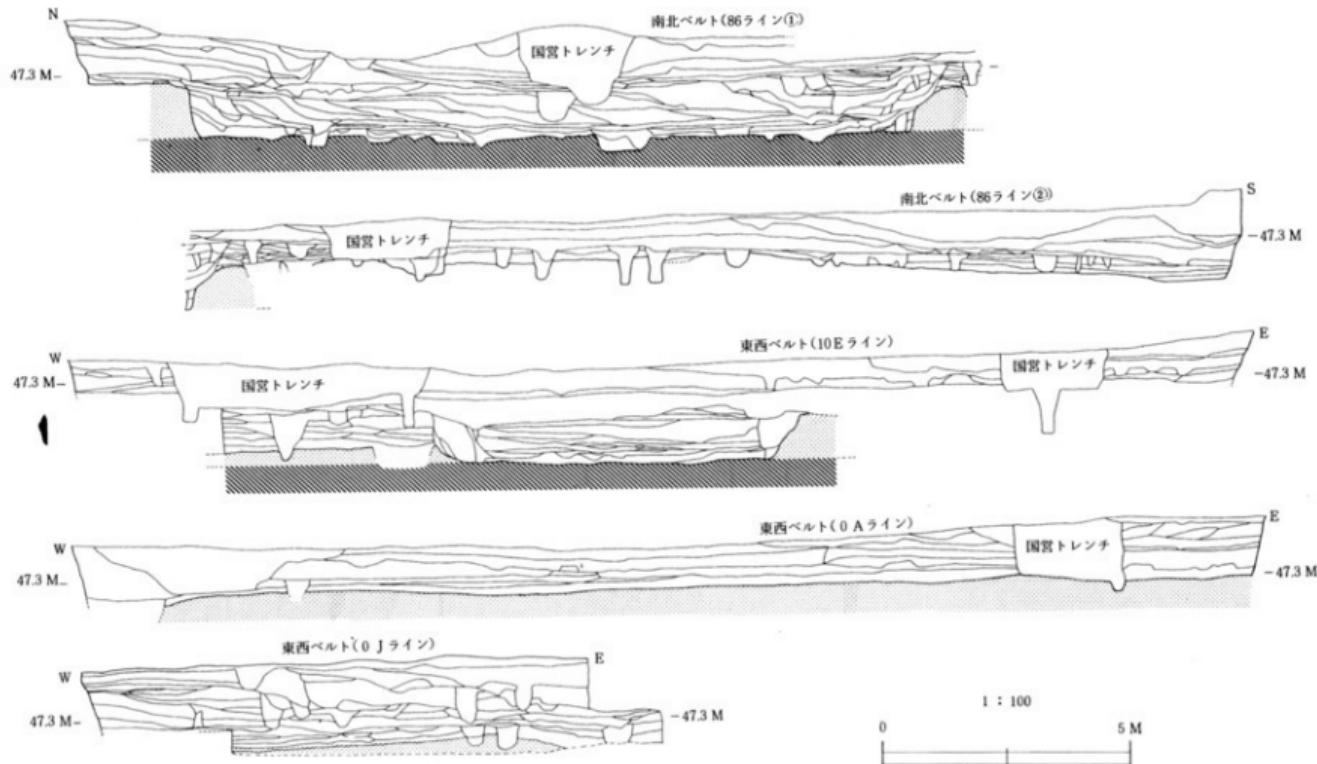


6月16日~19日 挿図4









第24図 第33次調査土層断面図

検出された2間×3間の総柱建物（S B 587）の棟持ち柱に取り付くことが判明したことから、建物と一本柱列は同時期と考えられる（19日）。前述のS X 582の西にもほぼ同規模の炭化物層が認められるが全容は不明である（S X 583）。北東部に検出されていた建物は重複が確認され、北東に各々拡張したところ南北2間×東西3間以上の東西棟であることが確認された（南側S B 588・北側S B 589）。全容を把握するにはさらに東方への拡張を要した（16日）。

S X 582の床面である炭化物層を除去した段階で黄色砂が認められ、さらにそれを掘り込んだ2間×4間の南北棟建物が検出された（SB586）（28日）。またSX582の南側で認められた落ち込みはSX582の古い時期の床面と考えられたが、調査の結果は東西に長軸を有するSK584土壌であった（30日）。

S B 586掘り方の基盤面である黄色砂を掘り下げ、さらに周囲の赤褐色砂を掘り下げた。その結果南北に長い竪穴住居跡S I 593 A・Bのプランが確認された。床面精査の段階で円形の焼土遺構が検出され、その周囲から多量の鉄滓と0.5 mm程の薄い鉄片（粉）が出土したことから、この炉跡は製鉄（鍛冶）遺構と考えられた（8月8日）。

S B 588、589は東方へ拡張した結果、さらに掘り方が検出され両者とも2間×5間あるいはそれ以上の東西棟建物であることが判明した（10日）。S B 588、589建物は赤褐色砂質土の整地層上に築造されているが、この整地層を除去した段階でS B 604、606の掘り方が新たに検出された。しかし両者とも南北の柱間が必ずしも明確ではなく規模については断定できない（21日）。

S B 605の西約4m付近で南北に長い土壌（S X 598）と、それに切られている掘り方3個（S A 601）、さらにS A 601を切る掘り方3個（S A 600）が検出された。南北に配列された3個の掘り方は、西へ延びる建物の可能性が皆無ではないが、とりあえず柱列として把握しておく（9月10日）。

調査地の西壁南半で検出された掘り方は、国営調査において確認されすでに調査済みのものであるが、数回の重複が認められることと、遺構が西に延びているため今次では存在の確認のみにとどめた。

9月19日には現地説明会を開催し、約200名の参加者を数えた。

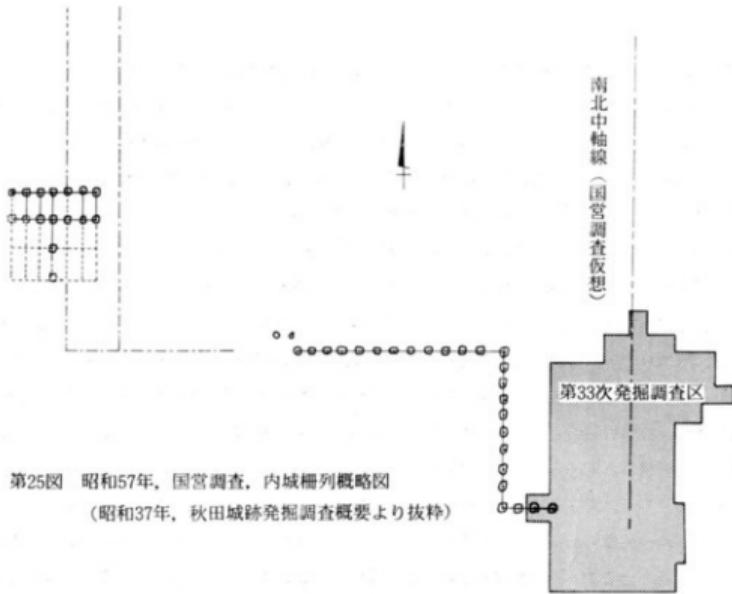
9月25日埋め戻しを終え、調査を完了した。

2) 検出遺構と出土遺物

検出遺構は建物跡、住居跡、柱列、溝跡、土壤跡である。

調査地の基本的な層序は褐色砂、赤褐色砂、炭化物層（焼土・粘土ブロックを含む）が主体をなす。しかし調査地全域におよぶプライマリーな層ではなく、すべて部分的でしかも薄い互層をなす場合が多い。したがって遺構掘り込み面確認作業あるいは遺物取り上げの層観察はきわめて困難であった。

そこでここでは、建物跡が集中する東側における粘質土による整地層を基準として遺構を上層遺構群、下層遺構群として記述することとした。なお整地層と連結する層、あるいは同じレベルと考えられる層には、S X 582竪穴状遺構が営まれている赤褐色砂および炭化物層がある。



第25図 昭和57年、国営調査、内城柵列概略図
(昭和37年、秋田城跡発掘調査概要より抜粋)

第25・26図は、昭和34年～37年に実施された国営調査検出の柵列跡・トレンチ図である。

上層遺構群（第22図・図版7）

S B 586建物跡（第27図）

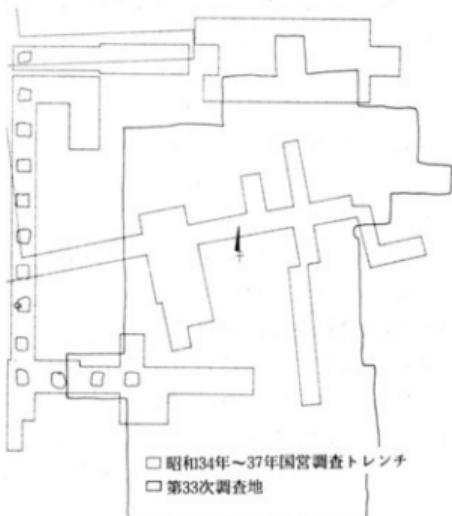
2間（北梁行 2.5 m + 2.5 m）

× 5間（西桁行北から 2.5 m + 2.6 m + 2.7 m + 2 m + 3 m）の南北棟である。柱間は比較的不ぞろいで、掘り方も円形に近い不整形である。掘り方は、S X 582 穫穴状遺構の炭化物層を除去した段階の黄（褐）色砂（西側は赤褐色砂）で確認された。

SB586出土遺物（第31図・図版28）

赤褐色土器：1は回転糸切りの壊である。口縁部外面に油煙によると思われる煤状付着物が認められる。

須恵器鏡：2は風字鏡である。



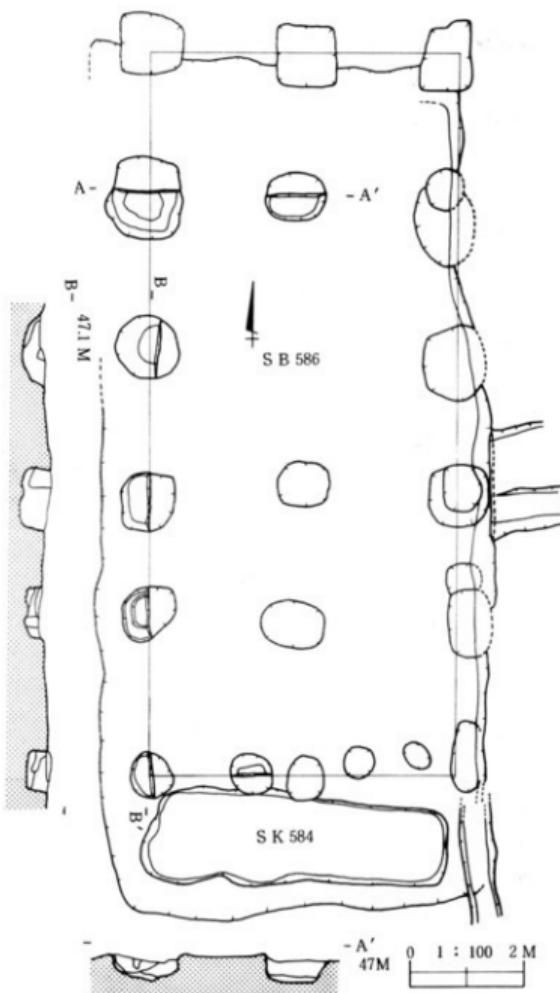
第26図 昭和34年～37年国営調査トレンチ

S B 587 A・B 建物跡
 (第28図・図版7)
 2間(西梁行北から2.5m+2.8m)×3間(南桁行西から2.8m+2.4m+2.2m)の東西棟建物である。方位は梁行が北で東に約6度振れる。赤褐色砂面で確認された掘り方は、径約60cm前後、深さ30cm~50cmの不整円形である。埋土はよごれた赤褐色砂で柱痕跡は検出できなかった。また数個の掘り方には重複が認められるが、いずれも小形で柱痕跡も不明である。

S B 587出土遺物
 (第31図・図版28)
 須恵器: 3は回転ヘラ切りの环である。

S B 588建物跡
 (第29図・図版8)
 2間(西梁行北から2.8m+2.9m)×5間(北桁行西から3.3m+2.5m+3.6m+2.7m+○)かそれ以上の東西棟建物である。

掘り方は薄い炭化物層下の砂質粘土面で検出された。埋土はやや粘質のある赤褐色砂である。柱痕跡は、平面で確認することは困難であるが断面では明瞭に認められるものもある。西梁行棟持柱掘り方は、多量の炭化物が混入するS A 590掘り方によって切られている。また多少不自然ではあるが、北桁行の北に検出されたS B 589を切る柱列は、本建物の廂あるいは建物付設の柱列とも考えられる。



第27図 S B 586 建物跡 S K 584 土壌跡

S B 588出土遺物

(第31図・図版28)

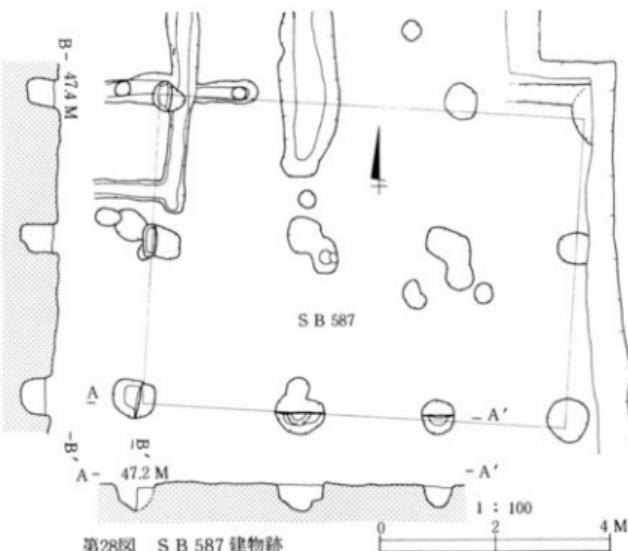
須恵器：6は蓋で、内面中央部は磨滅が著しく、また墨痕が認められることから硯に転用されたものと考えられる。

赤褐色土器：4・5は回転糸切りの坏である。

S B 579住居跡

(第29図・図版8)

S B 588建物より古く、1間分北に寄つている。規模・方位はS



第28図 S B 587 建物跡

B 588と同じと考えられる。掘り方も浅く埋土は粘質性がほとんどなくサラサラの褐色砂である。

住居跡

S I 579住居跡 (第32図・図版15)

一辺が約3.7 m程の方形である。西側はS I 593に切られており、残存部にはカマドは認められない。北・東・南の周溝は顯著であるが西は不明。住居跡に伴う柱掘り方は認められない。

S I 579出土遺物 (第34図・図版28)

須恵器：1～3は埋土出土坏である。1・2は回転ヘラ切り、3は回転糸切り、体部外面に粘土紐巻き上げ痕が認められる。2は内外面ともスペベしているがミガキ等の痕跡は見あたらない。

S I 580住居跡 (第33図)

西側は調査区外、南側は掘り過ぎのため規模は把握できなかった。北側は地山砂であるが確認面から床面までの深さは約60cmである。カマド・柱等は検出されない。

S I 580出土遺物 (第34図・図版28)

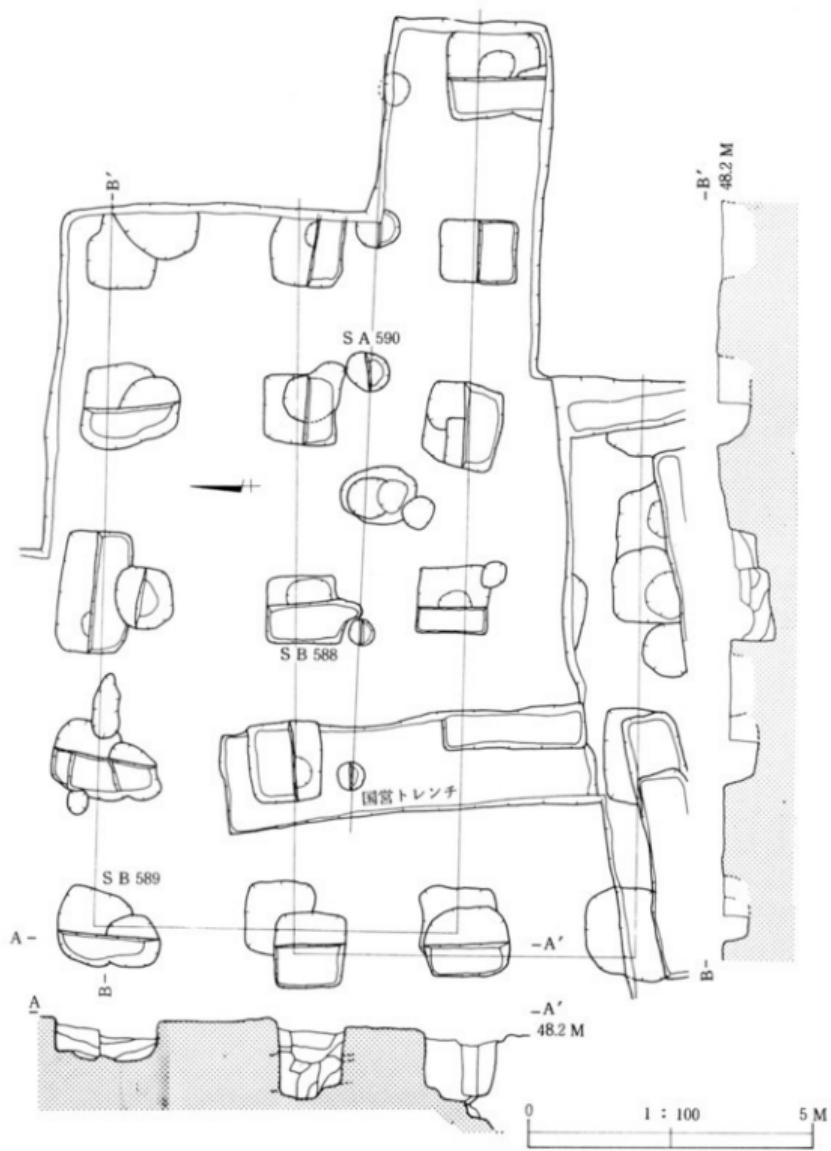
土器器：4は内面黒色処理を施した台付坏である。内面ミガキは中心に向って施されている。

S I 581住居跡 (第22図・図版14)

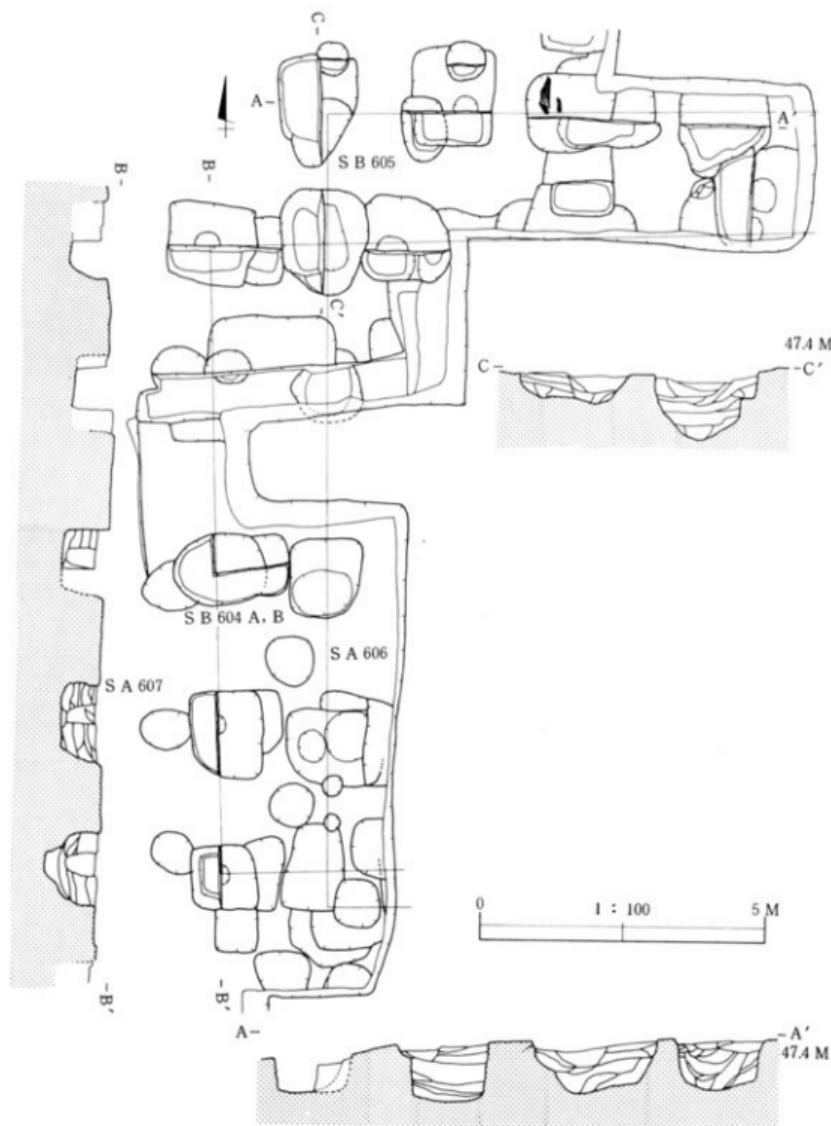
東向きのカマド煙道部のみの検出である。S I 593より新しいが、壁等は検出できなかった。

S I 593 A・B住居跡 (鐵冶工房跡) (第35、36、40図・図版11、14)

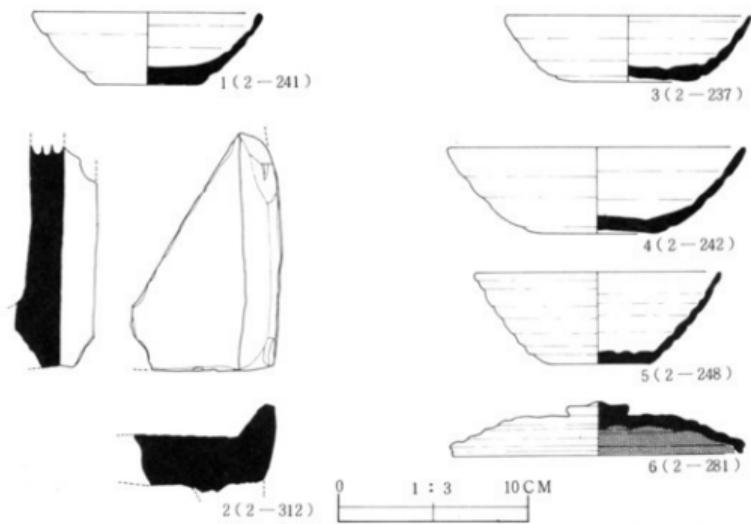
Bは東西約7.5 m、南北約15mの長方形の竪穴状を呈する。掘り込み面は赤褐色砂、深さは70cm



第29図 SB 588, 589 建物跡, SA 590 柱列



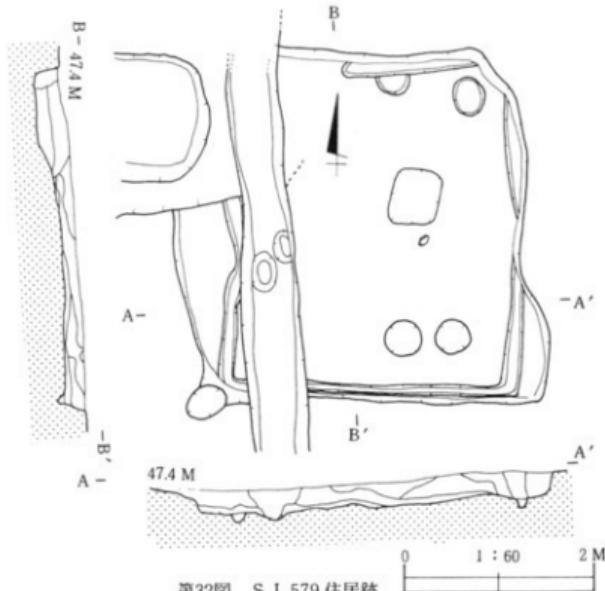
第30図 SB 604 A・B, SB 605 建物跡 SA 606, 607 柱列



第31図 S B 586, 587, 588 建物跡出土
1~2, S B 586, 3, S B 587, 4~6, S B 588

で床面は地山である黒色粘土層（寺内層=粘土・シルト層）に達する。

床面は炭化物と砂混りの粘土が薄い不整な互層をなし、一時期の面を明確にすることは困難である。また床面の數か所には焼土が確認され、特に東南コーナー近くには炉跡（S X 594）が検出された。S X 594は地山粘土面に黒色砂（黄色砂が地山黒色粘土面と接して変色したとも考えられる）、黄色砂を各々4 cm ~ 8 cm 敷き、さらに黄



第32図 S I 579 住居跡

色粘土を3cm～5cm張って炉床としている。また炉粘土周囲の相対する4カ所にフイゴ羽口をセットしたと考えられる凹が認められる。炉床は青灰色に、その周囲は赤褐色に焼けている。鉄滓と厚さ0.5mm程の鉄片（粉）は炉の西約40cmの位置から出土している。この鉄片出土により本炉跡は鍛冶の工房跡と考えられる。

床面で検出されたS X 595は、小規模な楕円形を呈し、壁が部分的に火熱を受け赤褐色に変色している。また隣接するS X 596は浅い鍋底状を呈し、底面には厚さ2cm程の炭化物（木灰のような）が堆積している。いずれも性格不明。

Aは東西約5.5m、南北約13mでBより一回り小形化している。Aの床面はBの床面とほぼ同じレベルにあり、Bの床面で検出された遺構の中にはAに伴う可能性のあることも否定できない。

出土遺物による比較ではA・Bの大きな時期差は考えられない。

S I 593 A・B出土遺物

図面上では出土遺物をS I 593・593 A・593 Bと分けてあるが、593出土遺物はA・Bの重複を確認する以前に出土したもので、本来はA・Bどちらかの埋土に入るべき遺物である。

（S I 593出土遺物）（第37図・図版29）

土師器：1は内面黒色処理を施したロクロ成形台付壺である。内外面に手持ちミガキを施している。

須恵器：2は回転糸切りの台付双耳壺である。3～5は回転ヘラ切り、6・7は回転糸切りである。4～7は転用鏡で内面はスペスペし、墨痕が認められる。8は転用鏡の蓋である。

赤褐色土器：9は回転糸切り後、体部下端に回転ケズリを施した壺である。

（S I 593 A出土遺物）（第37図・図版29）

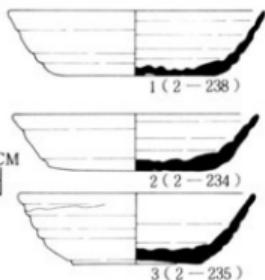
10、12、14は床面、それ以外は埋土から出土している。

須恵器：10、15は鉢である。内外面をハケ（布）状の工具による回転の整形。15は体中央部以下に斜方向の手持ケズリが施されている。11、12は回転ヘラ切りの壺である。いずれも鏡に転用されているが、11は墨痕、12はベンガラである。13は転用鏡の蓋である。

赤褐色土器：14は回転糸切りで、内面はスペスペしており墨痕も認められることから転用鏡と考

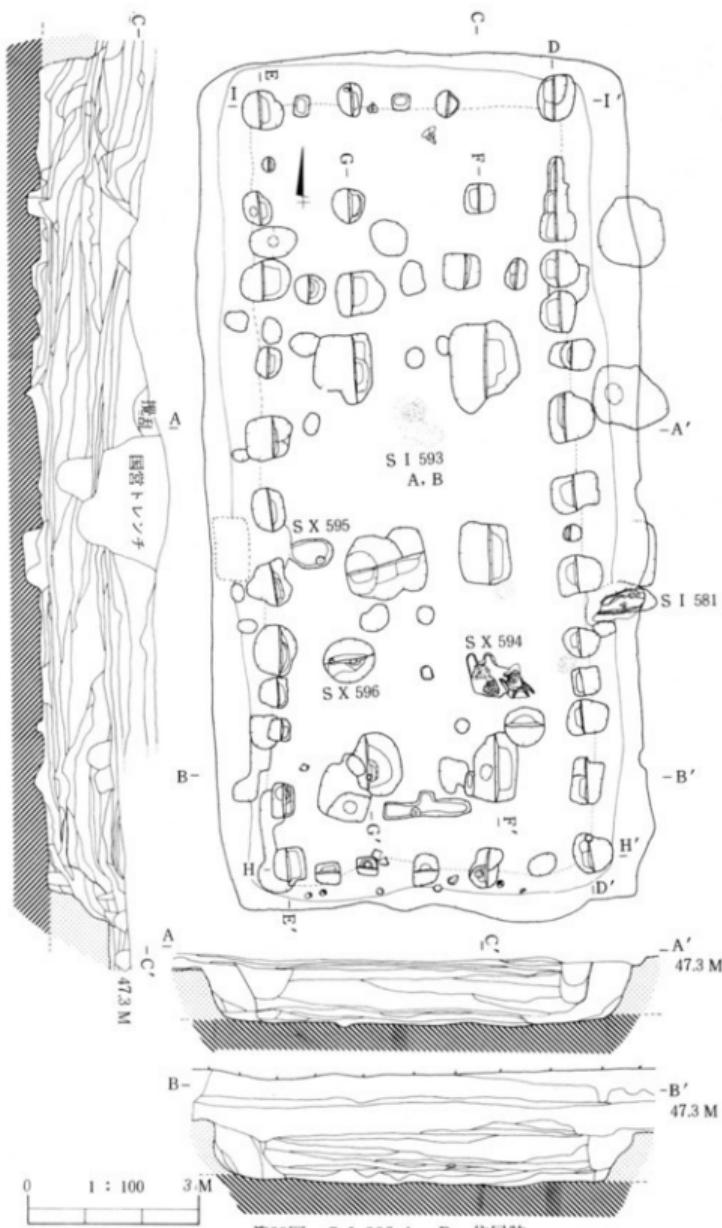


第33図
S I 580 住居跡

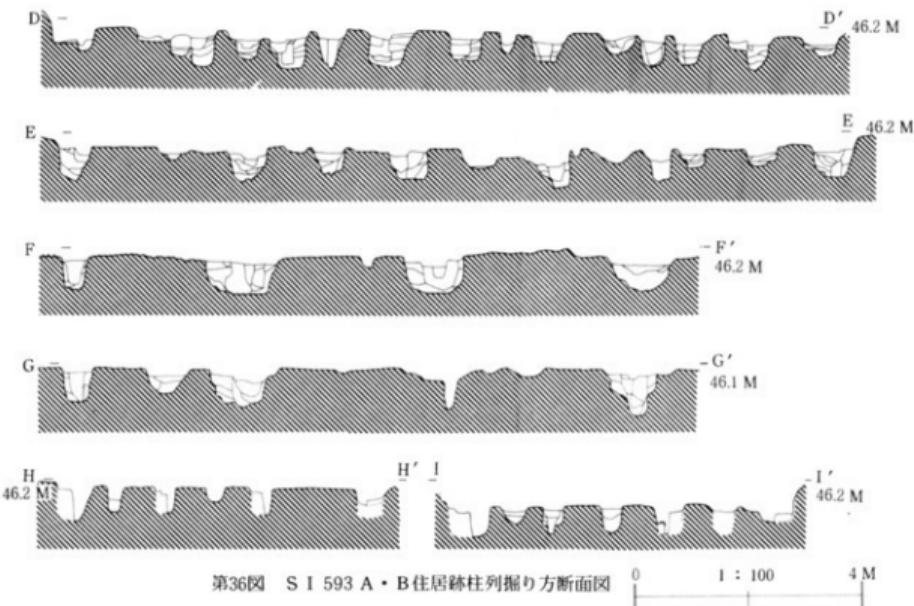


1(2-238)
2(2-234)
3(2-235)
1～3 S I 579
4 S I 580

第34図 S I 579, 580 住居跡出土遺物



第35図 S I 593 A・B. 住居跡



第36図 S I 593 A・B住居跡柱列掘り方断面図

えられるが、須恵器以外のものはきわめて少例でありめずらしい。

(S I 593 B出土遺物) (第38図・図版30)

6は床面、8は掘り方内、それ以外は埋土からの出土である。

土器：1は黒色処理の施された蓋である。内外全面に回転ミガキあり。

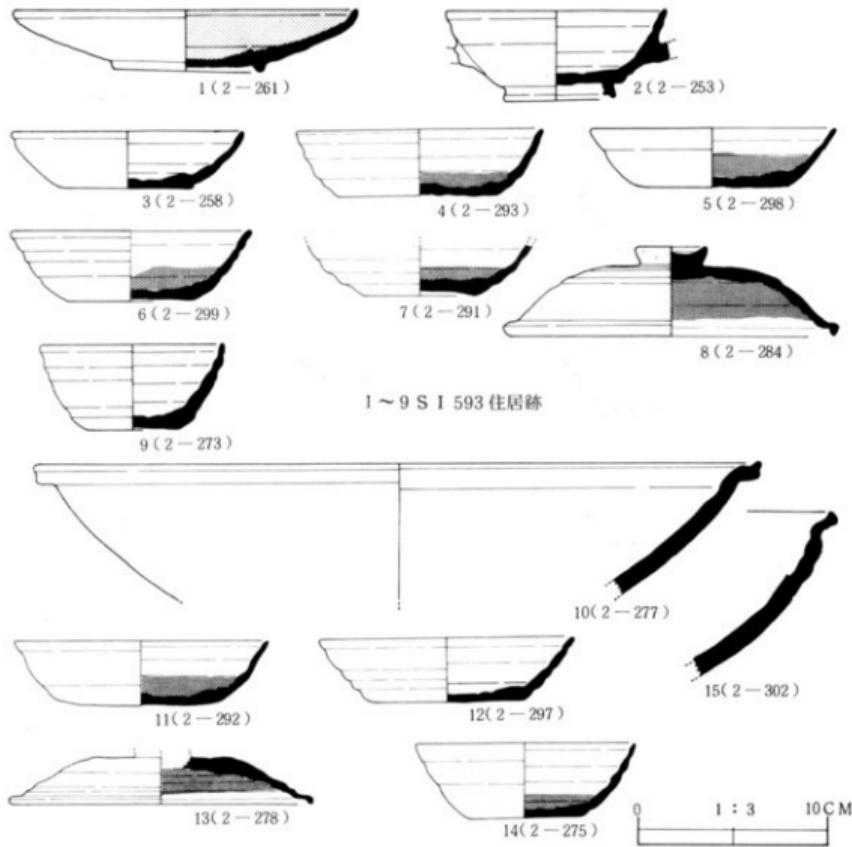
須恵器：2、4は回転糸切りの坏である。4は内面を硯に転用している。5は肩部に回転ケズリを施した蓋で、内面は硯に転用している。

赤褐色土器：6は台部を硯に転用している。7、8は回転糸切りで、8は体部下端に回転ケズリが施されている。また底部中央部には内面径1.2 cm、外面径0.5 cm程の小孔が穿たれている。

その他の出土遺物 9はS X 594付近出土の羽口である。先端部は粘土内ガラス質が溶解しアメ状になっている。

S X 582豊穴状遺構 (第22図・図版10)

長径12m、短径7mの範囲に土器片(赤褐色土器)を多量に含んだ炭化物面である。またその周囲には幅約30cm~70cm、厚さ2cm~10cmの黄褐色粘土が部分的に取り巻いている。明確な掘り込み面は不明であるが、壁と考えられる落ち込みは北・東において認められ、西・東の一部と南については国営調査時に除去されており不明である。炭化物を除去した面には数ヶ所に薄い焼土面が認められた。



第37図 S.I. 593, 593 A住居跡出土遺物 10~15 S.I. 593 A住居跡

S.X. 582出土遺物（第39図・図版30, 31）

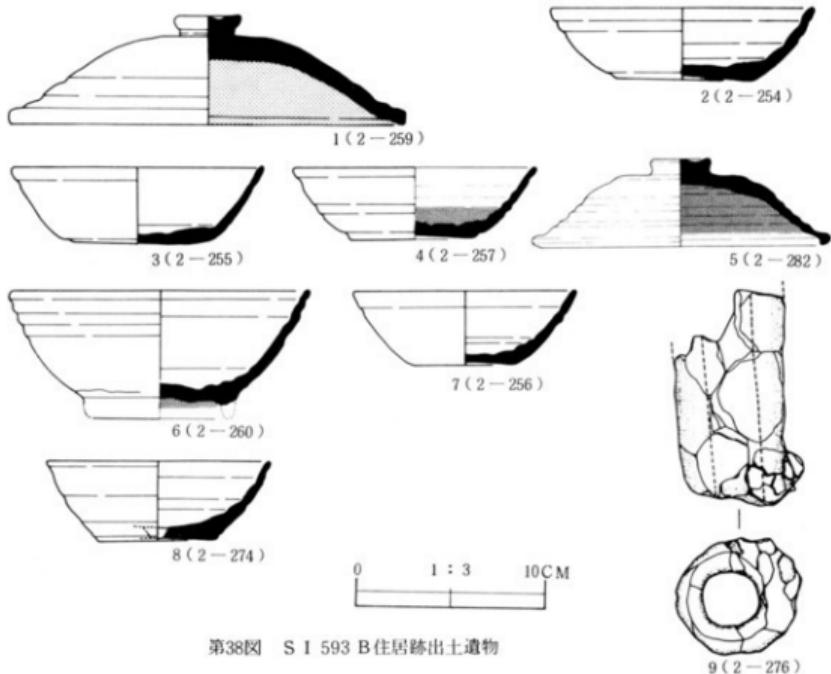
須恵器：1～3は台付坏である。1は内面見込部、2, 3は外面底部を硯に転用している。1は焼成・胎土がきわめて良好で、また作り、器形も洗練されている。

赤褐色土器：8～10, 14は浅い皿状を呈す。15は鉢である。

須恵器硯：16, 17は円面硯である。

S.X. 583整穴状遺構（第22図・図版7）

炭化物と遺物出土状況は前述のS.X. 582と類似するが、プランについては西側で壁と思われる粘土の一部を確認できた他は明確にできなかった。S.X. 582によって東は切られている。



第38図 S I 593 B住居跡出土遺物

土壤

S X 597 土壌跡 (第41図・図版14)

径約1.7 mの浅い鍋底状の落ち込みである。底面には2 cm～こぶし大の鉄滓が多量に遺存している。底面の状態あるいは周囲の状況からして製作場ではなく、廃棄場と考えられる。

一本柱列

一本柱列としたものは、30cm～50cmの布掘り内に円形の掘り方が認められるものである。内部の掘り方は、30cm～60cmで布掘りの幅より広いものもある。

S A 564 柱列跡 (第22図・図版6、7)

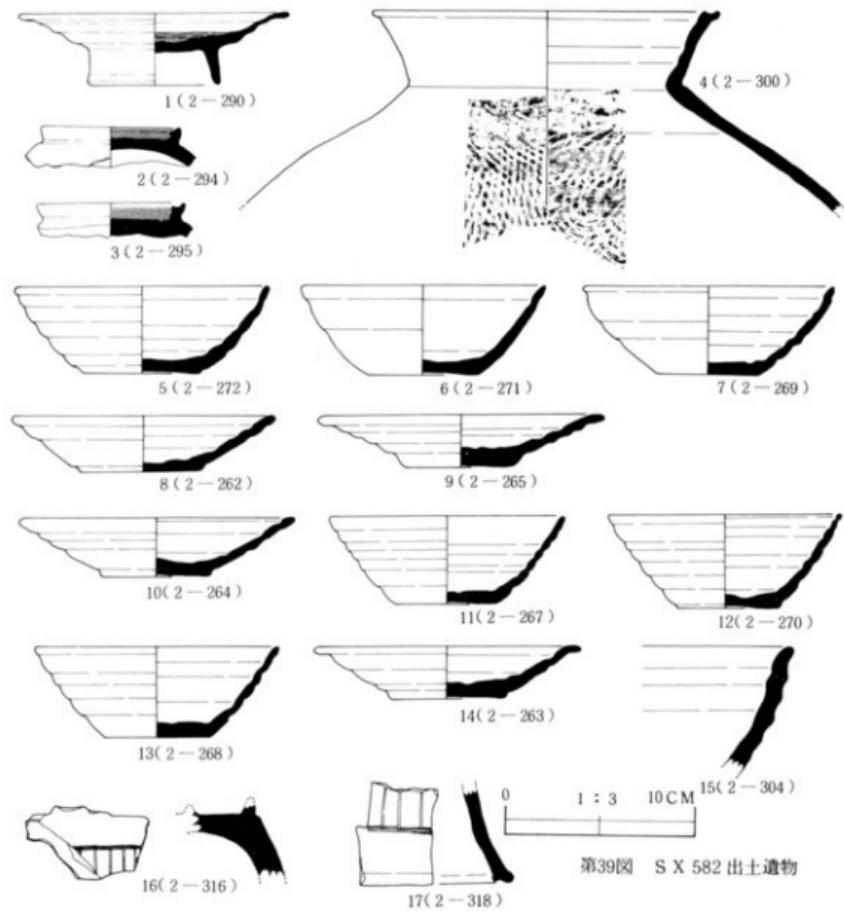
南北に延びる柱列でやや西に偏す。間尺は遺存状況の良好な南側についてみると2 m～2.5 mである。布掘りはS X 582, 583の炭化物層を切っている。

S A 564 出土遺物 (第43図・図版31)

須恵器 1は回転ヘラ切りの坏である。口縁部外面には油煙状の煤が付着している。

S A 565・566・567 柱列跡 (第22図・図版10図)

S A 564の南端から東方に延びる柱列である。各々2.3 mの間隔で東西方向に平行して延び、S



第39図 S X 582 出土遺物

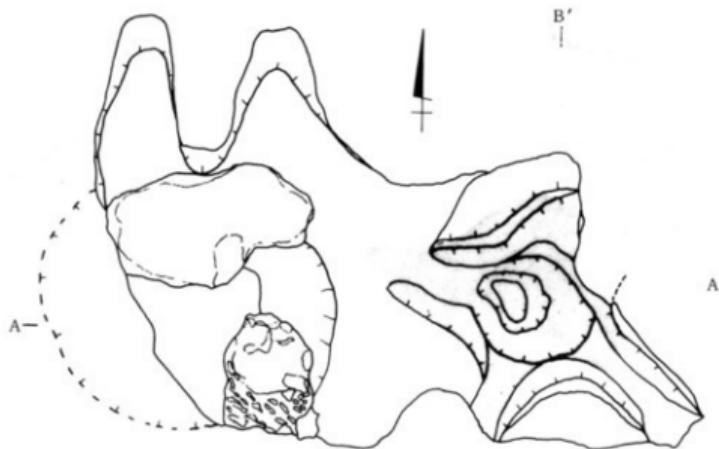
A 565はSB 587の西梁行棟持柱に取り付き、S A 566は同北柱に取り付く。またS A 566、567は西梁行より一間(1.2 m)程さらに西に延びる。間尺は不規則で70cm~2mである。埋土はサラサラの褐色砂、柱痕跡は不明瞭である。

S A 567出土遺物(第43図・図版31)

赤褐色土器: 2は回転糸切りの壊である。内面はロクロによる凹凸はあるものの器面はスベスベしている。

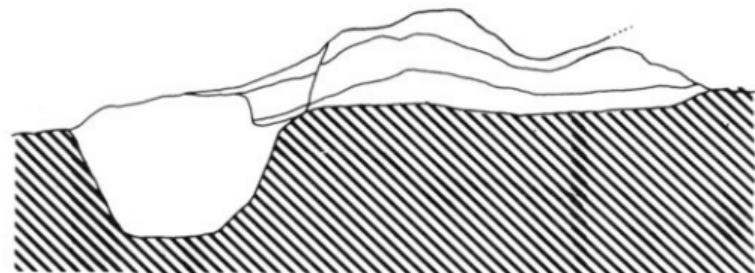
S A 569柱列跡(第22図・図版10)

東西に延びる柱列である。遺構確認面はS A 564~567と同じであるが、同時存在したかどうかは不明である。布掘り内の掘り方はほぼ1.3 m間隔で最も規則的である。

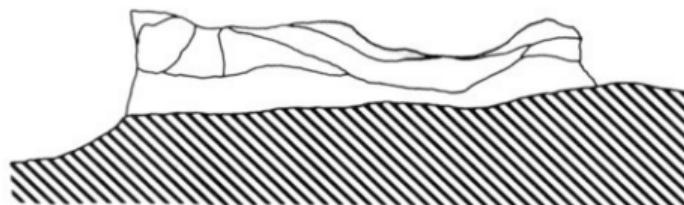


0 1 : 10 50 CM

— A — 46.3 M — B — A'



— 46.3 M — B —



第40図 S X 594 錫冶遺構 (炉跡)

S A 569柱列跡

(第22図・図版6)

南北に延びる柱列で、南端は前述の S A 564 とほぼ同位置で東に屈曲するが、全体の西への傾きは大きい。掘り込みプランは S X 583 の炭化物を除去しないと検出できない。S A 566・567 より古い。

S A 570柱列跡

(第22図・図版10)

東西に延びる最南端の柱列で、西は調査区外に、東は S B 587 西梁行で止まる。掘り込みは前述の S A 565 より一層下層（褐色砂）で検出された。布掘り内の掘り方は、1.3 m～1.5 m 間隔で認められるが、近接しているものもあることから部分的な柱の建替が行われたものと考えられる。

S A 571柱列跡

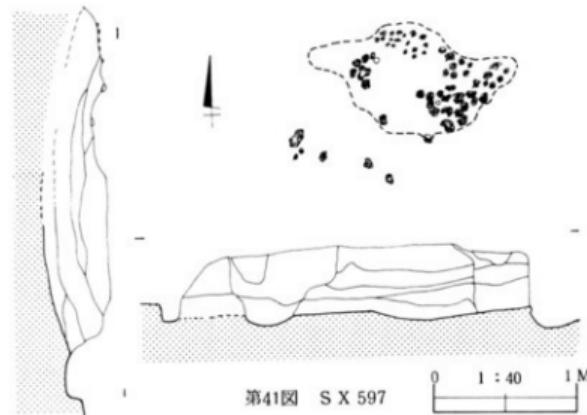
(第22図・図版10)

S A 569 の南端で東に屈曲し、S B 587 の西梁行で止まる。埋土は赤褐色砂でサラサラしている。

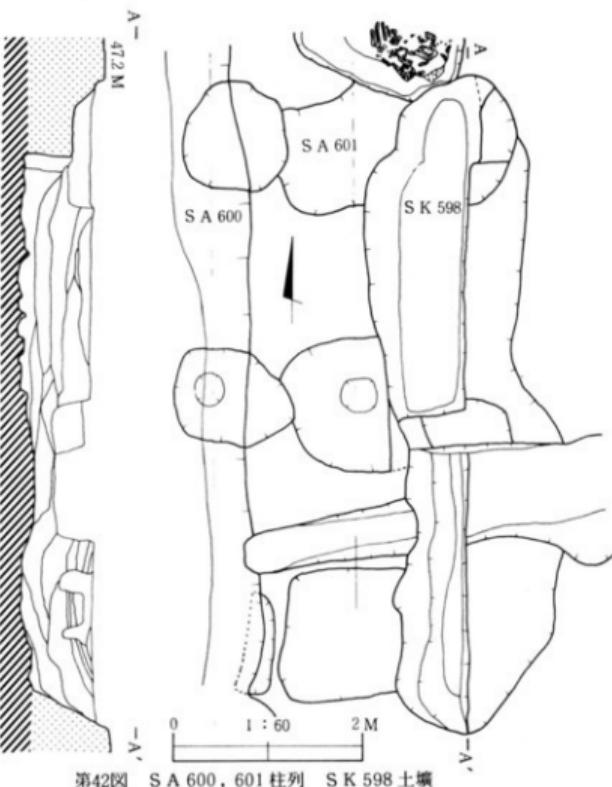
S A 571出土遺物

(第43図・図版31)

鐘瓦：3 は細弁蓮華文鐘瓦片である。内面は繩の叩



第41図 S X 597



第42図 S A 600, 601 柱列 S K 598 土壤

き目、頭接合部はナデ成形である。

S A 572 柱列跡 (第22図・図版10)

S A 566の延長と考えられる。

S A 574 柱列跡 (第22図・図版10)

S B 587, S A 575~577と同時期と考えられる。

他の柱列と比較して上面幅がやや広い。

S A 590 柱列跡 (第22, 29図・図版8)

布掘りを伴わない一本柱列である。東西に6間(○+2.7m+2m+2.3m+2.3m+○)検出されている。西端はS B 588北西コーナー掘り方を切り、東はグリッド北壁で確認されている。いずれの掘り方にも炭化物が多く混入している。遺構群の中では最も新しいものである。

溝 跡

S D 576 溝跡 (第22図)

S I 住居跡の西側を南北に切断する形で延びている。北側ではS I 593を切っているが、埋土がきわめて似ておりどこまで延びるかは確認できなかった。SK 584 土壌より新しい。

S D 576 出土遺物 (第43図・図版31)

須恵器：4は回転糸切りの蓋で、内面は硯に転用されている。墨痕が多いが、擦痕はわずかであり、あまり使い込まれていない。

土 壤

S K 584 土壌跡 (第27図)

S I 593の南壁と同時に検出された東西に長い土壌である。埋土は炭化物と焼土を含んだ黒褐色砂が互層をなしている。S I 593より新しく、S X 582より古い。性格は不明である。

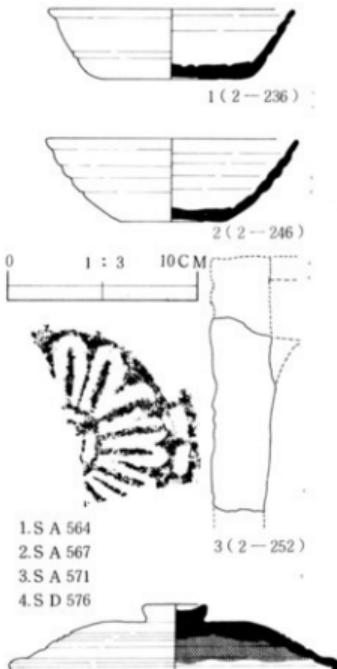
S K 584 出土遺物 (第44図・図版31, 32)

土師器：1は床面出土の黒色処理を施した壺である。回転糸切りで、内外全面に回転ミガキを施している。

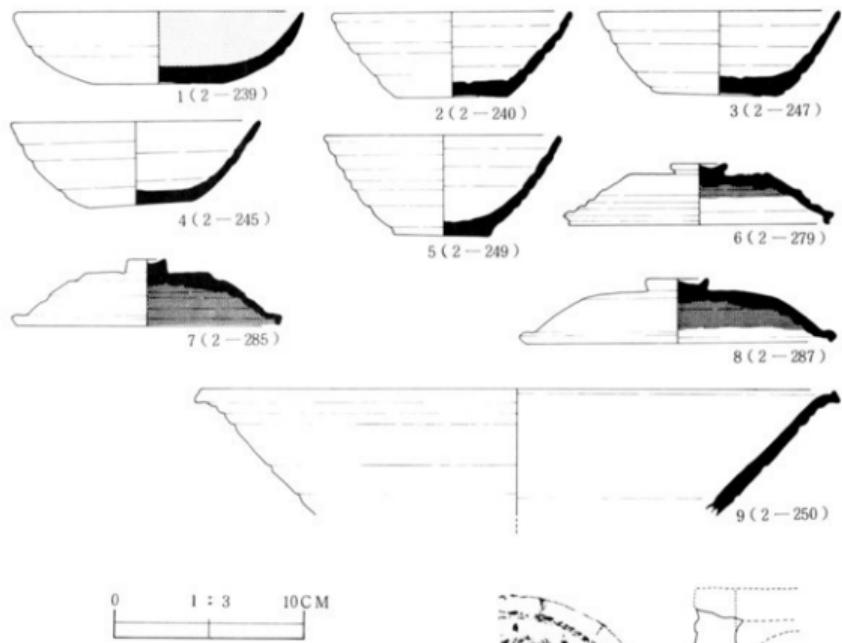
須恵器：6~8は蓋で、いずれも内面は硯に転用されており磨滅痕と墨痕が認められる。6, 8は肩部に回転ケズリが施されている。

赤褐色土器：2~5は回転糸切りの壺で、内面のロクロによる凹凸が少ない。9は鉢である。

鏡瓦：10は細弁蓮華文鏡瓦である。内面は繩の叩き、頸部は補強粘土が剥落し丸瓦接合時の指圧



第43図 S A 564, 567, 571 柱列,
S D 576 溝跡出土遺物



第44図 SK 584 土壌出土遺物

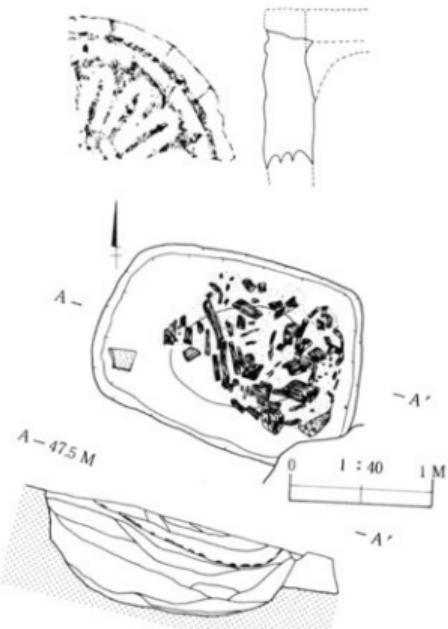
痕が認められる。

S K 585 土壌跡 (第45図・図版15)

梢円形の土壌で、底面までは深さ65cmであるが、その中間程には板材の細片と考えられる炭化材が約3cmの厚さで認められる。しかし焼面が壁の一部にしか認められず、土壌がある程度埋没した段階でまだ完全に火が消えない材を投げ込んだものと考えられる。性格は不明。西壁近くで焼けた繩目瓦(平瓦)が出土している。

下層遺構群 (第23図・図版6)

下層遺構群としたものは、調査東側の砂質粘土整地層の上層を除去した段階で検出された建



第45図 SK 585 土壌

物および地山飛砂層上で検出された遺構を指す。

S B 604 A 建物跡（第30図・図版9）

東西2間（北梁行西から3.2m+○）かそれ以上×南北4間（北から2.9m+2.9m+2.6m+2.6m）の南北棟と考えられる。方位はほぼ真北を指す。掘り方はほぼ方形を呈し、柱痕跡は径30cm～40cmの円形である。埋土は粘質土（砂混り）である。前述のS B 588, 589の掘り方は本建物の約50cm上面で確認されている。

埋土からは図示し得なかったが赤褐色土器の小片が出土している。

S B 604 B 建物跡（第30図・図版9）

Aによって切られている。間尺はAと同じであるが建物全体が掘り方半分程東に寄っている。規模・方位はAと同じと考えられる。Aとの顕著な相違は掘り方内の埋土である。

すなわち、A掘り方埋土が粘性的砂質土であるのに対し、Bは大部分が黄褐色粘土であり、一部間層として砂質土が混入する程度である。

S B 605 建物跡（第30図・図版9）

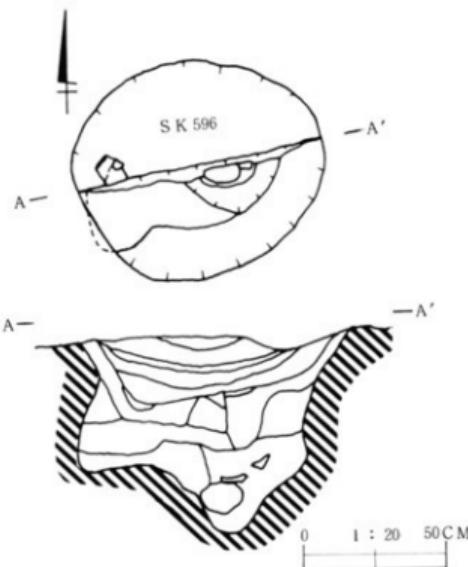
東西3間（西から2.3m+2.3m+2.3m）かそれ以上×南北5間（2.5m+2.5m+3m+3m+3m）かそれ以上の建物ではほぼ真北を指す。掘り方検出面は砂混りの粘質土を除去した地山飛砂層上で、調査区内では最も古い時期の建物に相当する。掘り方内の埋土はやや軟弱ではあるが、粘土黄褐色砂が互層をなし、掘り込みも確認面より約1mと深い。しかし南北柱列は柱筋は通るもの、間尺が不規則、掘り方規模、形状の相違など疑問が残る。

S A 600 柱列跡（第42図・図版9）

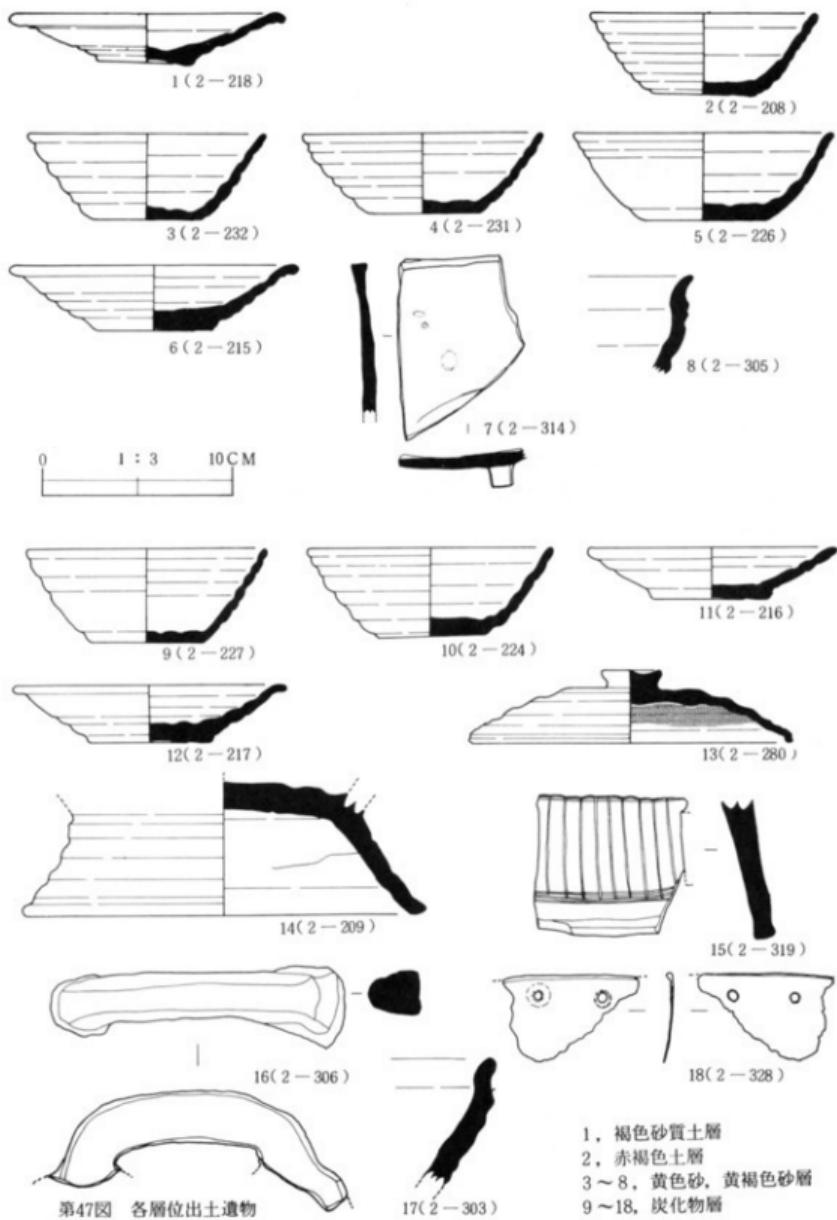
地山飛砂層上で南北に3個、S I 593に切られた形で検出された。掘り方は円形に近く、埋土は粘土ブロック混りの褐色砂である。

S A 601 柱列跡（第42図・図版9）

S A 600の東に位置し、掘り方の一部はS A 600とS K 598に切られている。埋土は軟弱な褐色砂である。検出状況から柱列としたが、両柱列とも西に延びる建物の可能性も皆無ではない。



第46図 SK 596 土壌



第47図 各層位出土遺物

1. 褐色砂質土層
2. 赤褐色土層
3~8. 黄色砂、黄褐色砂層
9~18. 炭化物層

S K 598 土壙跡（第42図・図版9）

地山飛砂層上で検出された南北に長い土壙である。底面は黒色粘土層（寺内層=粘土・シルト層）に達している。

S K 599 土壙跡（第23図・図版6）

最下層で検出されたが出土遺物はなく性格は不明である。

S K 608 土壙跡（第22図・図版9）

不整形を呈し、床面も凹凸が激しく人為的なものかどうか不明である。地山飛砂層で検出されている。

3) 各層位出土遺物

褐色砂質土層出土遺物（第47図1、図版32）

赤褐色土器：坏一回転糸切り、無調整。体部が強く外反し、皿形を呈する。

赤褐色土層出土遺物（第47図2、図版32）

赤褐色土器：坏一回転糸切り、無調整。胎土に砂粒が混り、やや荒い。焼成は良好である。

黄色砂褐黄・色砂層出土遺物（第47図3～8、図版32）

赤褐色土器：坏一3～6はいずれも回転糸切り、無調整。6は体部が強く外反し、皿形を呈している。いずれも胎土、焼成とも良好である。鉢一8は口縁部破片である。内外面ともロクロ痕が顕著である。

須恵器：硯一17は風字硯である。脚部は1.1cmを計り、四面の面取りを行っている。墨痕はわずかに残っている。

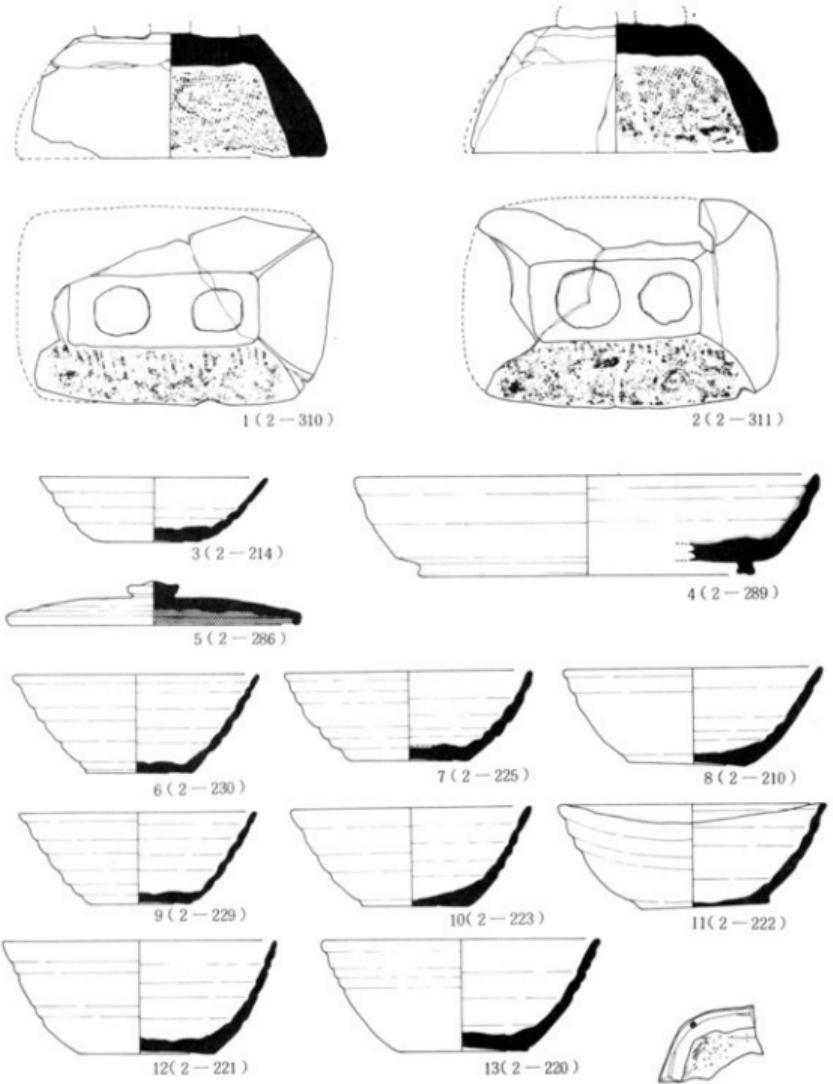
炭化物層出土遺物（第47図9～18、第48図1～2、図版32、33）

須恵器：蓋一13は切り離し不明、無調整。低い擬宝珠状の鉢をもち、その周辺には回転ケズリを施している。天井部から体部中央下半にかけて墨痕が残っており、擦痕が確認されることから、転用硯として使用されたものと考えられる。硯一15は円面硯の脚部で、ヘラ描きによる細い沈線が施され、また長方形の透かし窓と考えられる切り込みがみられる。

赤褐色土器：坏一9～12はいずれも回転糸切り、無調整。11、12は体部が強く外反し、皿形を呈している。台付鉢一14は台部と考えられる。内面には粘土紐巻き上げ痕がみられる。胎土には1mm～2mmの砂粒を含んでおり、焼成は良好である。鉢：17は口縁部破片である。

その他の遺物：16は須恵器質の把手と考えられる。胎土中にはカーボン質の黒色粒子が多く混入している。他の部分からの剥脱品か。18は銅製の鉢または杯と考えられる。体部上部には穴を穿ち、把手もしくは鉢を付けたものか。内面には穴の周辺に剥脱した痕跡がみられる。

屋根形土器一1、2はいずれも赤褐色を呈する。外面は天井部を除き全面に縦方向の叩きを施している。一方内面には全面に布目痕があることから型によって成形されたものと考えられる。上部には欠損しているが、把手または鉢と考えられる二ヶ所の突起痕がある。胎土は小砂粒が多く、ま



第48図 各層位出土遺物

1 ~ 2 炭化物層

3 ~ 15 赤褐色砂層

0 1 : 3 10 CM

た焼成もやや不良である。

赤褐色砂層出土遺物 (第48図3～15、第50図1～3、図版33、34)

須恵器：壺—3は回転糸切り、無調整である。胎土に少量の砂粒を含むが焼成は良好である。台付鉢—4は底部切り離しは不明であるが、台貼り付け後に周縁部にナデを施している。内面全体にベンガラ状の赤色付着物が残存している。蓋—5は回転ヘラ切り、無調整。内面全体に墨痕が残り、さらに天井部から体部中央にかけて擦痕が確認されることから転用硯として使用されたと考えられる。硯—14は円面硯脚部で、ヘラ描きによる細い横の沈線、長方形の透かし窓と考えられる切り込みがみられる。15は風字硯で、全体に薄手に成形されているが脚部は不明である。

赤褐色土器：壺—6～13はいずれも回転糸切り、無調整で胎土、焼成とも良好である。11は大きな歪みを生じている。

須恵器—1は灰黒色を呈し、外面はケズリの後、ナデを施し、一方内面は成形後ナデを施している蓋状の土器である。上部には欠損しているが、把手または鉢と考えられる突起痕がみられる。胎土には1mm～2mmの砂粒を含んでいる。

石製品—2は五面使用の砥石である。上部は欠損しているが、擦痕が多くみられる。凝灰岩製。

石器—3は頁岩製の石鎚で、底辺がわずかに内湾している。長さ4.1cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm。褐色砂質土層出土遺物

(第49図、図版32)

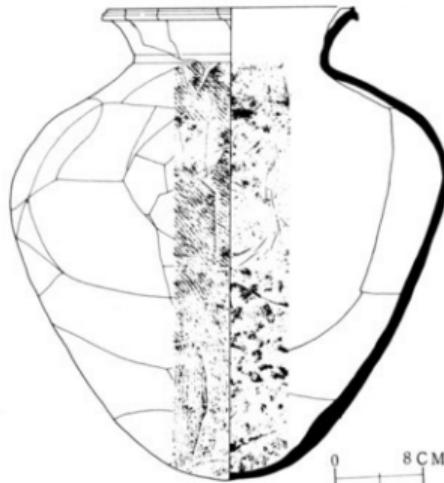
須恵器壺—丸底を呈するもので、口縁部直徑22cm、胴部最大径38cmを計る。外面は左から右下がりの条線状叩き板痕、内面は当て具痕をナデで整形しているか、もしくは無文の当て具と考えられる。口縁部は内外面ともナデ、底部には焼き台痕跡が認められる。

暗褐色砂層出土遺物

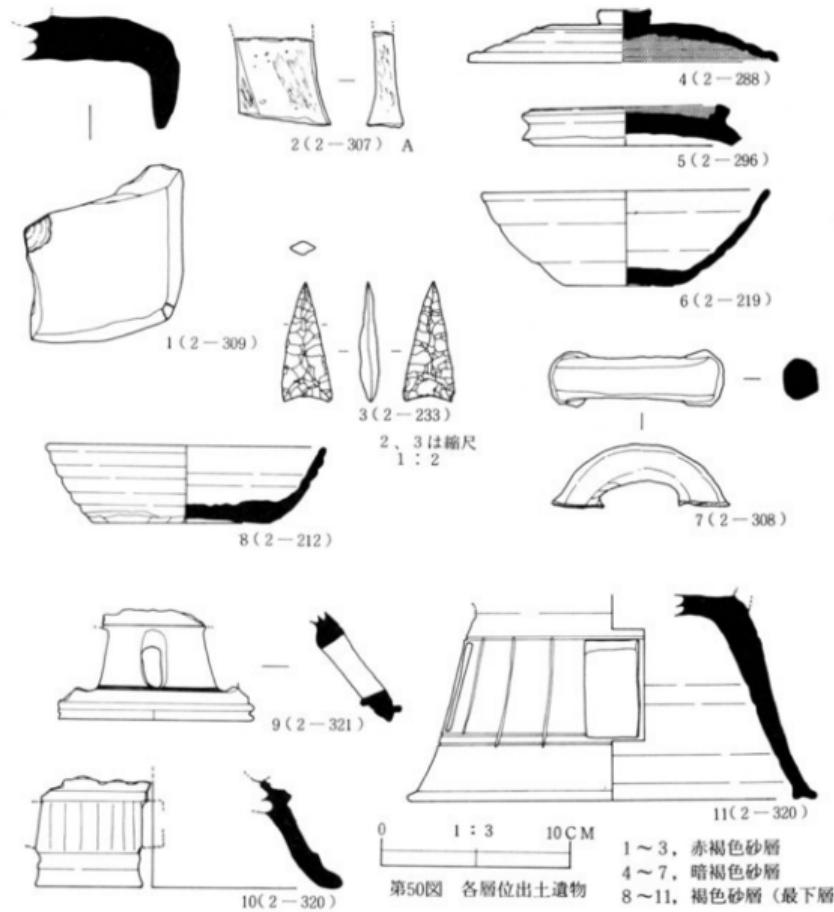
(第50図4～7、図版34)

須恵器：蓋—4は切り離

し不明で、鉢周辺に回転ケズリを施している。内面全体に墨痕が残っており、また天井部から体部下半にかけて擦痕が確認されることから、転用硯として使用されたと考えられる。長頸壺—5は長頸壺台部である。台部の周囲を打ち欠き、また打ち欠いた一部をさらに擦って整形している転用硯



第49図 各層位出土遺物褐色砂質土層



と考えられる。台部の切り離しは不明。胎土、焼成とも良好である。

赤褐色土器：壺—6は回転糸切り、無調整である。体部は底部からやや内反して口縁部にいたる。やや軟質の焼成である。

その他の遺物—7は須恵器質の把手と考えられる。胎土、焼成とも良好である。他の部分からの剥脱品か。

・色砂層出土遺物（第50図8～11、図版34）

須恵器：壺—8は回転ヘラ切りによる切り離しで、底部外面下端に部分的に手持ちケズリを施している。壺—9～11はいずれも円面壺である。9は脚部で楕円形の透かし窓の切り込みがあり、3

～4個を一単位として脚部に3～4単位めぐるか、あるいは1個ずつ独立しているかのいずれかが考えられるが、10個以上存在すると考えられる。透かし窓の下端にはヘラ描きによる細い横の沈線がみられる。10は同じく脚部で、上部には海部と陸部を分ける突起が若干残存する。長方形を呈する透かし窓の切り込みがあり、その数は7～8個と考えられる。またヘラ描きによる縦の細い沈線がみられる。11は長方形を呈する透かし窓の切り込みがあり、その数は5個と考えられる。透かし窓の上部に一本、下部に二本のヘラ描きによる横の沈線、また三本の縦の沈線がみられる。

4) 墨書土器と転用硯

墨書土器（第51～56図、図版35～41）

墨書土器は、住居跡、掘り方、溝、各層から、104点出土している。このうち判読可能（字形の一部を欠くが推測できるものを含む）なもの62点、不明または判読不能なもの42点となっている。大部分は壺類で95点、蓋が8点、甌が1点となっている。

これらの墨書の銘記場所を分類してみると底部外面が64点と最も多く、次に体部外面32点、蓋外面5点、蓋鉢1点、甌内面1点、また体部から底部にかけて墨書されたもの1点となる。

出土地点をみた場合、S I 593 住居跡の埋土・床面等から不明のものも含めて29点、またその上層にあたるS X 582・583 竪穴状遺構埋土とその周辺より不明のものも含めて21点出土している。まとまって出土したわけではないが、出土墨書総数の約半数がS I 593 住居跡とその上層遺構から出土していることがわかる。

墨書土器全体からみた文字別数量は、「厨」が16点と最も多く、次いで「大」3点、「酒」2点、「官」2点という順序でその他の文字は多岐にわたっている。特に興味をひくのは「厨」がS X 582・583 竪穴状遺構、S I 593 住居跡より最も多く出土していることである。

内容についてみると、使用場所をあらわすと思われるものに、「官厨」「酒所」「鎮」「軍穀所」があげられる。また官職・身分をあらわすと思われるものに、「厨主」「官」「佐」「〔秋カ〕介」等があり特に「〔秋カ〕介」は文字の一部を欠くとはいえ、秋田城に専当司として置かれた「秋田城介」と関連を持つ墨書として注目される。その他には、人名、所有者を意味すると考えられる「大伴」や、赤褐色土器の体部に吉祥句かと思われる「□六年二月十□ 良 良」の文字を配列したものがある。これは「良良」以外の文字は、墨痕が部分的にしか残っておらず、また薄かったため、肉眼では判読できなかったが、赤外線テレビカメラを使用して見ると「六年二月十□福カ徳カ」の文字が浮き出てきた。しかし「六年」の上につく年号については墨痕があまりにも薄かったため、判読は不可能であった。

今回出土の墨書土器のうち、硯に転用したと思われるものが18点あった。うち壺類は12点、蓋が6点であるが、各々1点ずつ内面にベンガラが付着しているものがあり、ベンガラ用の硯として使用したと考えられる。

第33次出土墨書土器一覧表

表V

通番号	遺物番号	器種	調査技法	切り廻し	墨書き部位	出土層位	墨書き	備考
1	2-172	土器器台付环	台面端子ナデ・内面黒色処理	回転未切り	底部	S X582 床面	判読不能	
2	2-155	*	内面黒色処理	不明	*	S D578 墓土	*	
3	2-149	直 恵 器 环		回転ヘテ切り	*	赤褐色砂	[丸カ]	
4	2-178	*		回転未切り	*	炭化物混砂	[得カ]	現に転用
5	2-144	*		回転ヘテ切り	*	S I583 墓土	大	*
6	2-151	*		回転未切り	*	S I583 墓土	□耐	
7	2-169	*		回転ヘテ切り	*	赤褐色砂	官留	
8	2-171	*		*	*	S I583 B床面	[東弘カ]	
9	2-166	*		回転未切り	*	炭化物混砂	判読不能	
10	2-176	*	体部下端回転ケズリ	不明	*	炭化物層	*	
11	2-193	*		*	体部	S X582 床面	*	
12	2-194	*		*	*	炭化物混砂	入	
13	2-203	*		*	*	S X582 床面	判読不能	現に転用
14	2-131	*		*	*	S X582 床面	*	
15	2-160	*		回転未切り	底部	黄褐色砂	*	現に転用
16	2-143	*		回転ヘテ切り	*	表土	[酒カ]	
17	2-205	*	体部下端回転ケズリ	*	*	S I583 A床面	官	現に転用
18	2-154	*	底部ナデ	*	*	赤褐色砂質土	詳	
19	2-168	*	*	*	*	S X582 墓土	瓦	
20	2-128	*		*	*	S I583 墓土	判読不能	
21	2-207	*		*	体・底部	S K584 墓土	次□	現に転用
22	2-129	*		*	底部	S I583 A床面	耐	*
23	2-126	*		回転未切り	*	S I583 A床面	耐	
24	2-152	直 恵 器 台 付 环	台面端子ナデ	回転ヘテ切り	*	炭化物層	耐	
25	2-206	*		回転未切り	*	S I583 墓土	判読不能	
26	2-184	*	底部外端ロクロナナデ調整	回転ヘテ切り	*	S B568 掘り方	*	
27	2-167	*	台面端子ナデ	回転未切り	*	暗褐色砂直上	大	
28	2-161	*	台面端子ナデ	回転ヘテ切り	*	S B566 掘り方埋土	年	
29	2-137	直 恵 器 盖		*	*	S I583 墓土	大	現に転用
30	2-190	*		不明	外面	S I583-Aブリッヂ	判読不能	*
31	2-139	*	外側肩部回転ケズリ	*	*	赤褐色砂	*	*
32	2-169	*		*	*	S I583 A床面	□所□	ベンガラ付看。現に転用
33	2-138	*		回転ヘテ切り	*	S K584埋土-S I579床面	[秋カ] 分	現に転用
34	2-158	*		不明	*	S A564 墓土	[往カ]	*
35	2-204	直 恵 器 便		*	内面	S I583 A床面	判読不能	
36	2-106	直 恵 器 环	底部わざかにナデ	回転ヘテ切り	底部	赤褐色砂下層	官	
37	2-107	*		*	*	赤褐色砂	判読不能	
38	2-110	直 恵 器 台 付 环		不明	体部	赤褐色砂	得	現に転用
39	2-112	直 恵 器 盖		回転未切り	底部	S I583 墓土	判読不能	
40	2-115	*		*	体部	炭化物混砂	全	
41	2-113	*		*	底部	炭化物層	耐	

表VI

通番号	遺物番号	器種	調査方法	切り離し	墨書き部位	出土層位	墨書き	備考
42	2-117	須恵器 杯		回転ヘア切り	底部	赤褐色砂（炭化物質）	石	現に転用
43	2-119	" "		" "	S I 593 塗土	大伴		
44	2-116	" "		" "	S K 584 塗土焼土内		判読不能	
45	2-121	" "		" "	S I 579 塗土	"		
46	2-120	" "		回転糸切り	"	S I 593 塗土	之 〔福士傳吉 氏〕	ベンガラ付着、現に転用
47	2-208	赤褐色土器杯		" "	体部	S X 582 底面	□□六年二月十日良良	
48	2-180	" "	体部下端回転ケズリ	" "	底部	S I 593 塗土	判読不能	
49	2-127	" "	" "	" "	S I 593 A 塗土	習	僚明里	
50	2-130	" "		" "	体部	暗褐色砂土	習	
51	2-136	" "		" "	底部	炭化物質	習	
52	2-125	" "		" "	"	S I 593 塗土	村	
53	2-185	" "		" "	"	S X 582 底面	草穀所	
54	2-183	" "	底部周縁輕くナデ	" "	"	赤褐色砂	判読不能	
55	2-170	" "		" "	"	表土	習主	
56	2-159	" "	体部下端回転ケズリ	" "	"	S I 593 B 底面	習	現に転用
57	2-181	" "		" "	"	赤褐色砂土	(習)	
58	2-177	" "		" "	"	S I 580 塗土	習	
59	2-145	" "		" "	"	黄褐色砂上層	習	
60	2-147	" "		" "	"	S I 593 塗土	習	
61	2-140	" "		" "	"	O E 86~9 ベルト内	万	
62	2-153	" "		" "	"	S I 593 塗土	上	
63	2-150	" "	底部周縁軽くナデ	" "	"	S A 567 塗土	木	
64	2-143	" "		" "	"	折りたたみ層	行事	
65	2-141	" "		" "	"	暗褐色砂直上	判読不能	
66	2-157	" "		" "	"	炭化物質下層	横	
67	2-164	" "		" "	"	S I 579 塗土	判読不能	
68	2-146	" "		" "	"	暗褐色砂上	(田)	
69	2-156	" "		" "	"	S I 580 塗土炭化物質	判読不能	現に転用
70	2-165	" "		" "	"	炭化物質	"	
71	2-182	" "		" "	"	S I 580 塗土	"	
72	2-135	" "		" "	体部	S B 584 織物表面中性灰土内	"	
73	2-148	" "	体部下端回転ケズリ	" "	底部	S I 593 挿今方	"	
74	2-175	" "		" "	"	S I 593 塗土	"	
75	2-174	" "		" "	"	S K 584 塗土	"	
76	2-173	須恵器 杯		回転糸切り	底部	赤褐色砂上黄褐色砂	"	
77	2-162	赤褐色土器杯		" "	体部	S K 584 塗土	"	
78	2-163	" "		" "	体部	S X 582 底面	習	
79	2-186	" "		不明	"	O E 86~9 ベルト内	習	
80	2-187	" "		" "	"	炭化物質	判読不能	
81	2-201	" "		" "	"	表土	"	
82	2-195	" "		" "	"	褐色砂	世	

表Ⅷ

通番号	遺物番号	器種	調査技法	切り出し	墨書き部位	出土著位	墨書き	備考
83	2-196	赤褐色土器杯		不 呈	体部	S D56 墓土	[大カ]	
84	2-198	〃	〃	〃	〃	S A566 墓土	[代カ]	
85	2-200	〃	〃	〃	〃	墓3トレンチ底土	判読不能	
86	2-192	〃	〃	〃	〃	炭化物層	〃	
87	2-202	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
88	2-199	〃	〃	〃	〃	S K584 墓土	〃	
89	2-197	〃	〃	〃	〃	炭化物層	〃	
90	2-133	〃	〃	〃	〃	S X582 底面	〃	
91	2-132	〃	〃	〃	〃	炭化物層	〃	
92	2-134	〃	〃	〃	〃	S A564 墓土	〃	
93	2-105	〃	〃	回転系切引	底部	S I579 底面	大	
94	2-108	〃	〃	体部下端回転ケズリ	〃	〃	S K584 墓土	肩上
95	2-109	〃	〃	〃	〃	S I583 B底面近	酒	
96	2-111	〃	〃		体部	炭化物層	基	
97	2-114	〃	〃		〃	褐褐色砂上	□田	
98	2-118	〃	〃		底部	S I579 底面	肩	
99	2-122	〃	〃		〃	S I583 B 墓土	肩上	
100	2-123	〃	〃		体部	褐褐色砂上	判読不能	
101	2-124	〃	〃		〃	S I580 墓土	酒所	
102	2-179	赤褐色土器台付杯		〃	底部	S I583 A ブリッヂ	[致カ]	
103	2-191	赤褐色土器蓋		不 呈	外面	表 土	判読不能	
104	2-188	〃	〃	外面肩部回転ケズリ	〃	黄褐色砂上層	鏡	

表VIII

第33次出土転用硯一覧表

通番号	遺物番号	器種	調整技法	切り廻し	転用部位	出土遺構・層位	区画番号	備考
1	2-293	須恵器坛	回転ヘラ切り	底部内面	S 1593 0Eブリッジ	第35区-4		
2	2-298	" "	"	"	S 1593 墓土	" 5		
3	2-299	" "	回転糸切り	"	S 1593 墓土	" 6	擦痕なし、墨つぶか?	
4	2-291	" "	"	"	S 1593 墓土	" 7		
5	2-292	" "	回転ヘラ切り	"	S 1593 墓土	" 11		
6	2-297	" "	"	"	S 1593 A床面	" 12	ベンガラ用硯	
7	2-257	" "	回転糸切り	"	S 1593 B埋土(東南斜上)	第36区-4		
8	2-178	" "	"	"	炭化物墨砂	第51区-4	墨書きあり 成部外面(得々)	
9	2-144	" "	回転ヘラ切り	"	S 1593 墓土	" 5 "	" " 「大」	
10	2-203	" "	不明	"	S X582 床面	" 13 "	体部外面 判読不能	
11	2-160	" "	回転糸切り	"	赤褐色砂	" 15 "	成部外面 "	
12	2-205	" "	回転ヘラ切り	"	S 1593 A床面	" 17 "	" " 「宮」	
13	2-207	" "	"	"	S K584 墓土	" 21 "	体・成部外面「次口」	
14	2-129	" "	"	"	S 1593 A床面	" 22 "	成部外面「研」	
15	2-117	" "	"	"	茶褐色砂(炭化物混り)	第53区-42	成部外面「石」	
16	2-120	" "	回転糸切り	"	S 1593 墓土	" 46 "	" " 「之」ベンガラ用硯	
17	2-156	" "	"	"	S 1580 墓土	第55区-69 "	" " 判読不能	
18	" "	"	"	"	S K584 墓土			
19	" "	"	"	"	S 1593 Aブリッジ			
20	" "	"	"	"	S X582 床面			
21	" "	"	回転ヘラ切り	"	0E-86-9 ベルト内			
22	" "	"	回転糸切り	"	赤褐色砂			
23	" "	底部周縁軽くナデ	回転ヘラ切り	"	赤褐色砂質土			
24	" "	"	"	"	S 1579 ベルト内			
25	" "	"	"	"	S 1593 墓土			
26	" "	"	回転糸切り	"	赤褐色砂直上			
27	" "	"	"	"	黄褐色砂上層			
28	" "	底部周縁ナデ	回転ヘラ切り	"	S A564 墓土		ベンガラ用硯	
29	" "	"	"	"	黄褐色砂下層			
30	" "	底部全面ケズリ	不明	"	赤褐色砂			
31	" "	"	回転ヘラ切り	"	S 1593 墓土			
32	" "	底部全面不定方向のナデ	不明	"	褐色砂質下層			
33	" "	"	回転ヘラ切り	"	S 1593 0Eブリッジ			
34	" "	"	"	"	S 1593 墓土			
35	" "	"	"	"	S K584 墓土			
36	" "	"	"	"	S 1579 墓土			
37	" "	"	"	"	赤褐色砂質土			
38	" "	"	"	"	S 1579 墓土			
39	" "	"	"	"	S 1593 床面覆り方			
40	" "	底部全面ナデ	不明	"	赤褐色砂		ベンガラ用硯	
41	" "	"	回転ヘラ切り	"	S 1593 0Eブリッジ			

表IX

通番号	遺物番号	器種	調整性法	切り崩し	転用部位	出土遺構・層位	因面品	備考
42		須恵器 环		回転永切り	底部内面	S I 593 墓土		
43		〃		回転ヘラ切り	〃	S I 593 A 墓土		
44		〃		〃	〃	黄褐色砂上赤褐色砂		
45		〃		〃	〃	S K 584 墓土		
46		〃		〃	不明	赤褐色砂下		
47		〃		不明	〃	S K 584 墓土		
48		〃		〃	〃	S I 593 墓土		
49		〃		〃	〃	S X 582 墓土		
50		〃		〃	〃	S I 593 床面覆り方		
51		〃		〃	〃	S I 579 床面		
52		〃		〃	〃	S X 582 床面		
53	2-275	赤褐色土器环		回転永切り	内面見込部	S I 593 A 床面	第37区-14	
54	2-290	須恵器 台付环	台部周縁ナデ	〃	底部内面	S X 582 墓土	第39区 1	台部周縁を打ち欠いている
55	2-294	〃	〃	〃	台 部	S X 582 墓土	〃 2	
56	2-295	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	S X 582 墓土	〃 3	
57	2-289	〃	〃	台部周縁ナデ	不明	底部内面	第48区-4	ベンガラ用硯
58	2-110	〃	〃	〃	〃	赤褐色砂層	第53区-38	墨書きあり 体部外側「得」
59	〃	〃	台部周縁ナデ	回転ヘラ切り	台 部	S I 593 墓土	底部内面スペベしている	
60	〃	〃	〃	〃	底部内面、台部	O J-K-82-4 拡張部表土	底部内面にベンガラ少し付着	
61	〃	〃	〃	不明	台 部	O G-H-81 拡張部表土		
62	〃	〃	〃	回転永切り	〃	S I 593 墓土		
63	〃	〃	〃	〃	〃	暗褐色砂直上		
64	〃	〃	〃	不明	底部内面、台部	赤褐色砂	内面にベンガラも付着	
65	2-260	赤褐色土器台付环	〃	台 部	S I 593 B 床面	第38区-6		
66	2-281	須 恵 器 盆	外面部回転ケズリ	不明	内面天井部	S B 588 覆り方内	第31区-6	
67	2-284	〃	〃	〃	〃	S I 593 墓土	第37区-8	
68	2-278	〃	〃	〃	〃	S I 593 A 墓土	〃 13	
69	2-282	〃	〃	〃	〃	S I 593 B 墓土(廻道中央)	第38区-5	
70	2-283	〃	〃	回転永切り	〃	S D 576 墓土	第43区-4	
71	2-279	〃	〃	外面部回転ケズリ	不明	〃	S K 584 墓土	第44区-6
72	2-285	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	S K 584 墓土	〃 7	
73	2-287	〃	〃	外面部回転ケズリ	不明	〃	S K 584 墓土	〃 8
74	2-280	〃	〃	〃	〃	炭化物層	第47区-13	
75	2-286	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	赤褐色砂層	第48区-5	
76	2-288	〃	〃	外面部回転ケズリ	不明	〃	暗褐色砂層	第50区-4
77	2-137	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	S I 593 墓土	第52区-29	墨書きあり 級「大」
78	2-190	〃	〃	〃	不明	〃	〃 30	底部外面 判読不能
79	2-139	〃	〃	外面部回転ケズリ	〃	赤褐色砂	〃 31	〃 〃 〃
80	2-189	〃	〃	〃	〃	S I 593 A 床面	〃 32	〃 □所、□ ベンガラ用硯
81	2-138	〃	〃	回転ヘラ切り	〃	S K 584 墓土、S I 579 床面	〃 33	〃 (秋々) 介
82	2-158	〃	〃	〃	不明	〃	〃 34	〃 (往々)

表X

通番号	遺物番号	器種	調査方法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
83		須恵器蓋	外面部回転ケズリ	回転系切り	内蓋天井部	S 1579 墓土		内面にベンガラも付着
84				不 明		S A568 墓土		
85						S I593 墓土		
86						赤褐色砂		
87			ツマミ部周縁ナデ			赤褐色砂		
88						S B586 墓り方内		
89			外面部回転ケズリ			S I593 墓土		
90						S I593 墓土 S A571 墓土		
91						S I593 墓土		
92						S I593 墓土		
93						N S-O A-8 松葉部表土		内面にベンガラも付着
94						赤褐色砂質土		
95						S I593 墓土		
96						S I593 墓土		
97						S K584 墓土		
98						S I599 墓土		
99			ツマミ部周縁ナデ			赤褐色砂		
100				回転ヘラ切り		S I579 墓土		
101			外面部回転ケズリ	不 明		S I593 墓土		ベンガラ用鏡
102						S I593 墓土		
103						S I593 A 墓土		
104		須恵器蓋				西側松葉部粘土上層		
105			外面部回転ケズリ			S B586 墓り方		
106				回転ヘラ切り		S D576 墓土		
107				不 明		S I593 墓土		
108						S D576 墓土		
109						S X582 床面		
110						O H-79 粘土層		
111			外面部回転ケズリ			暗褐色砂		
112						赤褐色砂質土上層		
113						S I579 墓土		
114						S I593 A ブリッジ		
115			外面部回転ケズリ			褐色層(底下層)		
116						赤褐色砂上		
117						S I593 B 床面		
118						S I593 O E ブリッジ		内面にベンガラも付着
119						赤褐色砂(炭化物層)		*
120			外面部全体を回転ケズリ			S D576 墓土		
121						S I593 A ブリッジ		
122						赤褐色粘土上面		
123			外面部回転ケズリ			炭化物層		

表 XI

通番号	遺物番号	器種	測量方法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	図面番号	備考
124	須恵器蓋	外面肩部回転ケズリ	不 明	内面天井部	O H-81 振り方内			
125		× ×	× ×	×	×	赤褐色砂		
126		× ×	× ×	×	×	赤褐色砂		
127		× ×		×	×	赤褐色砂質土上層		
128		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	黄褐色砂下層		
129		× ×	× ×	×	×	S B588 振り方内		
130		× ×	× ×	×	×	S I593 墓土		
131		× ×	× ×	×	×	S I593 墓土		
132		× ×	× ×	×	×	黄褐色砂(炭化物層)		
133		× ×	× ×	×	×	皮化物層		
134		× ×		×	×	S I593 墓土		
135		× ×		×	×	S I593 墓土		
136		× ×		×	×	赤褐色砂下		
137		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	S D578 墓土		
138	須恵器蓋	× ×		×	×	赤褐色砂		
139		× ×	× ×	×	×	赤褐色砂		
140		× ×	× ×	×	×	赤褐色砂土上層		
141		× ×		×	×	S A564 墓土		
142		× ×		×	×	皮化物層下層		
143		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	S I579 墓土	内・外蓋ベンガラ付着	
144		× ×		×	×	S I593 A 振り方内	ベンガラ用鏡	
145		× ×		×	×	S I593 A 床面		
146		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	S I593 墓土		
147		× ×		×	×	S I593 墓土	—	
148		× ×		回転ヘラ切り	×	赤褐色砂		
149		× ×	外面肩部回転ケズリ	不 明	×	S X582 墓土		
150		× ×	× ×	×	×	S I593 A 墓土		
151		× ×	× ×	×	×	S D578 墓土		
152		× ×		×	×	S I593 墓土		
153		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	S K584 墓土		
154		× ×		×	×	褐色砂(炭化層)		
155		× ×	外面肩部回転ケズリ	×	×	S K584 墓土		
156		× ×		×	×	S I593 墓土		
157		× ×		×	×	S I579 墓土		
158		× ×		×	×	S I593 A 墓土		
159		× ×		×	×	赤褐色砂質土		
160		× ×		×	×	S X582 床面		
161		× ×		不 明	×	S I593 墓土		
162		× ×		×	×	S I579 ベルト内	内蓋にベンガラ付着	
163		× ×		×	×	赤褐色砂土上	墨付着、擦痕不明	
164		× ×		×	×	赤褐色砂質土	—	

表四

通番号	遺物番号	器種	調整方法	切り離し	転用部位	出土遺構・層位	因面番号	備考
165		須恵器蓋		不明	不明	赤褐色砂		墨付者、擦痕不明
166				×	×	炭化物層		
167				×	×	S K584 墓土		
168				×	×	S I593 墓土		
169				×	×	炭化物層		
170				×	×	赤褐色砂質土上層		
171				×	×	S A564 墓土		
172		須恵器蓋		×	×	S A571 墓土		
173				×	×	S D578 墓土		
174				×	×	S D576 墓土		
175				×	×	赤褐色砂		
176				×	×	S A568 墓土		
177				×	×	赤褐色砂質土		
178				×	×	S I579 墓土		
179				×	×	S D578 墓土		
180	2-322	須恵器蓋		×	体部内面	赤褐色砂	第57図-1	
181	2-326			×	・	暗褐色砂質	・ 4	
182				・	・	赤褐色砂		
183				・	・	S I593 墓土		
184				・	・	炭化物層		
185				・	・	S X582 底面		
186				・	・	S X582 底面		
187				・	・	黄褐色砂上層		
188				・	・	S I579 墓土		
189				・	・	O E-86~9 ベルト内		
190				・	・	S X582 底面		
191				・	・	赤褐色砂		
192				・	・	S K584 墓土		
193				・	・	赤褐色砂土		
194				・	・	O E-86~9 ベルト内		
195				・	・	S X582 底面		
196				・	・	S I593 A 墓土		
197				・	・	暗褐色砂直上		
198				・	・	赤褐色砂上黄褐色砂	第57図-3	
199	2-325	赤褐色土器蓋		・	・	S I579 底面	・ 2	
200	2-296	須恵器長颈壺		・	口 部	暗褐色砂質		
201	2-324	須恵器蓋		・	体部内面	S I593 墓土		
202				・	・	S I593 墓土		
203	2-159	赤褐色土器杯	底部周縁回転ケツリ	回転水切り	底部外面	S I593 底面		墨書き「留」

転用硯

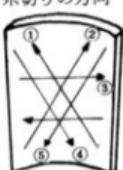
表 XIII

器種別 出土遺構	杯 類		蓋		貸 類		壺		計	備 考
	須 環	環台付 赤 环	赤 台环	須 惠 器 蓋	須 惠 器 壺	赤 堀 色 土 器 壺	須惠器壺(長篠塚)			
S A 564	1(=)			3					4	墨書き(蓋1)
S A 568				2					2	
S A 571				1					1	
S B 586				2					2	
S B 588				2					2	
S D 576				5					5	
S D 578				4					4	
S I 579	4			8(=1)			1	1	14	ベンガラ付壺(蓋3)
S I 580	1								1	墨書き(須环1)
S I 583	15(=1)	2		22(=1)	1			2	42	墨書き(須环2、蓋1)ベンガラ付壺(蓋1)
S I 583 A	6(=1)		1	11(=4)	1				19	墨書き(須环2)
S I 583 B	1		1	2					5	墨書き(赤杯1)
S K 584	5			8	1				14	墨書き(須环1、蓋1)
S X 582	4	3(=1)		3(=1)	4				14	墨書き(須环1)
その他各署	15(=1)	6		41(=1)	12				74	墨書き(須环3) (須环11、蓋1)ベンガラ付壺(須环11) 2(=2)
計	52(=4)	11(=1)	2	1	114(=8)	19	1	3	203	

■(ペ) : ベンガラ用の硯

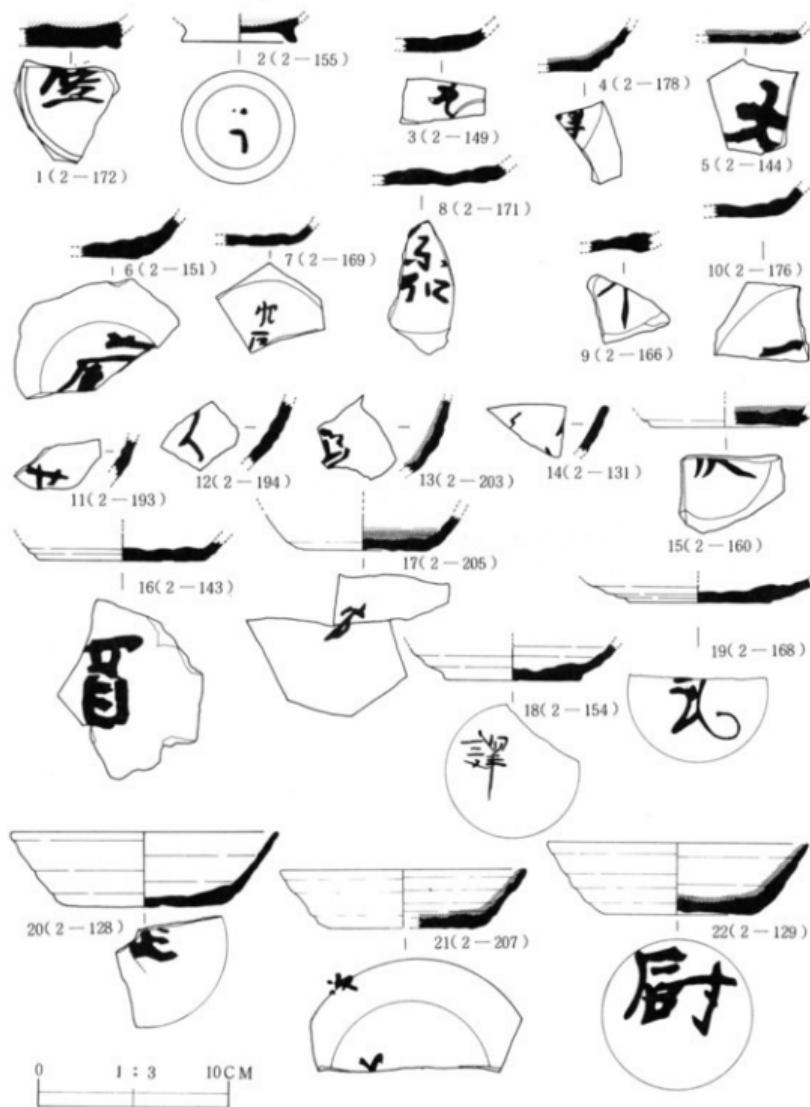
表 XIV 第33次調査出土平瓦

凸 面		凹 面		端 部		端 部	
綱目叩	$r > L$ $\ell > R$	55	布 目 粘土板合わせ目	全 面 0	6 14	凸 面 側縁盛り上り 側縁まで叩き	17 37
綱目→スリ消	0		模骨痕	3	① 側 面	0	広・狭端部 ①
格子叩	2		部分的スリ消し	0	② 端	19	②
スリ消	0		糸切りの方向	③ 面 取 り	③ 面 取 り	24	③
焼成				④ 5 28 0 4 11 0	④ 取 り	33	④
軟質 (黒・白灰色)	37					0	
硬質	32						

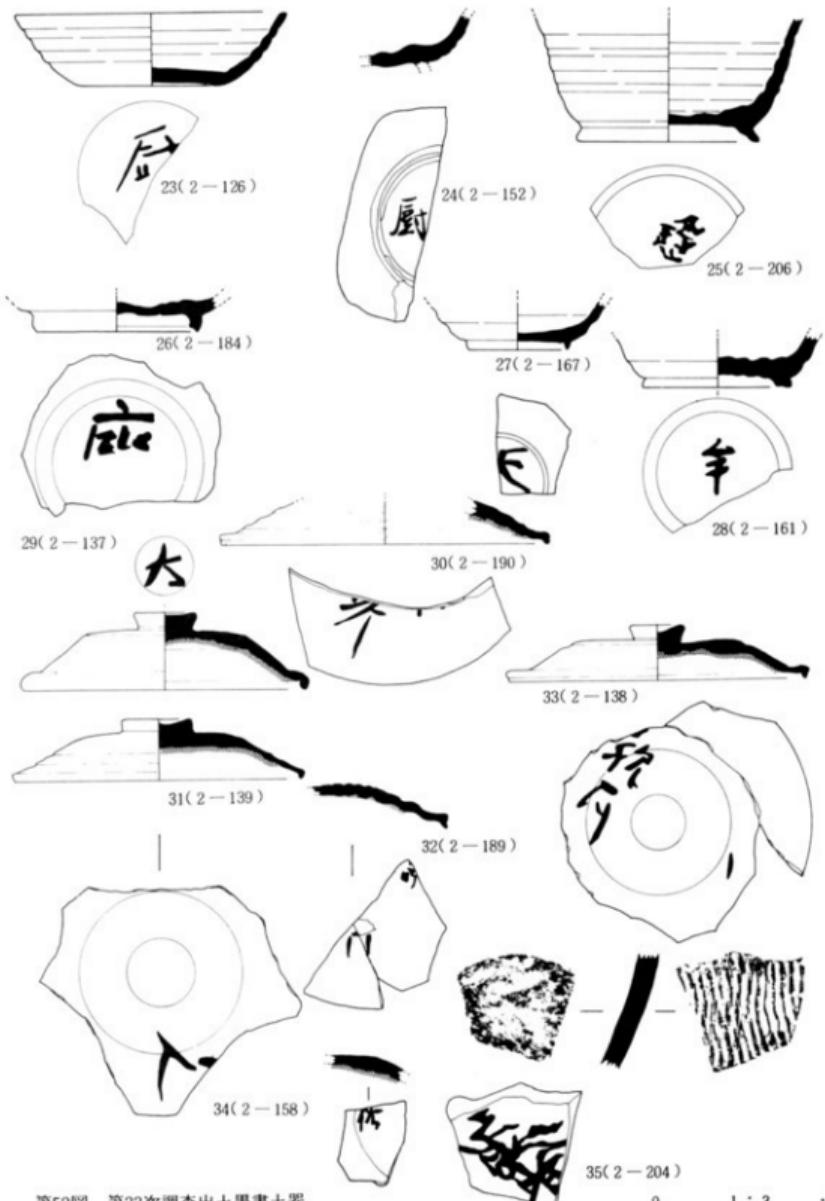


転用硯(図面番号は転用硯一覧表参照)

転用硯をみると須恵器蓋が最も多く、出土総数の半数以上を占めている。転用部位については、ほとんど内面に限られるが、台付环に関しては内面、内面と台部の両面、台部の三種類に分けられる。使用痕(擦痕)は、明瞭なもの不明瞭なものがあり、また擦痕の認められない須恵器环もあつ

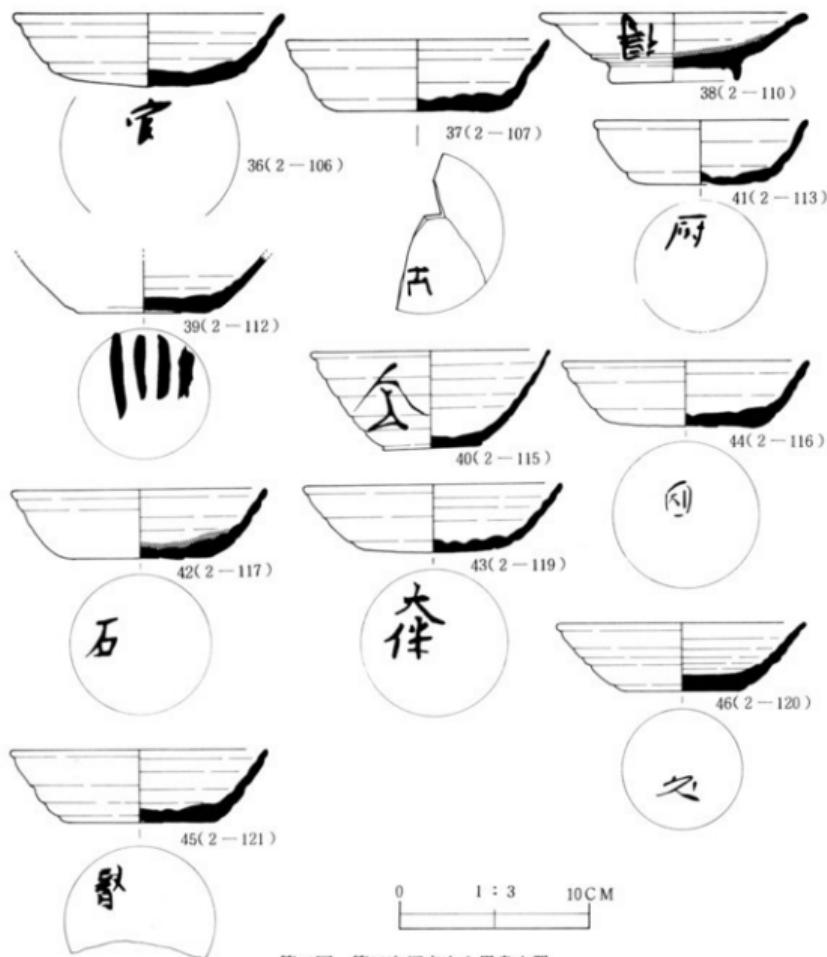


第51図 第33次調査出土墨書土器



第52図 第33次調査出土墨書土器

0 1 : 3 10 C M

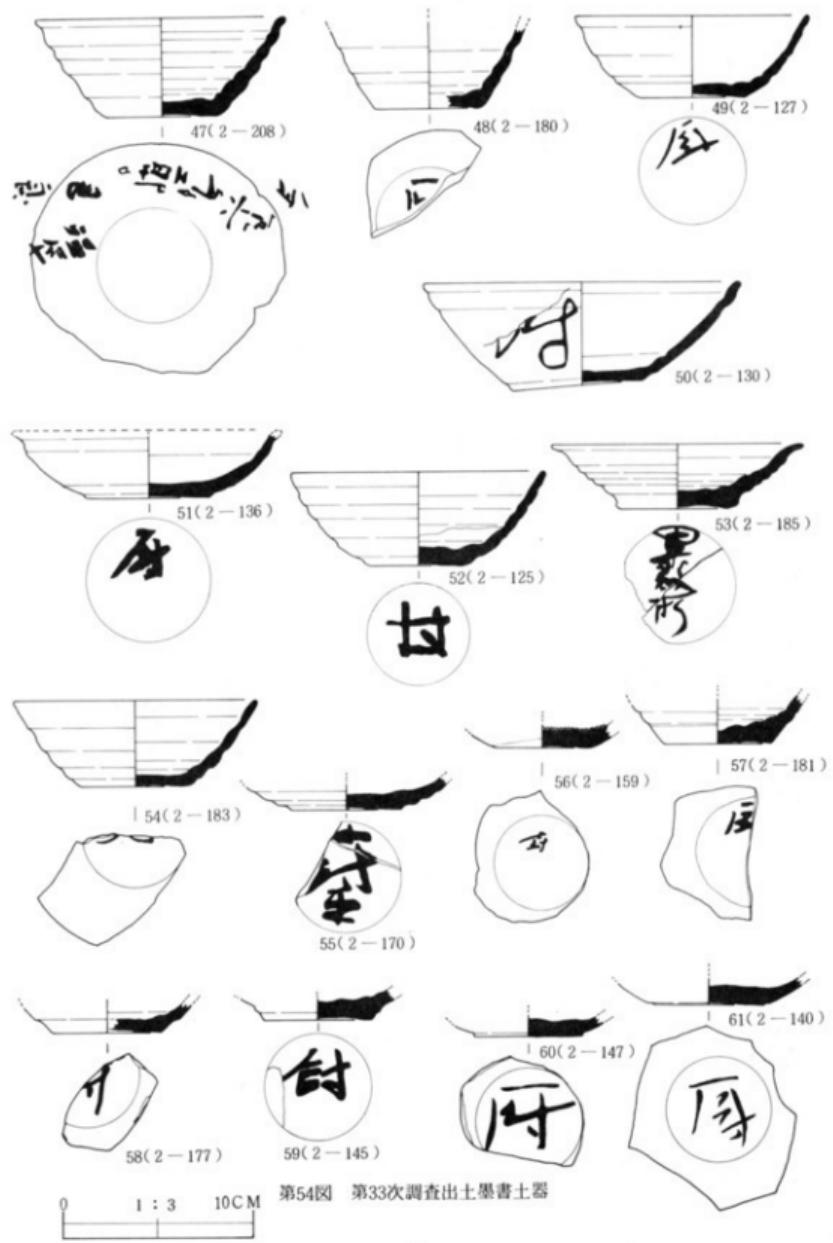


第53図 第33次調査出土墨書き土器

た。内面に墨が付着していることから墨ツボとして使用されたと思われる。

ベンガラ用の硯に転用した土器も13点みられた。また墨とベンガラの両方付着している土器もあり、墨、ベンガラ両用の硯に使用したものと思われる。

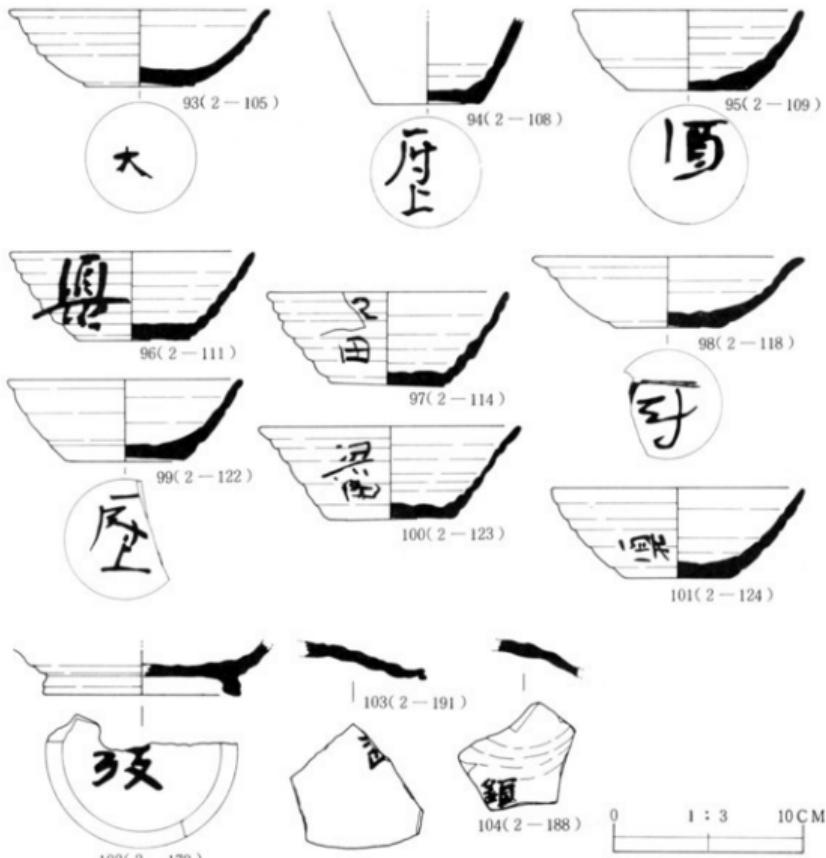
出土地点をみていくと墨書き土器同様、S I 593住居跡周辺と東方建物跡周辺に最も多く出土していることがわかる。



第54図 第33次調査出土墨書き土器



第55図 第33次調査出土墨書土器



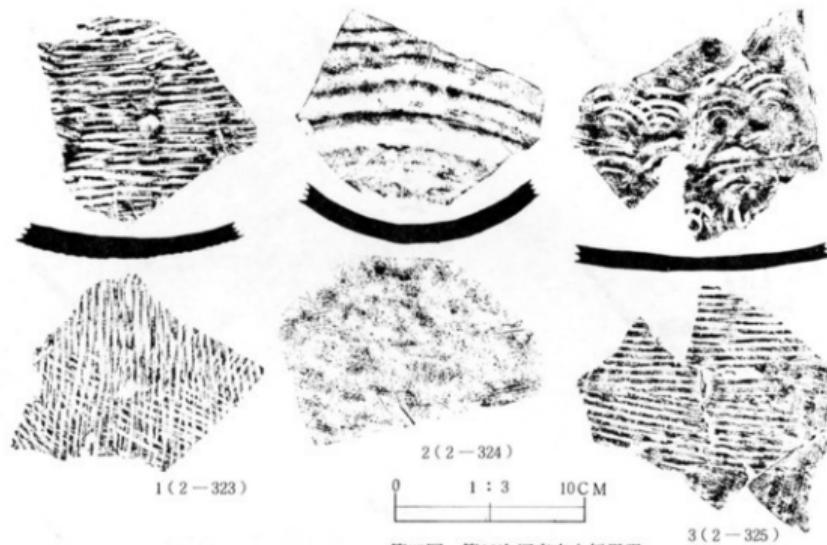
第56図 第33次調査出土墨書土器

5) 第33次調査出土瓦 (第58図、図版42)

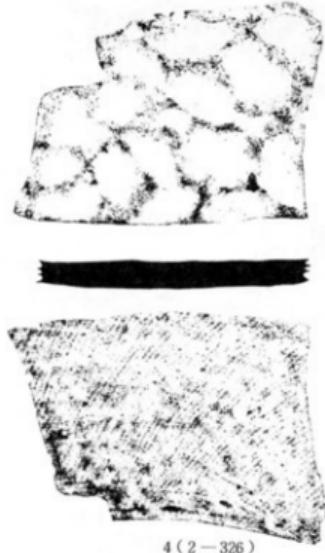
今次の調査においては多量の瓦が検出されたが、いずれも破片である。復元した瓦を含めて、平瓦、丸瓦、のし瓦について観察を行った。

平瓦

復元したものを含めて、広・狭端部のいずれかが残存しているもの59点について表XIVのように観察を行った。凸面の縄目叩きの縄文原体についてはL { r が大部分を占め、R { l は約 1/5 を占めるに過ぎない。縄目のスリ消しを施しているものはない。凹面においては、一枚作りの特徴である布目端が顕著にみられるもの14点、また桶巻き作りの特徴と考えられる全体に布目がみられるものの6点であるが、瓦によって側縁部の面取り時において整形しているものが多くを占め観察不可能



第57図 第33次調査出土転用瓦



5 mm ~ 7 mmである。焼成は大部分が黒色、あるいは灰白色の軟質である。

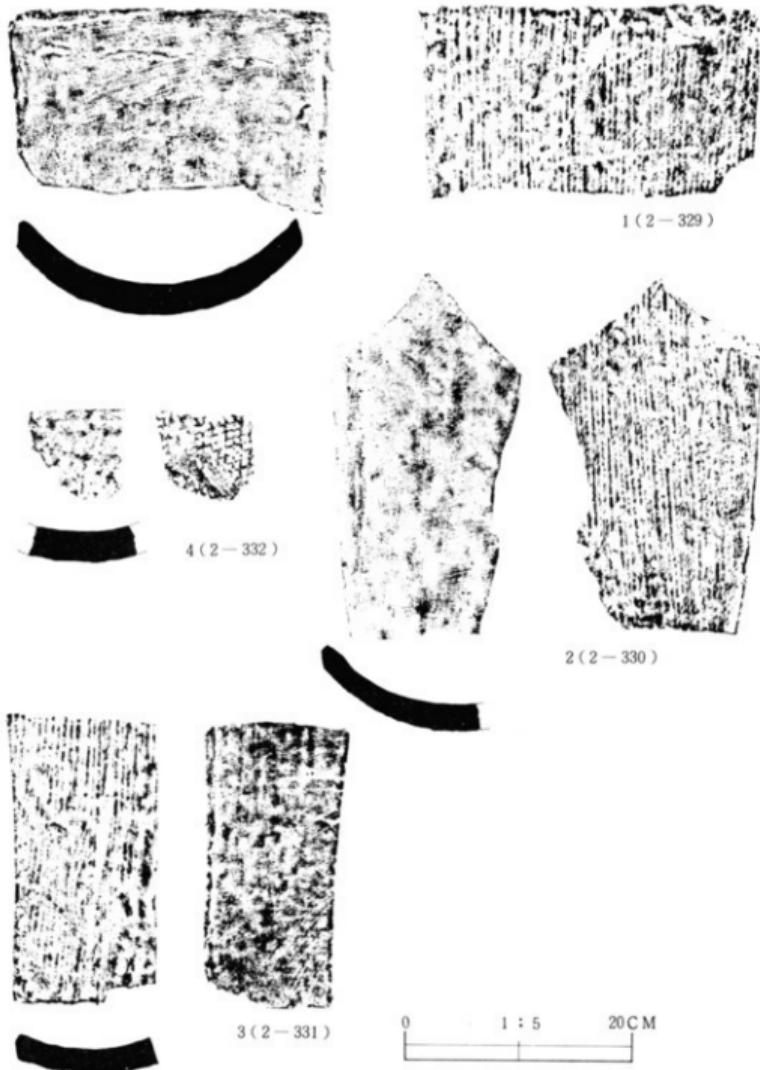
のし瓦

のし瓦は7点（広・狭端部、および側縁の残存する瓦）出土している。凸面の繩目叩における繩

であった。また桶巻き作りの痕跡である模骨痕のある瓦は少く、板痕跡が明瞭に一直線には認められない。一方糸切りの方向については表XIVのよう広端部を上にした場合、左下隅から糸が入るもののが大部分を占め、左上隅から糸が入るもののが次に多い。この両者に関しての相違は調整技法からは認められない。側縁面取り技法は、表XIVの②、③、④に集中し、広・狭端部の面取り技法は③、④に集中している。焼成は硬質、軟質とともに数量的には類似している。軟質のものは灰白色が大部分である。

丸瓦

丸瓦は無段（行基）、有段（玉縁付）両者がみられるが、いずれも小破片である。繩目のスリ消しはほぼ全面に行われているが、繩目がすべて消えるほど深くまでは行っていない。分割は内側に分割線を有し、その深さは



第58図 第33次調査出土瓦

文原体はL {「がほとんどである。凹面における糸切りの方向は、広端を上にした場合、左下隅から右上隅へかけて糸が入るものがほとんどであり、反対に右上隅から左下隅へかけて糸が入るものはきわめて少ない。側縁の分割はすべて瓦の弧に対して直角に行っており、分割痕が側縁上部に1cm～1.5cm残存するもの、分割痕が残存していないもの、両者がみられる。前者は平瓦成作過程において、あらかじめ分割線を入れて、焼成後に分割したものと考えられる。一方、後者は平瓦成作過程において焼成以前に分割し、その後焼成したものと考えられる。

格子目瓦

格子目瓦の出土はきわめて少ない。格子目は比較的細かく、叩き板の幅は約5cmと考えられる。いずれも焼成はやや軟質で、黄白橙色を呈している。

6) まとめ

第33次調査は内城地区の東辺区画遺構（築地、土塁、柱列、溝等）および東辺建物（脇殿）の検出を目的として実施したものである。

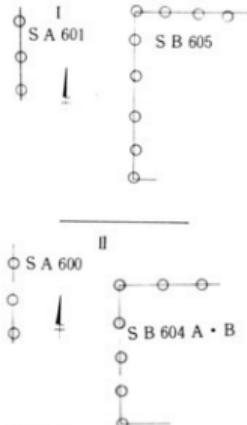
その結果建物跡、一本柱列、鍛冶工房、土壤、溝、住居跡等の遺構が重複して検出され、しかもこれらの遺構群は上層、下層に大別することが可能である。

上・下層に大別した根拠は、北東地区検出の建物群が整地層を挟んで構築されていることによるもので、他の地区についてもその延長順序を基本として分類した。また発見遺構は下層を建物中心にⅢ期に、上層は一本柱列を中心にⅣ期に分類し、Ⅰ期からⅤ期まで設定した（挿図5、6）。

上層で検出された遺構には一本柱列、建物、溝、土壤、竪穴住居跡があるが、これらの遺構は前述した整地層の上層とほぼ同層位、同レベルから掘り込まれているものである。

東西・南北に延びる一本柱列は、区画を意図したもので、Ⅲ期の重複が認められる。すなわち、古い方からS A 570がⅢ期、S A 569・571がⅣ期、S A 564～7がⅤ期である。ただし、Ⅲ期とⅣ期については国営調査の段階で上層部が除去されており明確さを欠く。今後西部地区の調査時に再度検討したい。またS A 568はⅤ期かあるいはさらに新しい時期が考えられるが、ここでは保留にした。

柱列線上に位置するS B 587は櫓か門と考えられる。後者の場合、桁行中央柱間が他と比し狭いという懸念はあるが、柱列の布振りが建物の部分で消滅することから考えると常用ではないにしても門的性を強調したい。ただ位置的に、南北柱列南端からわずか12m強であることを考慮するならば、南辺中央部の門というよりは南辺西門とするのが妥当であろう。他にS X 582・S B 586そして最下層でS I 593 A、B（鍛冶工房跡）がほぼ同位置で重複して検出された。炉跡、



挿図5

羽口および鉄滓が伴って検出されたのは SI593 B のみであるが、各遺構埋土内や周囲から多くの炭化物、鉄滓、羽口等が出土することから、いずれも鍛冶工房か類似遺構と考えられる。

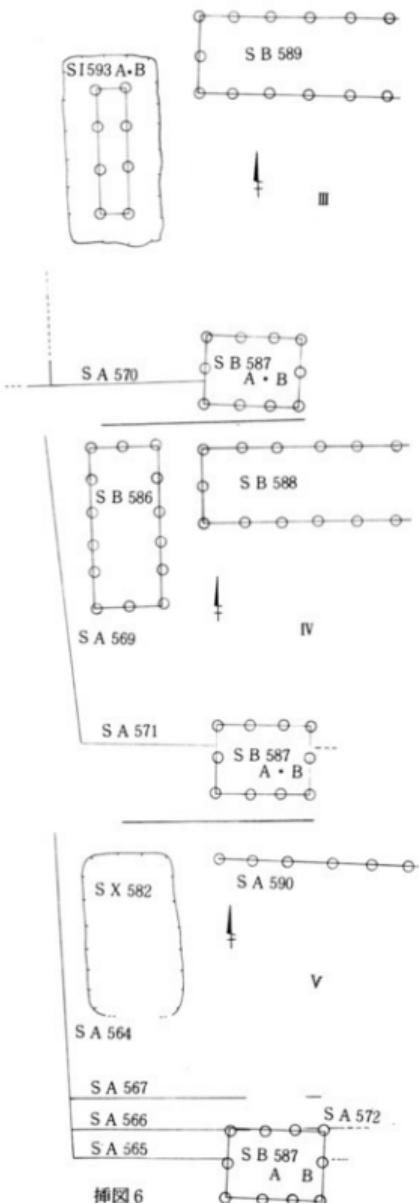
これらの各遺構を時期別にみると次の如くである。

Ⅲ期は SA 570, SB 587 A・B, SB 589, SI 593 A・B である。SI 593 A・B である。SA 570 南北柱列は SA 564 と重複しているものと考えられる。ただし断面および平面では認めることができなかった。

Ⅳ期は SA 569・571, SB 587・A・B, SB 586, SB 588 である。SA 569 は北で西にやや振れる。Ⅲ期では竪穴であった SI 593 が掘立柱に移行するが、東側の土層堆積状況から判断して竪穴状である可能性を否定できない。

Ⅴ期は SA 564～7, SB 587 A・B, SX 582, SA 590 である。SA 564 はほぼ真北を指し、南辺柱列は三重になる。SX 582 は炭化物面を床面として把握したが、北、東側の堆積状況から竪穴状を呈しているものと考えられる。SA 590 は柱列として把握した。しかし SB 589 北側柱を切っている掘り方と組み、2間×5間の建物の可能性も考えられるが、埋土が若干異なる。SB 587 A・B は平面では最低二時期の重複が認められるが、一本柱列はいずれも SB 587 に取り付くことからⅢ期～Ⅴ期までは、同位置に営まれたものと考えられる。ただこれらの分類はプライマリーな層序において検出された遺構と異なり、厳密な意味においては今後の調査結果を踏まえて検討したい。

下層遺構は建物、一本柱列、土壤跡である。上層遺構群との大きな相異は遺構検出量の極端



挿図 6

な減少において認められる。

ここではⅡ期に大別できる。

Ⅰ期としたものは建物規模において問題はあるが、地山飛砂層で検出されたSB605・SA601である。

Ⅱ期はⅠ期の建物、柱列を切るSB604A・B、SA600である。SK598は切り合い関係からⅡ期に比定できよう。

このようにみると、上・下層の遺構配置、性格はかなり異なる様相を呈している。すなわち、下層遺構は数量的には少ないが、大規模な建物が整然とした形で配置されているという点においては、当初調査の主目的とした内城東辺建物という条件を満たしていると考えられる。

一方上層遺構は、一本柱列という区画施設は有するものの、その内部に工房跡、住居跡等を取り込む状況は、これまでの古代東北城柵の内城域においては異例と言える遺構配置を示す。しかし、このような上・下層における大規模な遺構変化は何に起因するものか現段階では考察し難い。

さてここで上・下層遺構の年代に若干ふれておきたい。

主な遺物は土師器、須恵器、赤褐色土器、瓦で、その量は上層が圧倒的多数を占めるが、絶対年代に比定できる資料は出土していない。

上層遺構出土の大部分は、いわゆる赤褐色土器環、皿類で、ほんの数点を除けば残りすべてが回転糸切りで切り離し、二次調整をまったく加えないものである。またⅢ期～Ⅴ期の遺構から出土した土器の時期差は、形態、技法上から識別し得る特徴は見い出せない。これらのことから現段階では、9世紀末、10世紀初頭～11世紀代を考えたい。

下層遺構ではⅡ期のSB604A掘り方から須恵器、瓦片と共に赤褐色土器体部片が出土することから9世紀中は遡らないと考えられる。またⅠ期のSB605の上限については不明であるが、下限は検出層位等からSB604Bと大差ない時期と考えられる。

以上、時期別に遺構を概観したが、整地を基本とした上層・下層という分類は、層位的、遺構の数量、配置そして遺物量等の点においては妥当と考えられる。しかし遺跡としては、Ⅰ期～Ⅴ期まで間断なく断続していたものと考えられる。

IV 第34次発掘調査

1) 調査経過

第34次発掘調査は寺内字鶴ノ木地区を対象に9月26日から12月12日までの期間で実施し、発掘調査面積は864m²（約262坪）である。

調査地の鶴ノ木地区は、すでに、国営調査、第18・22・25・26・30次の各調査によって、広範囲にわたり調査が終了しており、計画的に配置されたと考えられる数時期に及ぶ壮大な掘立柱建物群を検出している。また、これに伴う井戸跡からは天平6年、勝宝4年、同5年の紀年のある木簡が

出土し、内容的にも調査の付札、「文選」の習書、解の文書など建物群の性格を解明する重要な資料となるものがある。

この建物群、井戸跡の北にはSG 463湿地と呼称した泥炭の堆積する湿地を検出している。湿地は縄文中期後半頃から弥生期にかけて形成された泥炭層が堆積し、最上層と最下層のC-14年代測定は1780±100、3610±130年B.P.である。古代にも湿地として建物群の北にあったものと考えられ、平安時代後半期と中世以降のⅡ時期に湿地の東、南縁部を整地している。整地後は小規模な柱掘り方をもつ掘立柱建物、井戸、溝を営んでいることが判明している。

以上の既調査の結果から、本次の調査は①壮大な掘立柱建物群に伴う遺構の広がりの追求、②SG 463湿地、およびその整地の範囲の確認と整地に伴う遺構の追求を目的に実施した。

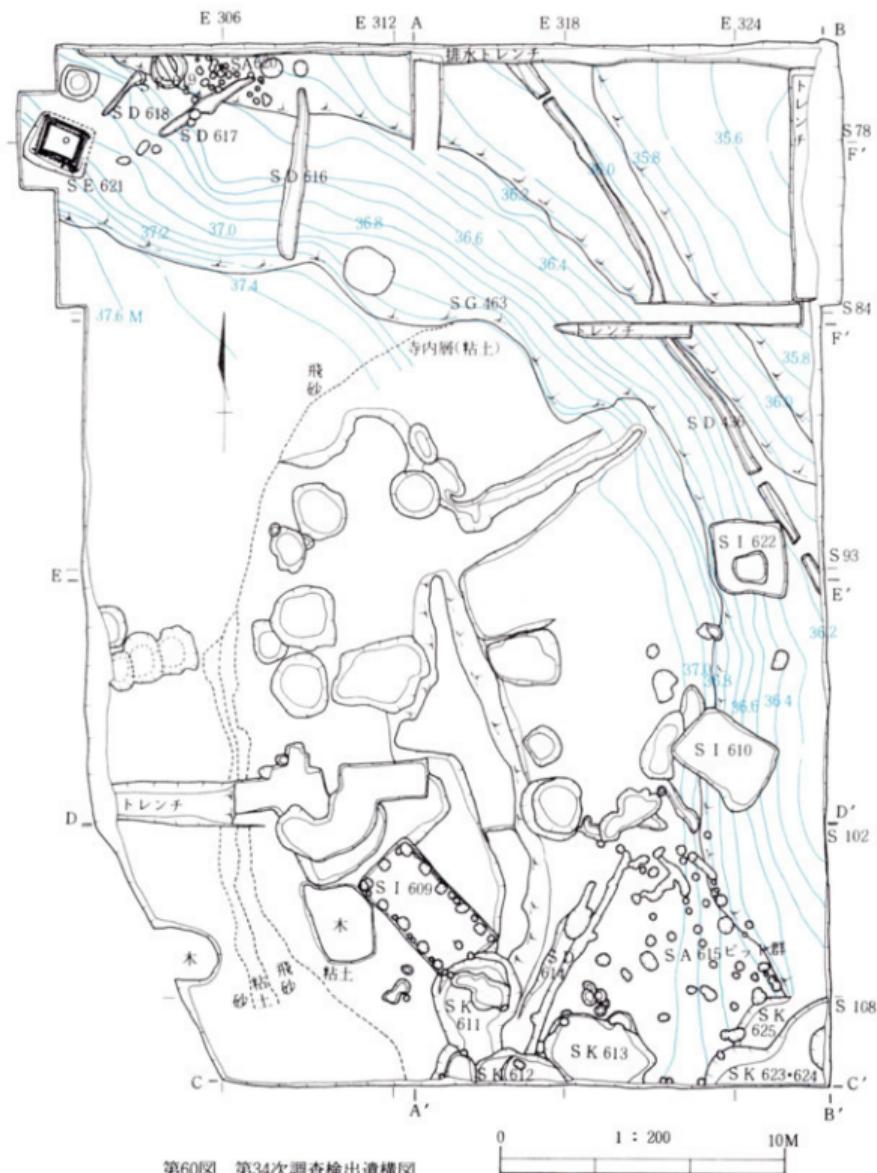
調査は下刈り、表土の排土に並行して基準杭(X=332,242m, Y=-80,963m, H=37,299m)を設定した(10月1日)。表土は近年までの耕作土で、これを除去すると、北西部では黄褐色砂、北東部では黒色砂となる。調査予定区域全体の表土を除去した段階では、北西から南西区域にかけて黄褐色砂、中央区域で基盤の寺内層(粘土・シルト層)、北東から南東区域では黒色砂と赤褐色砂質土が現れた。当初、SG 463湿地は黒色砂と赤褐色砂質土の堆積する範囲と考えられたが、後日、北区域の黄褐色砂は古代以前の飛砂と区別されることが判明し、湿地の範囲はさらに広がっていた。表土を排土した段階で明らかになった事項としては他に、本調査地西区域が古代以前の飛砂の東限に当たること、調査区の南区域中央に認められていた土手状の高まりは畑地造成の際の削り残しによるもので、この土手状の高まりの周縁は1m以上削平されていることなどがある(12日)。

調査予定地の中央区域が著しい擾乱をうけているため、調査区をさらに南に拡張した後に、精査を開始していく。

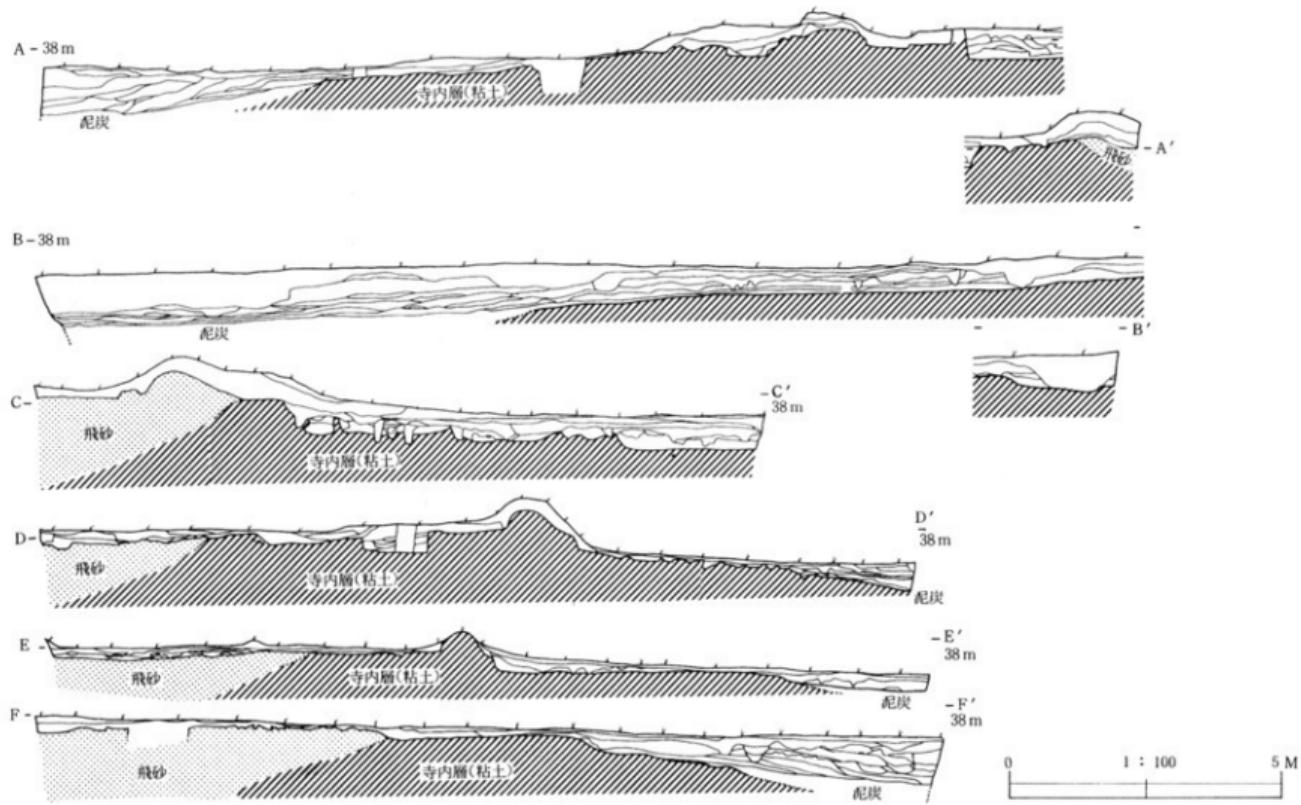
まず、北東区域でSG 463湿地に堆積した黒色砂面にて、すでに第26次調査で検出していたSD 436溝の西の延長を確認した(23日)。また、南区域中央の寺内層(粘土・シルト層)の削り残された高まり部でSI 609竪穴遺構、その南でSK 611~613土取り穴を検出した(11月2日)。



第59図 第34次調査周辺地形図



第60図 第34次調査検出遺構図



第61図 第34次調査土層断面図

一方、SG 463 湿地の調査も並行して実施し、SD 436 溝、黒色砂、赤褐色砂の堆積範囲の図化などを行った。終了後、黒色砂の除去にはいり、その下層に灰白色砂、黄褐色砂の堆積を確認した。両層は埠・瓦・赤褐色土器など遺物を含み、古代以前の黄褐色の飛砂と区別された（17日）。この灰白色砂、黄褐色砂は SG 463 湿地の西縁から流入した状態で堆積し、湿地中央まではいたっていない。

東区域中央から南部にかけて認められた赤褐色砂質土は土層観察では黒色砂の下層、灰白色砂・黄褐色砂上層に位置するものと判断された。SI 662 壓穴遺構、SK 623～625 土取り穴はこの赤褐色砂質土に覆われており、湿地の窪地とともに整地されたものと考えられた（25日）。

赤褐色砂質土、黄褐色砂面にての溝、ピット群の精査、実測後、同層の残る状態で写真撮影を行い（28日）、終了した段階で、両層を除去し、下層面を現していった（12月1日）。灰白色砂を除去した段階で SE 621 井戸跡を検出したが、井戸跡の西半分は発掘区外にあり、発掘区を拡張し、精査した（10日）。

発掘区全体が古代以前の飛砂層、寺内層（基盤粘土層）、湿地の泥炭層面となり、さらに下層には古代の遺構のあることが考えられないため、全体写真、平面実測を行い調査を終了した（11日）。

2) 検出遺構と出土遺物

検出遺構としては井戸跡1、溝5、竪穴遺構3、土取り穴、ピット群がある。又、遺構ではないが自然地形としての湿地、および、その整地層があるが、ここにまとめた。

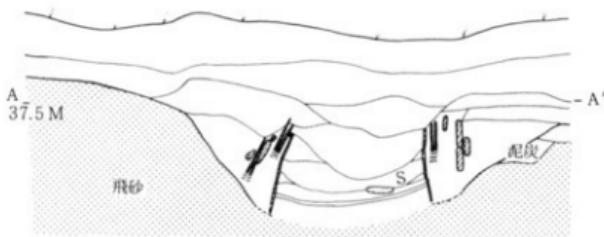
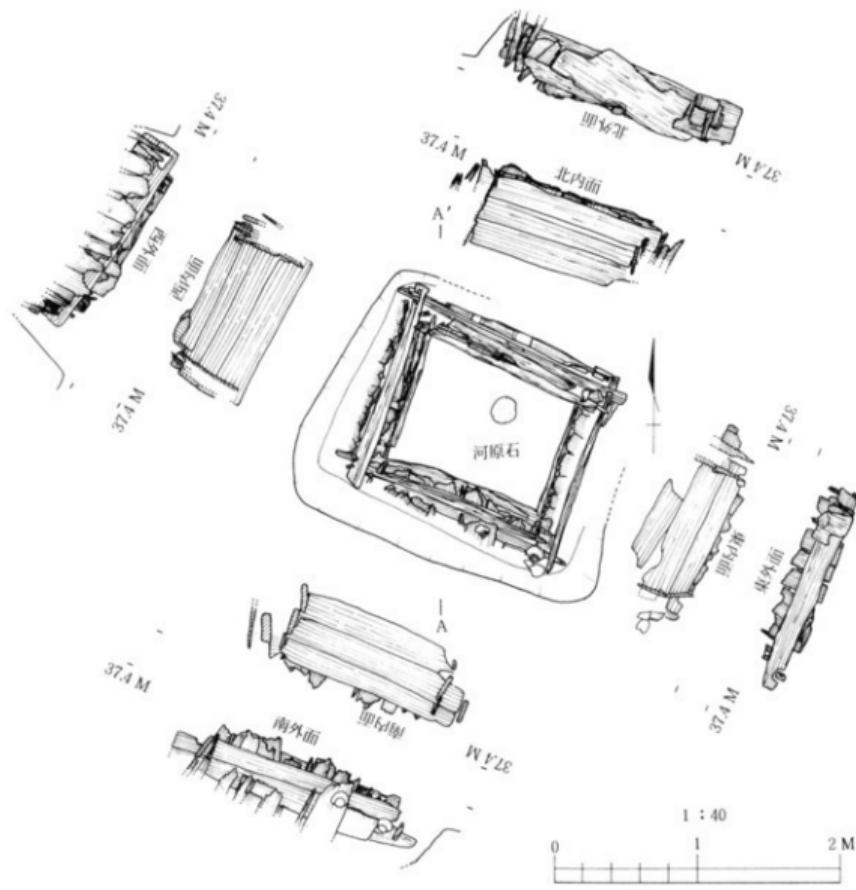
SE 621 井戸跡（第62図、図版17、18、19）

古代以前の飛砂、SG 463 湿地に堆積した黄褐色砂を掘り込んで構築している。井側板材の南半分は灰白色砂に覆わされていた。

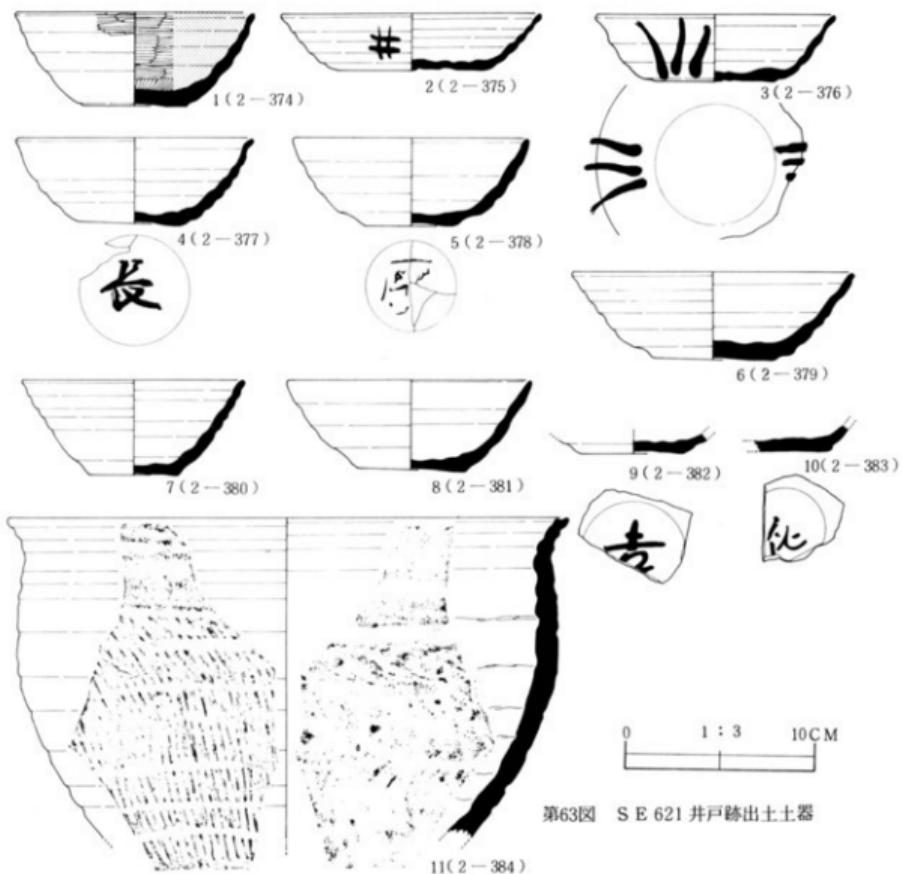
井側は基本的には四重の構造からなっていた。最も内側は3～4段の横板材で井籠組にし、その外に隙間なく縦板を二重、三重に立て並べていた。さらに、2段の横板材で井籠組し、その外には再び南・西辺では縦板材、北辺では横板材をあわせ並べている。内・外の井籠組の横板材の四隅の合わせ目には厚手の板材を杭として打ち込み横板材を固定している。

本来の湧水を溜める井側としての機能は内側の井籠組、縦板材にあったものと考えられ、外の2段の横板材と縦板材はこれを補強する機能をもつものであろう。

各部材の寸法は内側の井籠組の横板が幅20cm、厚さ0.5cm～1cm、長さが、南・北辺が1.3m、東・西辺が1.1mである。外側の井籠組の横板は幅15cm～20cm、厚さ3cm～5cm、長さが南・北辺で1.8m、東・西辺で1.5mである。縦板材は長さが不明であるが残存している最も長いもので50cm、厚さは0.5cm～1cm、幅は10cm～20cmである。なお、北の外の井籠組とその外の横板材にはくり込みが認められ、転用材と考えられた。埋土には泥炭層にみられる有機質に富んだ堆積物が充填し、底面よりやや浮いた状態で河原石が出土した。



第62図 S E 621 井戸跡



第63図 S E 621 井戸跡出土土器

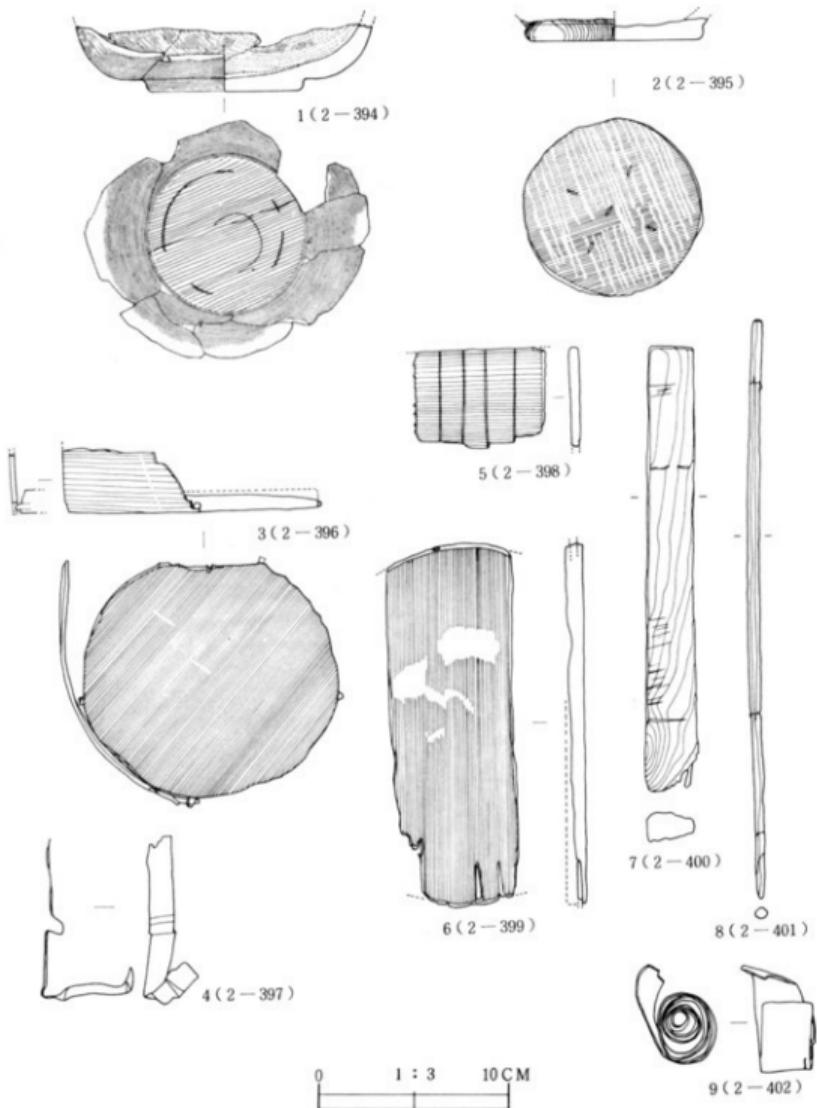
S E 621 井戸跡出土遺物（第63図、図版43）

7は井戸内埋土からの出土で、他はすべて井戸側の埋設の掘り方内埋土（裏込め）からの出土である。

土師器：1は回転糸切りで調整のない内面黒色処理の壺で、ミガキは外面口縁下まで行われ、内面のミガキは体部で横位、底部は放射状である。

須恵器：2、3は回転ヘラ切りで調整のない壺である。いずれも体部外面に墨書きがあり、3は相対する2ヶ所に認められる。2は「井」、3は「川」と判読される。

11は器高より口径の大きい鉢と考えられ、外面は条線上の平行叩きを行い、その後、回転を利用して棒状工具で凹線を引いている。内面は同心円状の当て具痕である。器面には巻き上げ（輪積み）



第64図 S E 621 井戸跡, S G 463 湿地泥炭面出土木製品

痕が明瞭に残る。

赤褐色土器：4～10はいずれも回転糸切りで調整のない坏である。4，5，9，10は底部外面に墨書が認められ、4は「長」，5は「厨」，9は「吉」と判読され、10は不明である。

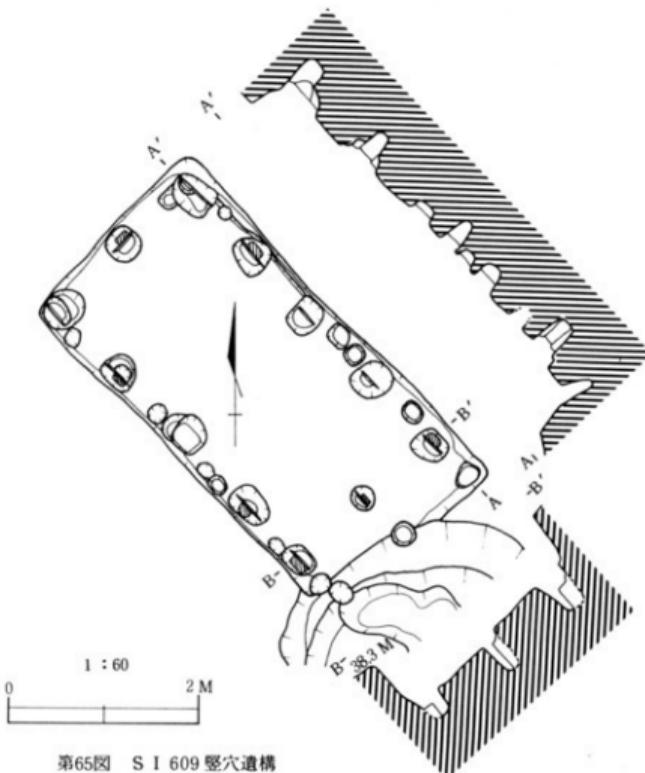
S E 621 井戸跡出土木製品（第64図、図版45）

いずれも井側内埋土の出土である。

2は挽物の楕で、底部外面にロクロの爪跡が残る。器面は著しく腐蝕し、漆が塗布されたものか不明である。3～6は曲物、あるいはその一部で、3は柾目板の底板で4ヶ所に木釘が残っており、4の桿皮が付いていた。6も柾目板の曲物底板で2ヶ所に木釘が残っている。7は棒状、8は串状の木製品である。

S I 609 積穴遺構（第65図、図版20）

約2.4m×4.8mの長方形の平面形で、基盤の寺内層（粘土層）を約50cm掘り込んでいる。長辺



第65図 S I 609 積穴遺構

である東壁は北で45°西に偏している。床面には各壁の直下に柱穴が認められ、直径約40cmの円形の掘り方の主柱穴が2間（1.1m + 0.9m）×4間（1m + 1m + 1m + 0.9m）に配され、さらに主柱穴間に直径20cmの添柱が対称位置に配されている。柱痕跡は方形で1辺15cm～20cmである。床面には焼土・炭化物がまったく認められず、カマドの付設などもないことから居住性の薄い遺構と考えられた。埋土は後述するS I 610 竪穴遺構と類似し、S K 611 土取り穴埋土を切っていることから、中世以降、あるいは室町時代以降の時期が考えられる。ちなみにS I 611 竪穴遺構埋土からは古瀬戸片、S K 611 土取り穴からは調整のない赤褐色土器が出土している。

S I 610 竪穴遺構（第60図）

約2.2m × 3.3mの長方形の平面形でSG 463 濡地整地層の赤褐色砂質土を切って、掘り込んでおり、粘土・シルト層までいたる。深さは約40cm～50cmで、北壁が東で35°南に振れている。カマド、柱穴は認められない。埋土はS I 609 竪穴遺構に類似し、一時に粘土を埋めこんでいる。

S I 610 竪穴遺構出土遺物（第68図、図版43）

Iは埋土から出土した古瀬戸壺の破片で、肩部に4条の沈線がめぐる。

S I 622 竪穴遺構（第66図、図版20）

赤褐色砂質土の整地層を除去した段階で検出した。南北約2.5m × 東西約2.5mの方形でSG 463 濡地への傾斜面に位置し、床面は西が高く、東とでは約40cmの差がある。掘り込みは20cm～40cm粘土層を下げており、中央には1m四方程に不整形に窪められている。柱穴、カマドは認められなかった。

S I 622 竪穴遺構出土遺物

（第68図、図版44）

須恵器：7は回転糸切りの台付壺で、低い台を貼り付けた後に台周縁をナデつけている。

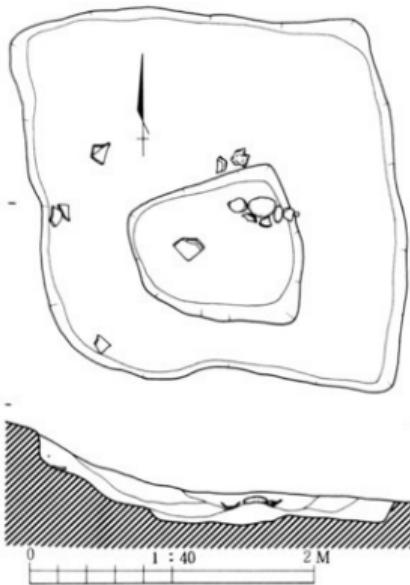
赤褐色土器：8～10は回転糸切りで調整のない壺である。

他に壺、須恵器大甕の破片が出土した。

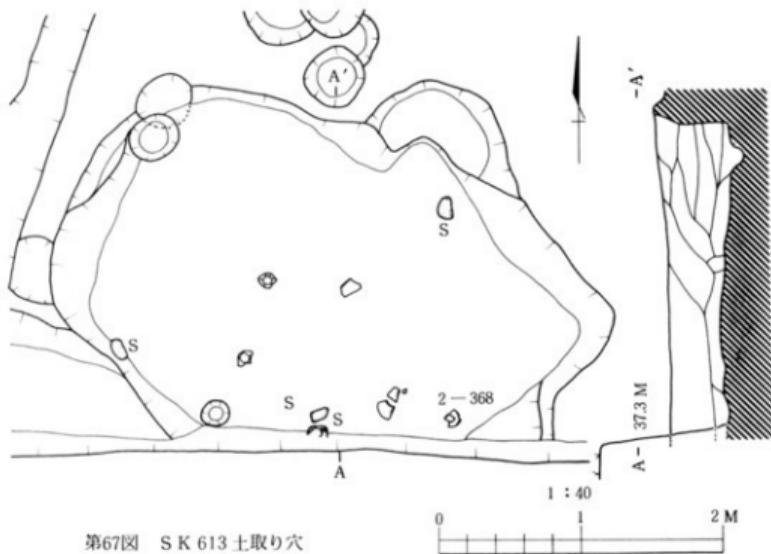
S K 611～613 土取り穴

（第60・67図、図版21）

直径約3m～4mの不整円形で粘土層を約50cm、最も深いもので1m強掘り込んでいる。底面は凹凸が著しいが全体



第66図 S I 622 竪穴遺構



第67図 SK 613 土取り穴

としては鍋底状の形態で、埋土はSG 463 濡地整地層の赤褐色砂質土に類似している。

S K 611 土取り穴出土遺物（第68図、図版43）

燈明皿：埋土からの出土で、赤褐色を呈するきわめて小ぶりなつくりである。ロクロ使用で、切り離しは静止した状態でヘラ状工具で行っている。

縄文土器：3は太い沈線による渦巻文である。

S K 613 土取り穴出土遺物（第68図、図版44）

いずれも埋土からの出土である。

須恵器：4は回転ヘラ切りで調整のない坏で底部外面に「掾」あるいは「祿」と判読される墨書が認められる。

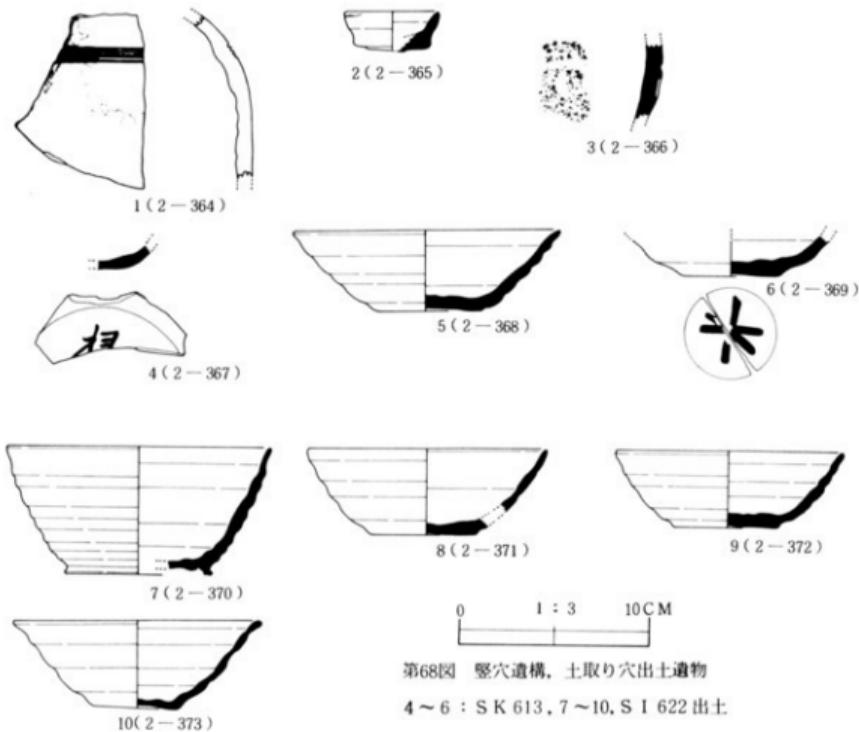
赤褐色土器：5、6は回転糸切りで調整のない坏で、6の底部外面には記号状の墨書が認められる。

S K 623～625 土取り穴（第60図）

SG 463 濡地の整地層である赤褐色砂質土を掘り下げた段階で不整な円形を呈する平面形が確認された。土層は同質の赤褐色砂質土によって、いっきに埋められた状態であった。深さは30cm～50cmで、底面は凹凸が著しいが、全体に鍋底状である。埋土内からは瓦、博の小片、赤褐色土器片が出土している。

S K 619 土壙（第60図、図版22）

SG 463 濡地に堆積した黄褐色砂面にて検出した。直径約1.2m、深さ約60cmの土壙で、掘り込



第68図 整穴遺構、土取り穴出土遺物

4~6: SK 613, 7~10, SI 622出土

みは下層の泥炭層にいたっている。埋土からは須恵器、赤褐色土器片が出土した。

S D 436 溝 (第60図、図版23)

第26次調査ですでに検出している溝である。本次の調査ではその西の延長が明確になった。S G 463 濡地の二時期の整地層を切っており、新しい整地層は中世以降の所産であることから、この溝の年代も中世以降と考えられている。本調査地では古い整地層（赤褐色砂質土）とその上層の黒色砂を切って、ほぼ黒色砂の堆積に沿って北西方向に延びている。幅は30cm~40cm、深さは20cm~30cmである。

S D 614, 616~618 溝 (第60図、図版22)

幅30cm~40cm、深さ10cm~20cmの深い溝である。いずれも時期については判然としていないが、S G 463 濡地に向って掘り込まれ、排水溝と考えられた。S D 614 溝は S K 612 土取り穴埋土を切っており、これより新しい。

S A 615 ピット群（第60図）

S K 623～625 土取り穴の西に位置し、整地層（赤褐色砂質土）面から掘り込まれている。埋土は黒色土、粘土混りの赤褐色土、直径は20cm～40cm、深さは20cm～30cmである。柱痕跡の明瞭なものもあるが建物として把握することはできなかった。

S A 620 ピット群（第60図、図版22）

S G 463 湿地に堆積した黄褐色砂面にて検出した。直径10cm、深さ10cmたらずの小さいものと、直径30cm、深さ20cmほどのものがある。柱痕跡の認められるものはなく、埋土は黒色砂で、赤褐色土器の細片が混入していた。

S G 463 湿地（第60図、図版16・17）

本次の調査で確認した東西幅は約35mであるが、さらに北西方向に広がり、発掘区外に延びている。南北は第22・26次調査の結果、60m以上となることが判明している。地表面から深さ1.35mの位置から2.64mまでの厚さ1.29mに泥炭層、有機質粘土が堆積していた。泥炭のC-14年代測定の結果は1.35m～1.37mで 1780 ± 100年B.P.、2.62m～2.64mで 3610 ± 130年B.P.であり、最下層付近の泥炭から縄文中期末、大木10式の土器が出土している。

本次調査地での湿地堆積層を大別すると、上層から表土（耕作土）、暗褐色砂質土、灰青色砂（粘土）、黒色砂、赤褐色砂質土、灰白色砂、黄褐色砂、泥炭（有機質層）、基盤の寺内層（粘土・シルト）、北西部では飛砂となる。灰青色砂より上は耕作による擾乱層である。黒色砂は赤褐色土器の細片を含む土層で、遺構としては S D 436 溝が確認された。灰白色砂と黄褐色砂は S G 463 湿地に流入して堆積したものと考えられ、S E 621 井戸跡は黄褐色砂を掘り込んで構築し、灰白色砂に覆われていた。いずれも瓦・博とともに回転糸切りで調整のない赤褐色土器が出土している。

S G 463 湿地堆積層出土遺物（第69図、図版44・45）

灰青色砂出土遺物

赤褐色土器：7は回転糸切り、調整のない坏で、底部外面に「厨」の墨書が認められる。

珠洲系陶器：13は甕の底部片で外面には3cm幅、13本を一単位とする条線状平行叩き、底部は砂底となっている。16は2.5cm幅、14本を1単位とする繊細な卸し目をもつ片口鉢片である。

黒色砂出土遺物

赤褐色土器：6、10、11は回転糸切りで調整のない坏である。6は小型で浅く、口縁部に煤状の炭化物が付着し、燈明皿と考えられる。10、11は器肉も厚手で大型なものである。

青磁：12は内面に片切彫りの線刻のある碗で、磁色は青色にわずかに緑色を帯びている。

珠洲系陶器：14、15は片口鉢の破片である。14は密であるが粗い太目の卸し目である。15は卸し目が認められないが、口縁が内側に引き出されており珠洲系陶器でも古い形態と考えられる。

赤褐色砂質土出土遺物

須恵器：5は回転ヘラ切りの台付坏である。台周縁は貼り付け後ナデつけている。



第69図 SG 463 濕地埋土各層出土遺物

灰白色砂質土出土遺物

須恵器：1、2は回転ヘラ切り、調整のない坏で、色調は1が底部、2が全体に赤褐色を呈している。

黄褐色砂出土遺物

須恵器：3は回転ヘラ切り、調整のない坏で、部分的に赤褐色を呈する。

赤褐色土器：8、9は回転糸切り、調整のない坏で、底部外面に墨書が認められる。8は「連」か「連」、9は「穴」か「六」と判読できる。

縄文土器・石器：17～20は沈線で区画し、磨り消しを施すもので、17は波状口縁で楕円形の区画を残し磨り消している。18、19は平縁で口縁下が幅広の無文帯となる。23は平行沈線による曲線文である。24は横型の石匙の断片で、剥片を利用し、主要剥利面からの加擊によって丸味のある刃部を作り出している。

泥炭層表面出土遺物

須恵器：4は回転ヘラ切り、調整のない坏で、部分的に赤褐色を呈する。底部外面に墨書が認められるが判読不能である。

木製品（第64図、図版45）

1は低い台のつく漆椀である。外面には黒漆が塗布されている。台部には同心円状にロクロ利用の削り痕跡が残る。9は一定幅で切り取ったと考えられる樺皮である。

泥炭層下層出土遺物

縄文土器：21、22はヘラでなでつけた器表面に半截竹管状工具による平行沈線で弧・曲線文を施文している。

3) まとめ

第34次調査の結果、明らかになったことを箇条にまとめると以下のようになる。

①調査目的の1つであった壮大な掘立柱建物群に伴う、奈良時代に位置づけられる遺構の検出はなかった。

②SG 463 濡地の範囲については東西が約35m、さらに北西方向に延びている。南北は60m以上となる。

③第26次調査で検出した中世の整地は本次の調査地では認められない。一方、平安時代後半の整地（赤褐色砂質土）は本次の調査地のSG 463 濡地南西部でも確認され、この整地がSG 463 濡地の南縁に全体的に、広範囲に行っているものであることが判明した。

④高清水丘陵を覆う古代以前の飛砂は本次の調査地の西区域を東限とすることが判明した。調査地の西区域で基盤の寺内層（粘土・シルト層）が西に傾斜し、飛砂はこの傾斜面頂点近くで漸次、薄い堆積となっている。

以上、4点であるが検出遺構の年代について簡単にふれてみると、埋土に古瀬戸を含むS I 610

堅穴遺構、これに埋土の類似する S I 609 堅穴遺構、珠洲系陶器を含む整地層を掘り込んでいる S D 436 溝などは中世以降の遺構と考えられる。

一方、井側の掘り方埋土から回転糸切りで調整のない赤褐色土器が出土している S E 621 井戸跡は平安時代の後半に構築されたものと考えられた。埋土から同様な赤褐色土器が出土する S K 611 ~613、623~625 土取り穴 S 1622 堅穴遺構は、その掘り込まれた年代は明確でないが、埋められず長い期間にわたって開口していたとは考えられず、整地された平安時代後半とそう隔たりはないものと考えられる。

調査成果の普及と関連研究活動

(1)現地説明会の開催

第33次調査について

講師 小 松 正 夫 昭和56年9月19日

(2)諸団体開催研究会議への参加

- 古代学協会仙台支部主催 公開学術講演会
発表 小 松 正 夫 「秋田城跡を発掘して」 昭和56年6月6日
- 秋田市東部公民館主催 「秋田の史跡を学ぶ会」
講師 小 松 正 夫 「秋田城の役割と意義」 昭和56年6月10日
- 秋田大学史学会
発表 日 野 久 「秋田城跡第33次調査について」 昭和56年11月8日
- 古代城柵官衙遺跡検討会文書資料部会
発表 日 野 久 「秋田城跡第25次検出井戸跡について」
参加所員 西鳥羽 礼 子 昭和56年11月28・29日



図版 1
(北から)

第33次調査、航空写真



図版2 第32次調査 上 第1トレンチ全景（東から）

下 S F552, S B553A・B, S D554・555（南から）

S B553 A 建物跡
堀り方断面
(東から)



S X556 溝跡
断面
(西から)



S A557 柱列
(南から)





図版4 上 築地崩壊土瓦層（西から）

下左 S X556溝跡（東から）

下右 第2トレンチ全景（南から）



左 第3トレンチ全景
(南から)

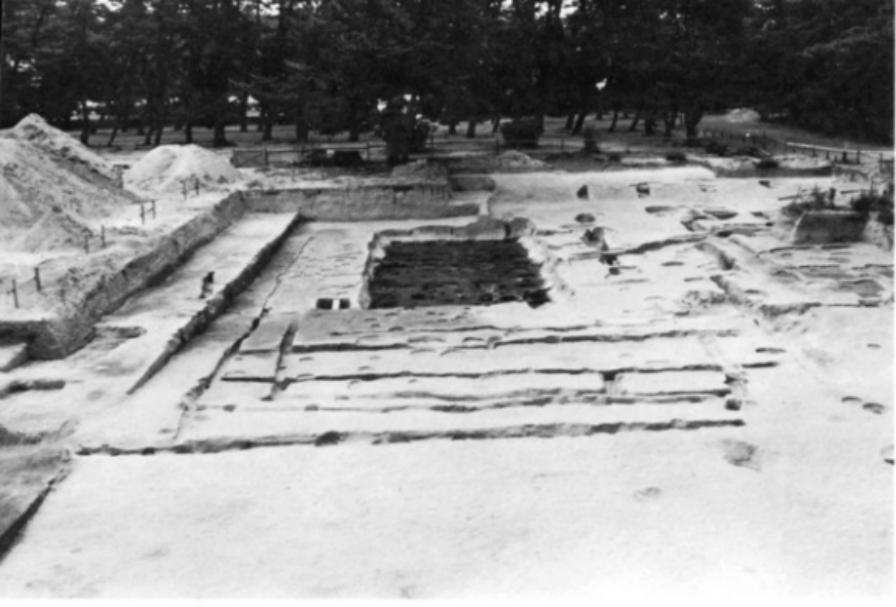
右 第4トレンチ全景
(南から)

S X558粘土積土



S X561 カマド状遺構





図版6 上 第33次調査全景（南から）

下 第33次調査全景（西から）



図版7 上 上層遺構群（南から）

下 S B 587 A・B 建物跡（南から）



図版8 上 S B 588・589建物跡, S A 590柱列 (西から)

下 S B 605建物跡, S K 608土壤 (西から)



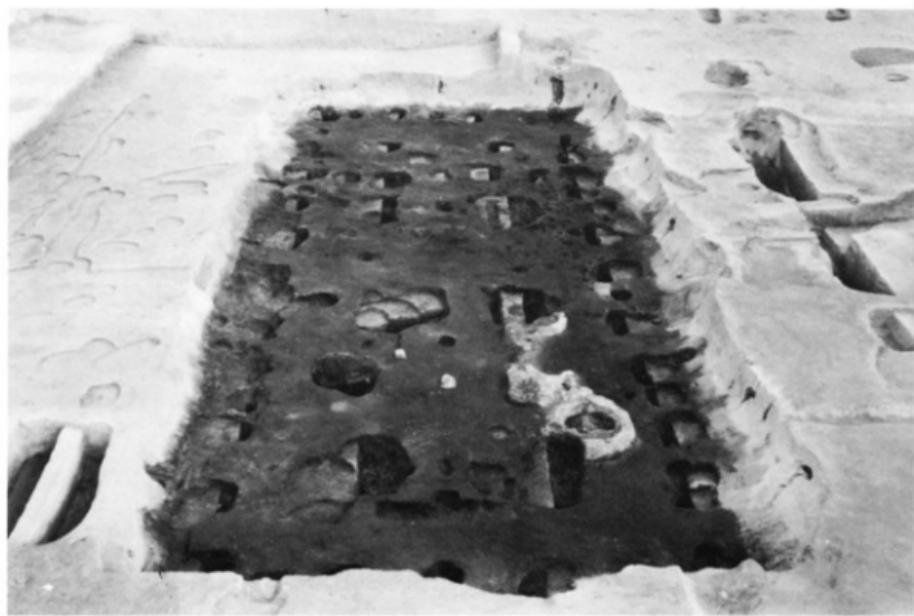
図版9 上 S B 604 A・B 建物跡（北から）

下 S B 605 建物跡, S A 598 土壙, S A 600・601 柱列（西から）



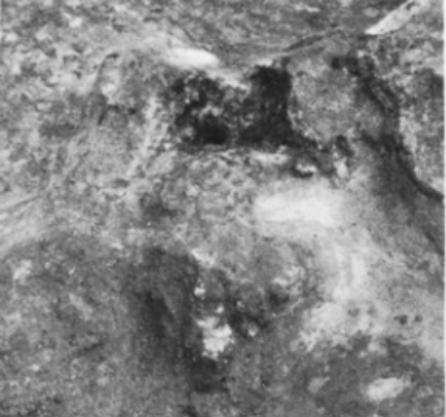
図版10 上 S A 565~568, 570, 571柱列跡（西から）

下 S X582縦穴状遺構（南から）



図版11 上 SI 593 A・B住居跡（鍛冶工房跡）、埋土土層断面（南から）

下 SI 593 A・B住居跡（鍛冶工房跡）（完掘後）（南から）



左 S X594炉跡（鍛冶遺構）

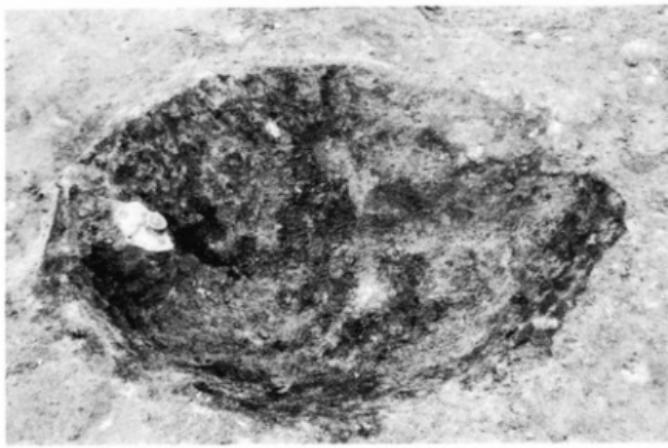
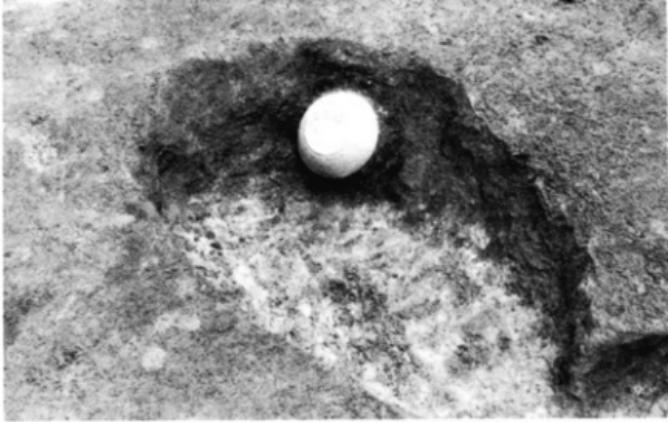
右 S X594炉跡西側断面
(南から)



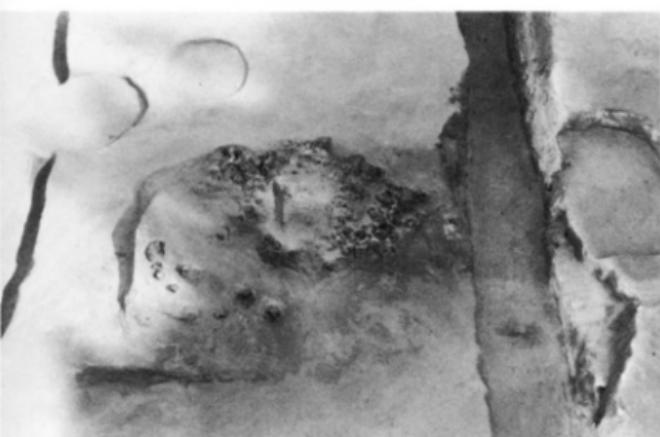
S X594炉跡断面（東から）



S X594炉跡断面（南から）



上 S X595土壤
中 S X596土壤
下 S I 593 B住居跡
南壁掘り方



上 S I 593 A・B 住居跡
主柱北東隅（東から）

中 S I 581 住居跡カマド
(西から)

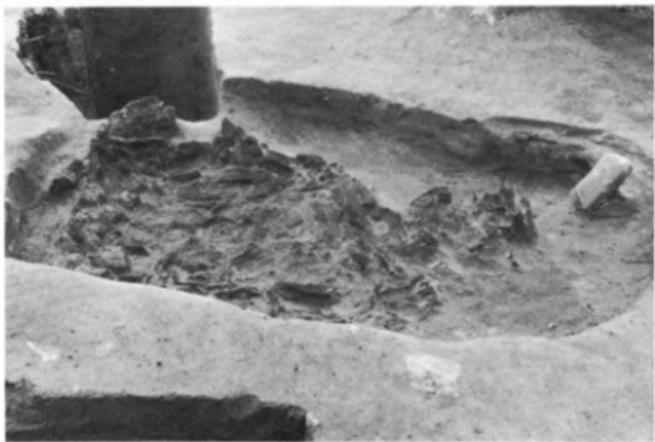
下 S X 597 土壙跡
(南から)



上 S I 579住居跡
(南から)

中 S K585土壤跡
(北から)

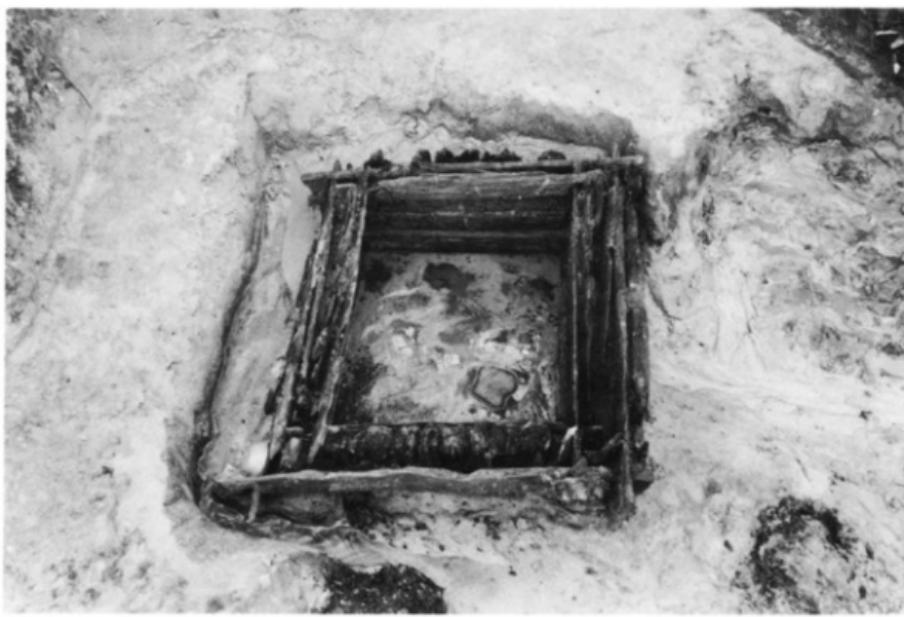
下 S B588建物跡
梁行北柱





図版16 第34次調査 上 全景航空写真（東から）

下 全景（南から）



図版17 上 全景（北から）

下 S E 621 井戸跡（東から）



上 S E 621井戸跡
土層断面
(東から)



中 S E 621井戸跡
井籠組板材
(南から)



下 S E 621井戸跡
井籠組板材
(東から)

S E 621井戸跡
井籠組板材
(北から)



S E 621井戸跡
北西隅
材組み合せ
(西から)



S E 621井戸跡
南西隅
材組み合せ
(南から)





図版20 上 S I 609竪穴遺構（北西から）

下 S I 622竪穴遺構（東から）

右 S K611・612
613土壤
(東から)

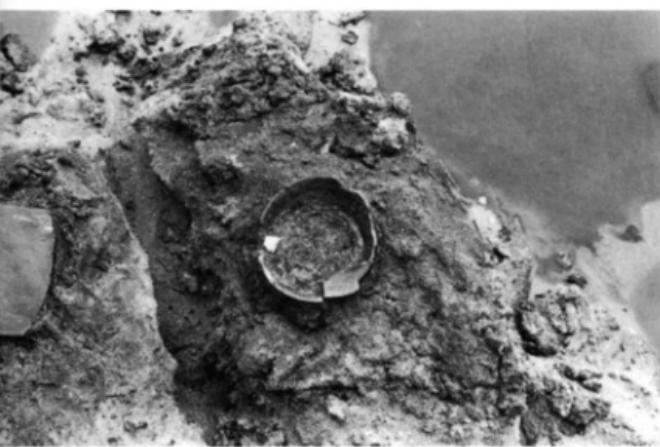


図版21 下 S G463
黄褐色砂
堆積状況
(東から)





上 黄褐色砂面
検出遺構
S D616~618
S K619, S A620
(南から)



中 灰白色砂
遺物出土状況



下 スクモ層出土
漆器碗

S D436溝跡
(東南から)



S D436溝跡
断面
(東南から)





空素沼

護国神社

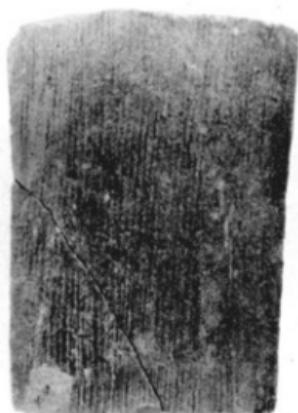
高清水中学校

高清水小学校

古四王神社

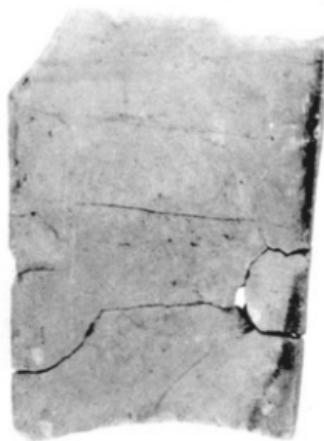
勅使路

秋田城跡航空写真



1

1



2

2



3

3

第32次調査出土瓦

S F 552築地崩壊土出土

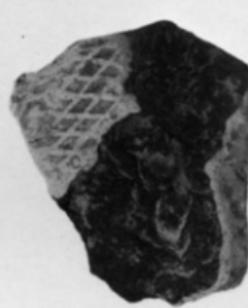


1

1



2



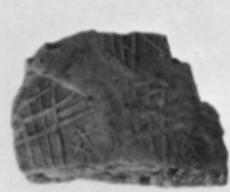
2



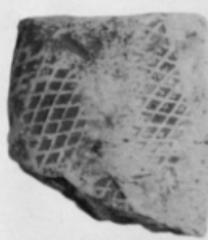
3



4



4



3

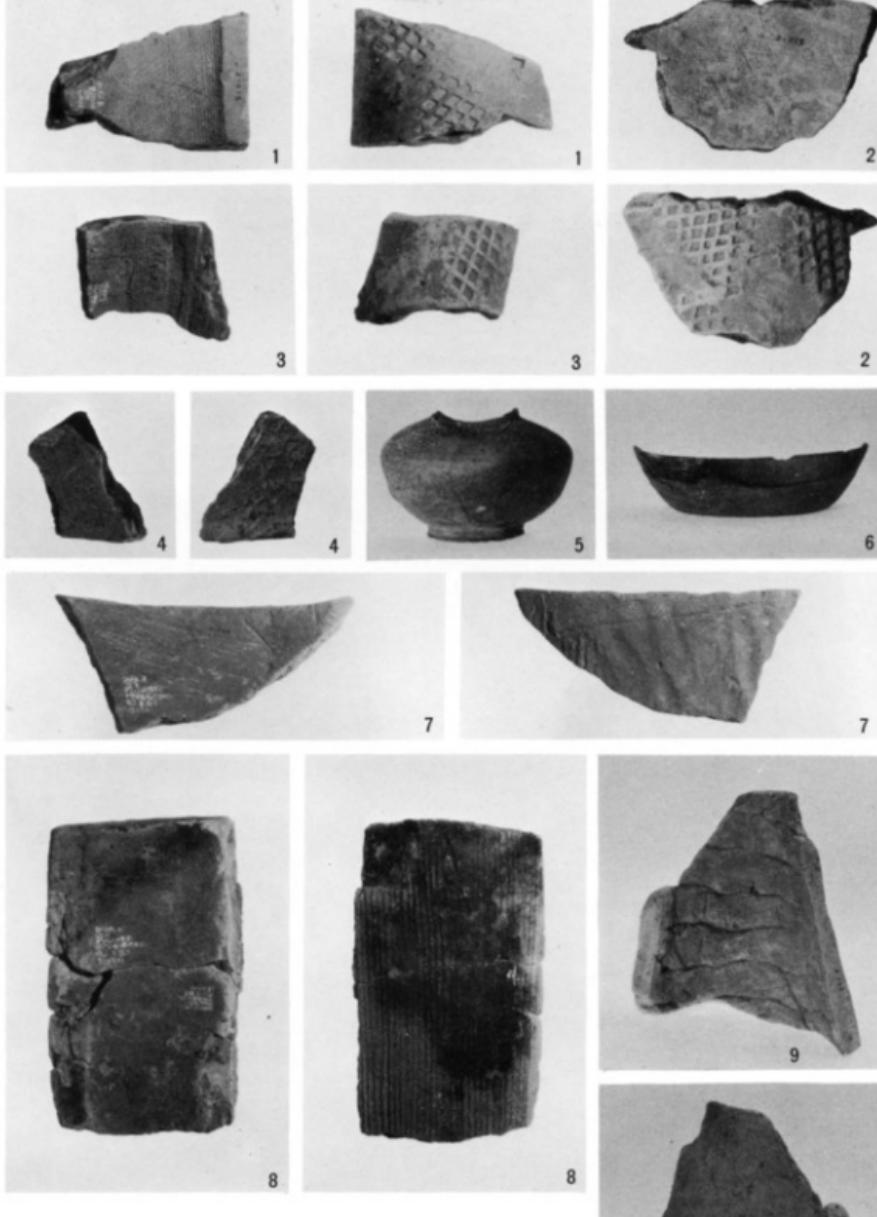


5



5

第32次調査出土格子目瓦
S F552築地崩壊土出土



第32次調査出土遺物

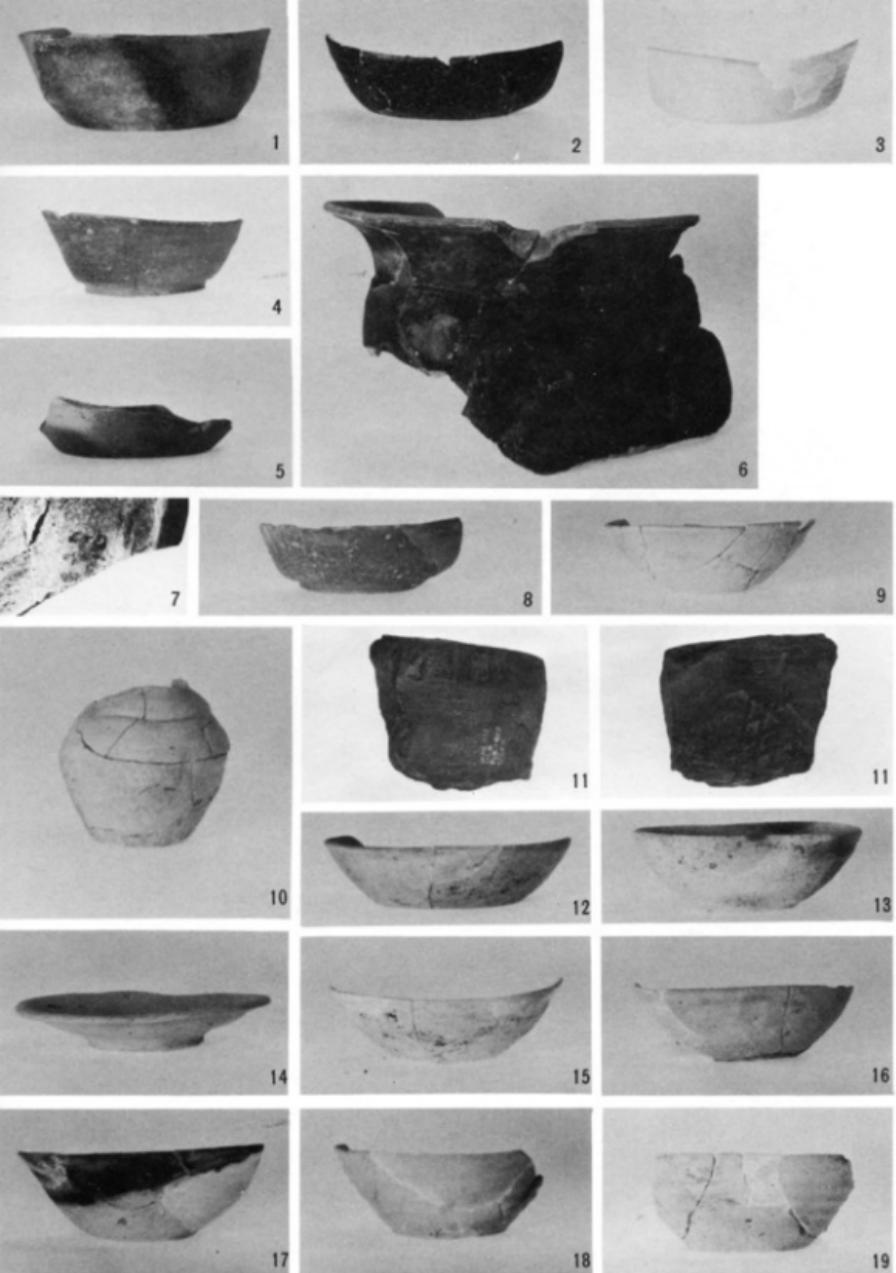
1 ~ 3, S F552築地崩壊土出土格子目瓦

4, S D554溝内埋土出土

5, 第1トレンチ東側赤褐色砂出土

6, " " 黒褐色土出土

7 ~ 9, 第1トレンチ東側出土瓦



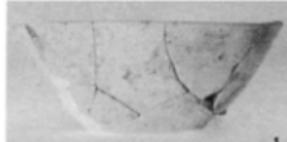
図版27 第32次調査出土遺物

1～6, 第2トレンチ, S I 559出土

7～11, " 各層出土

12～16, 第3トレンチ, S X 561・562出土

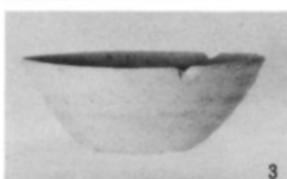
17～19, " 各層出土



1



2



3



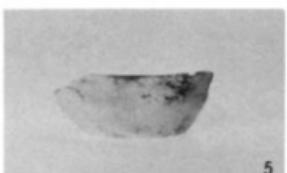
4



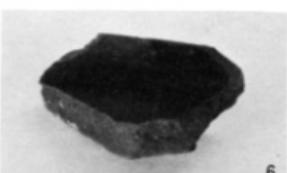
第32次調査出土遺物

1・2、第3トレンチ、各層出土

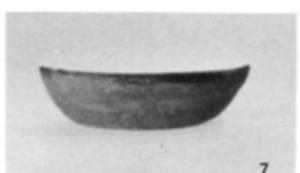
3・4、第4トレンチ、S I 564出土



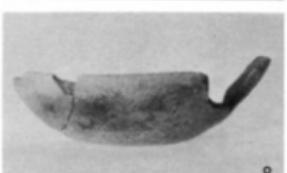
5



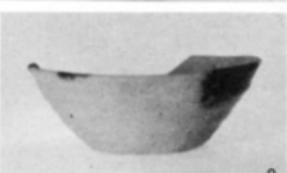
6



7



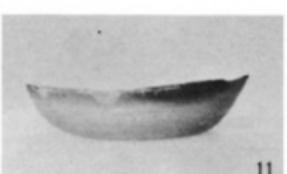
8



9



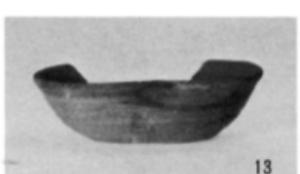
10



11



12



13

図版28 第33次調査出土遺物

5～6、S B586

7、S B587

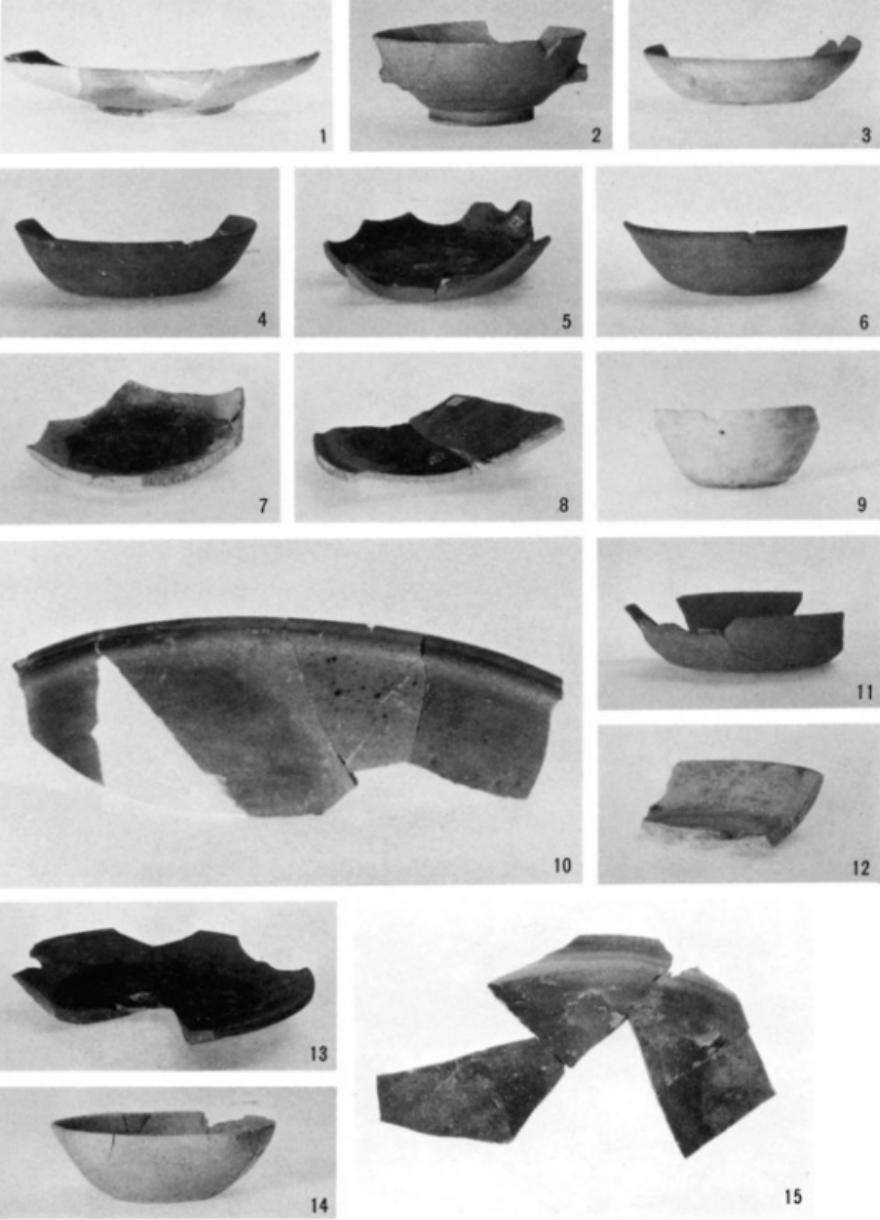
8～10、S B588

11～13、S I 579

14、S I 580 出土



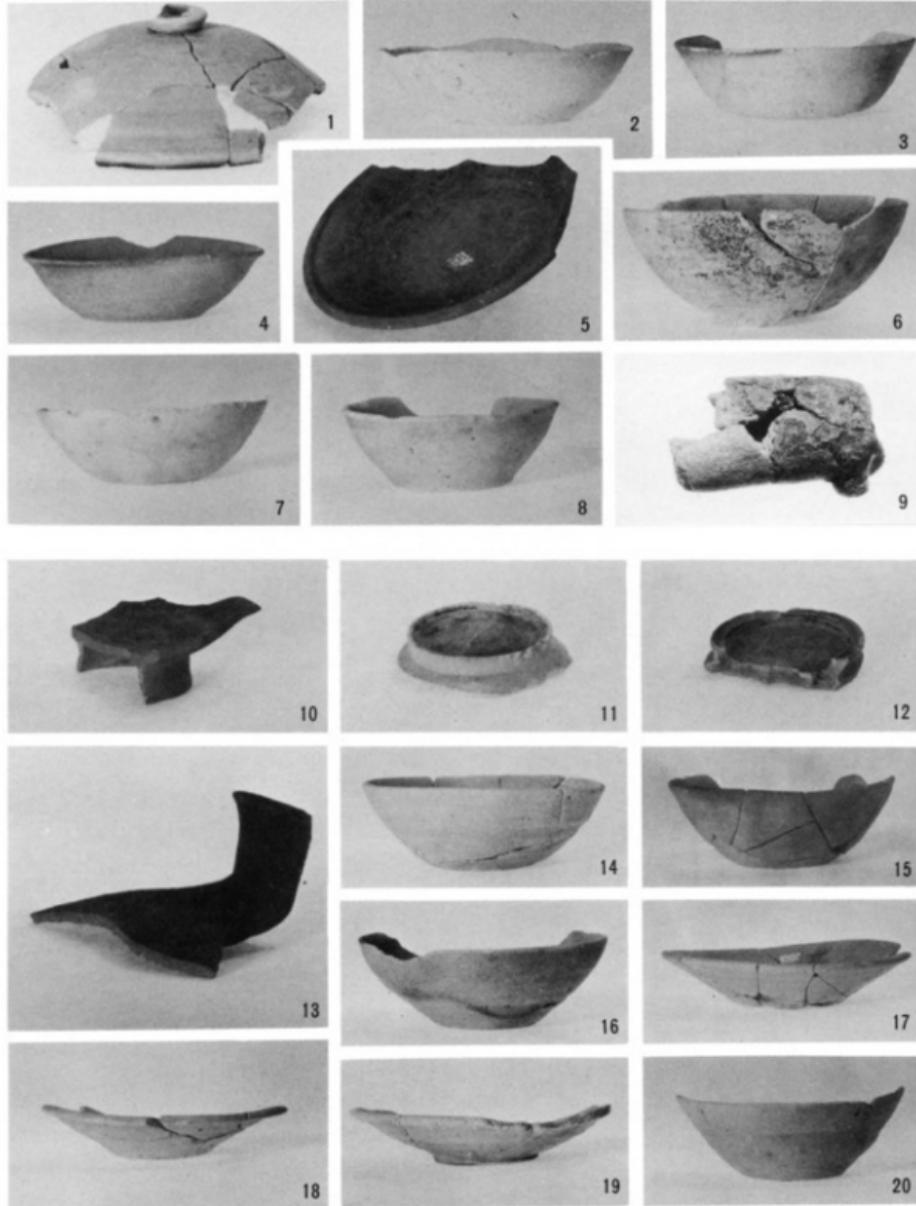
14



図版29 第33次調査出土遺物

1~9 S I 593

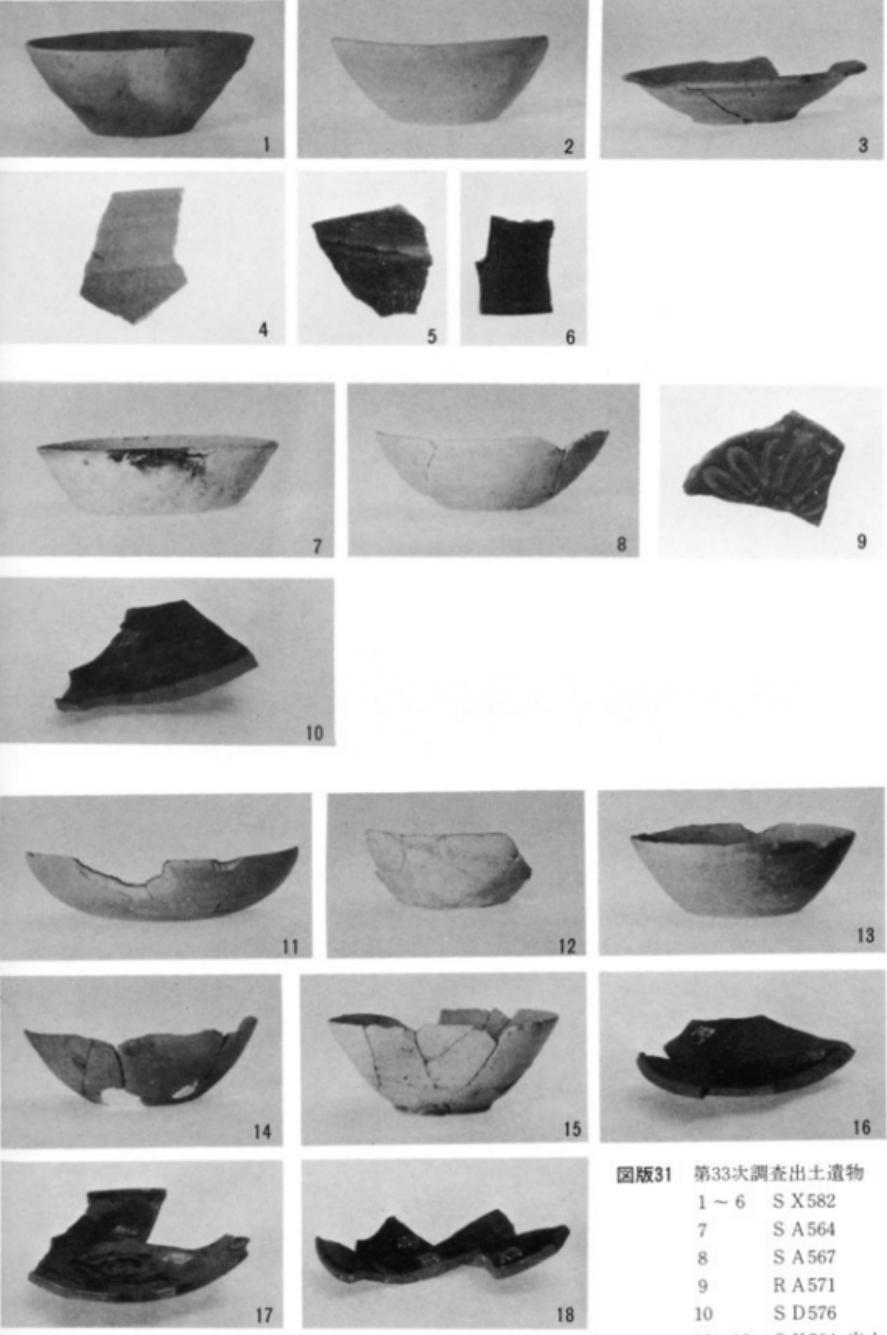
10~15 S I 593 A 出土



図版30 第33次調査出土遺物

1~9 S I 593B

10~20 S X582 出土



図版31 第33次調査出土遺物

1 ~ 6 S X582

7 S A564

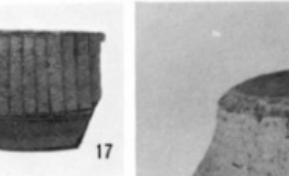
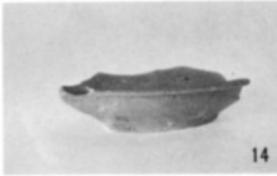
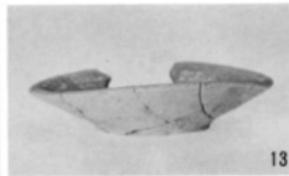
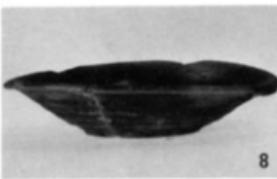
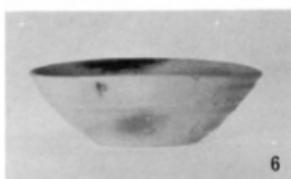
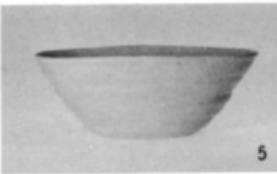
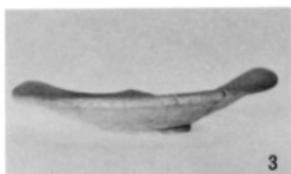
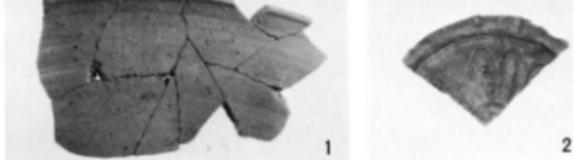
8 S A567

9 R A571

10 S D576

11~19 S K584 出土

1~2 S K584
出土



圖版32 第33次調查出土遺物

3 褐色砂質土層

4 赤褐色土層

5~10 黃色砂・黃褐色砂層

11~18 炭化物層 出土



1



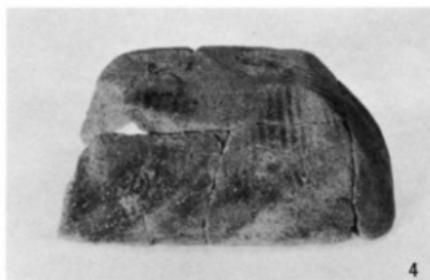
2



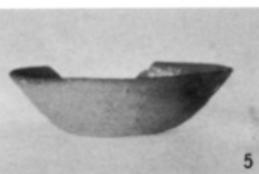
2



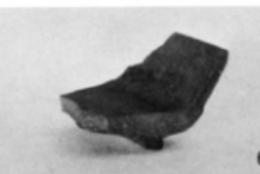
3



4



5



6



7



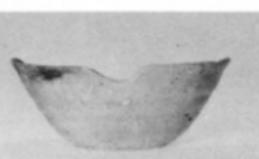
8



9



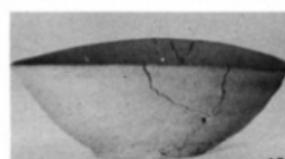
10



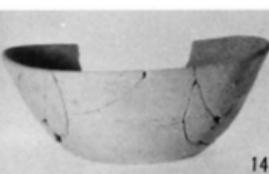
11



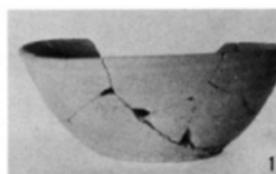
12



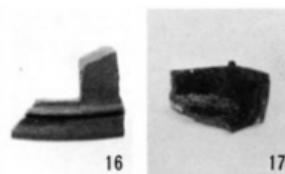
13



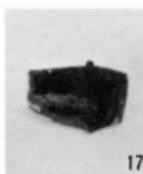
14



15



16

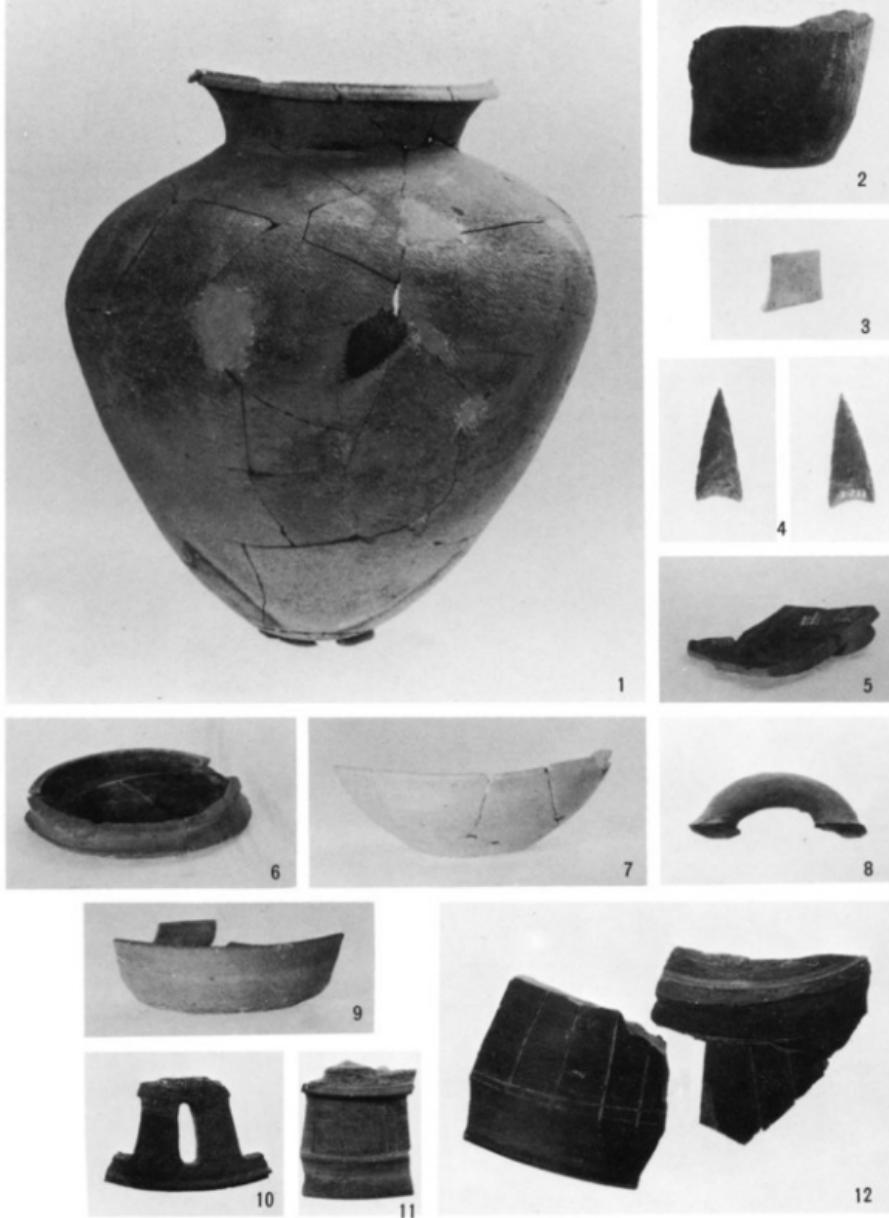


17

图版33 第33次调查出土遗物

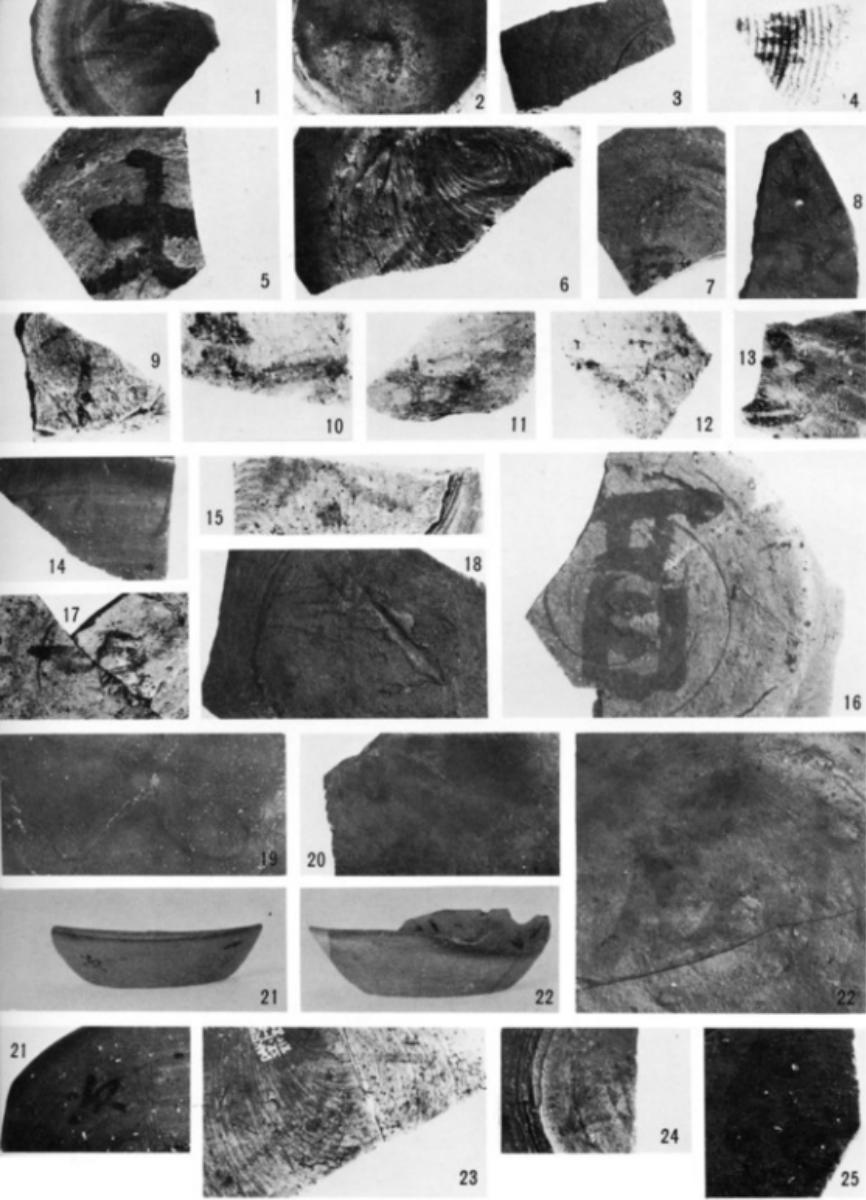
1~4 炭化物层

5~17 赤褐色砂层出土

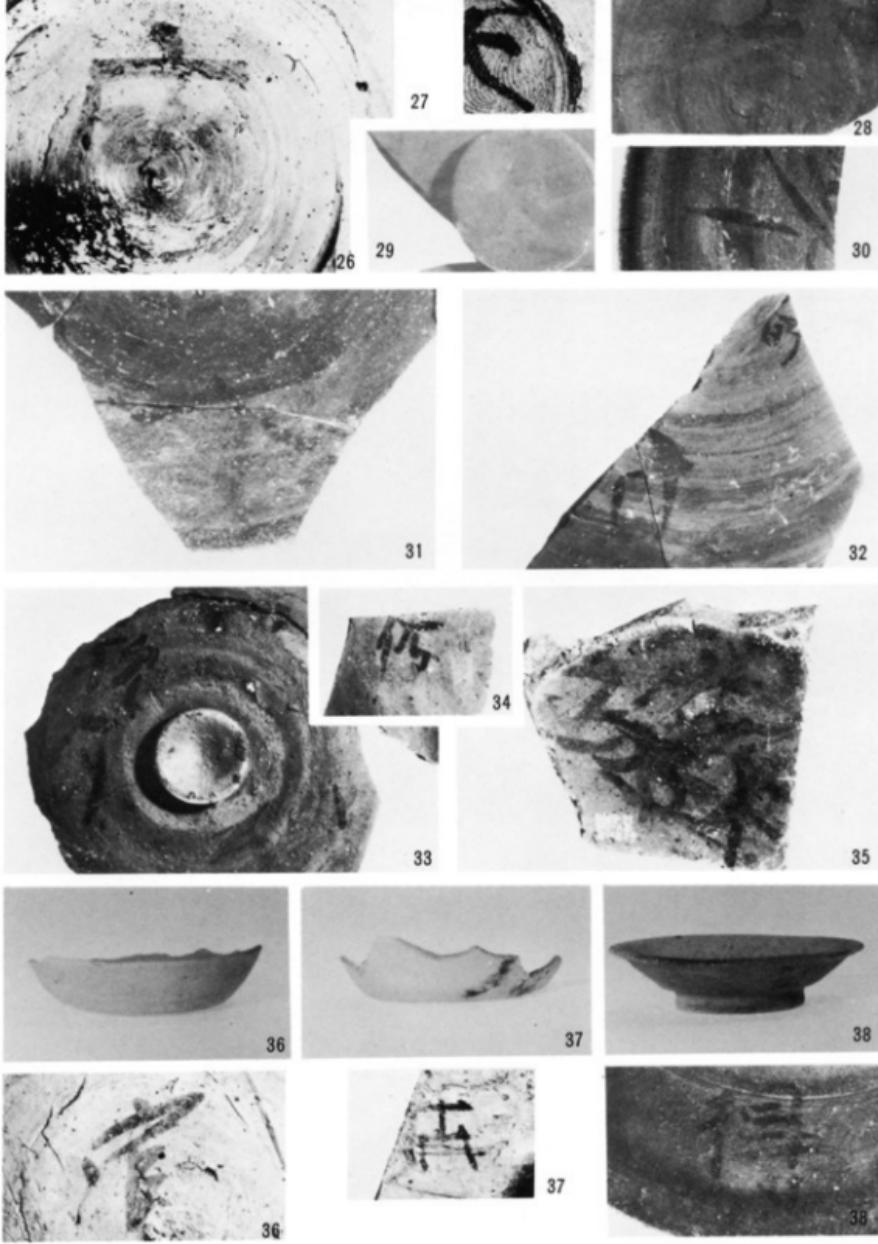


圖版34 第33次調查出土遺物

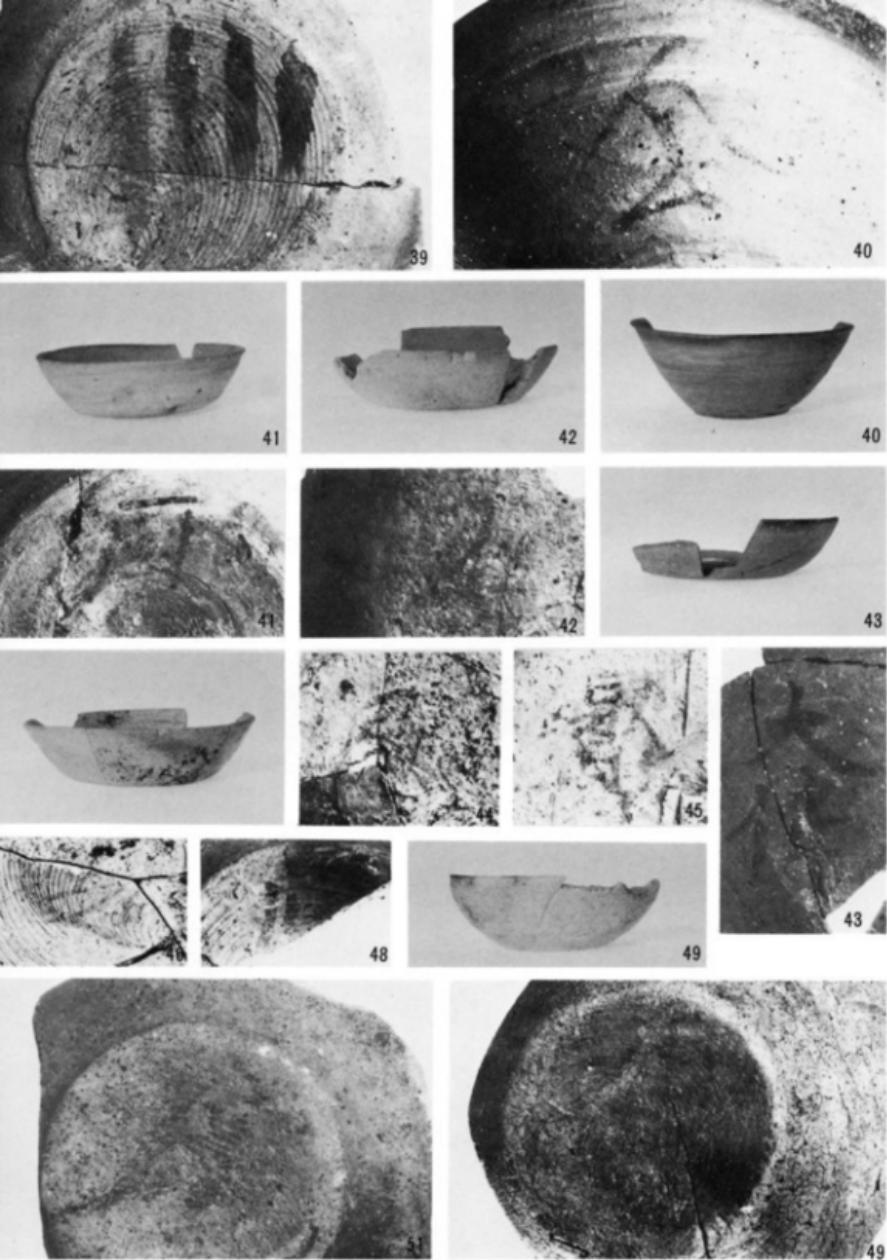
- 1 褐色砂質土
- 2 ~ 4 赤褐色砂層
- 5 ~ 8 暗褐色砂層
- 9 ~ 12 褐色砂層（最下層）出土



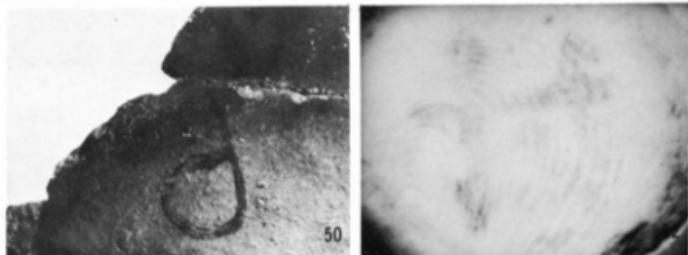
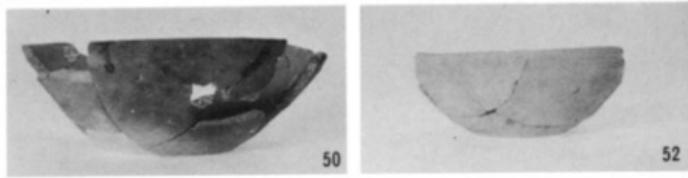
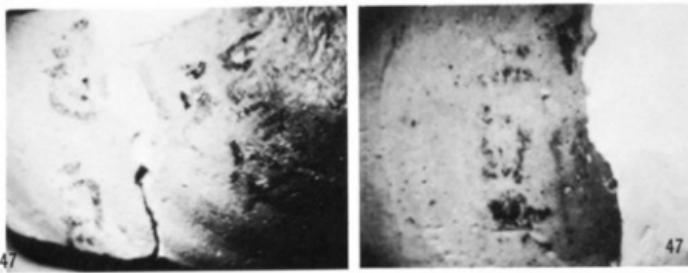
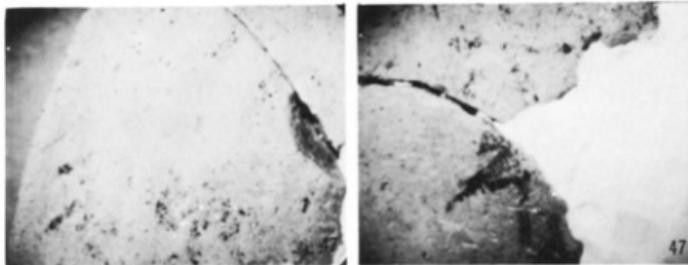
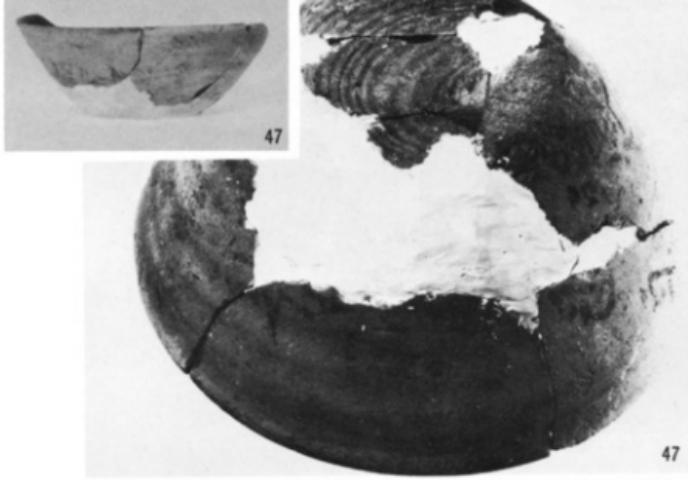
図版35 第33次調査出土墨書土器



図版36 第33次調査出土墨書土器

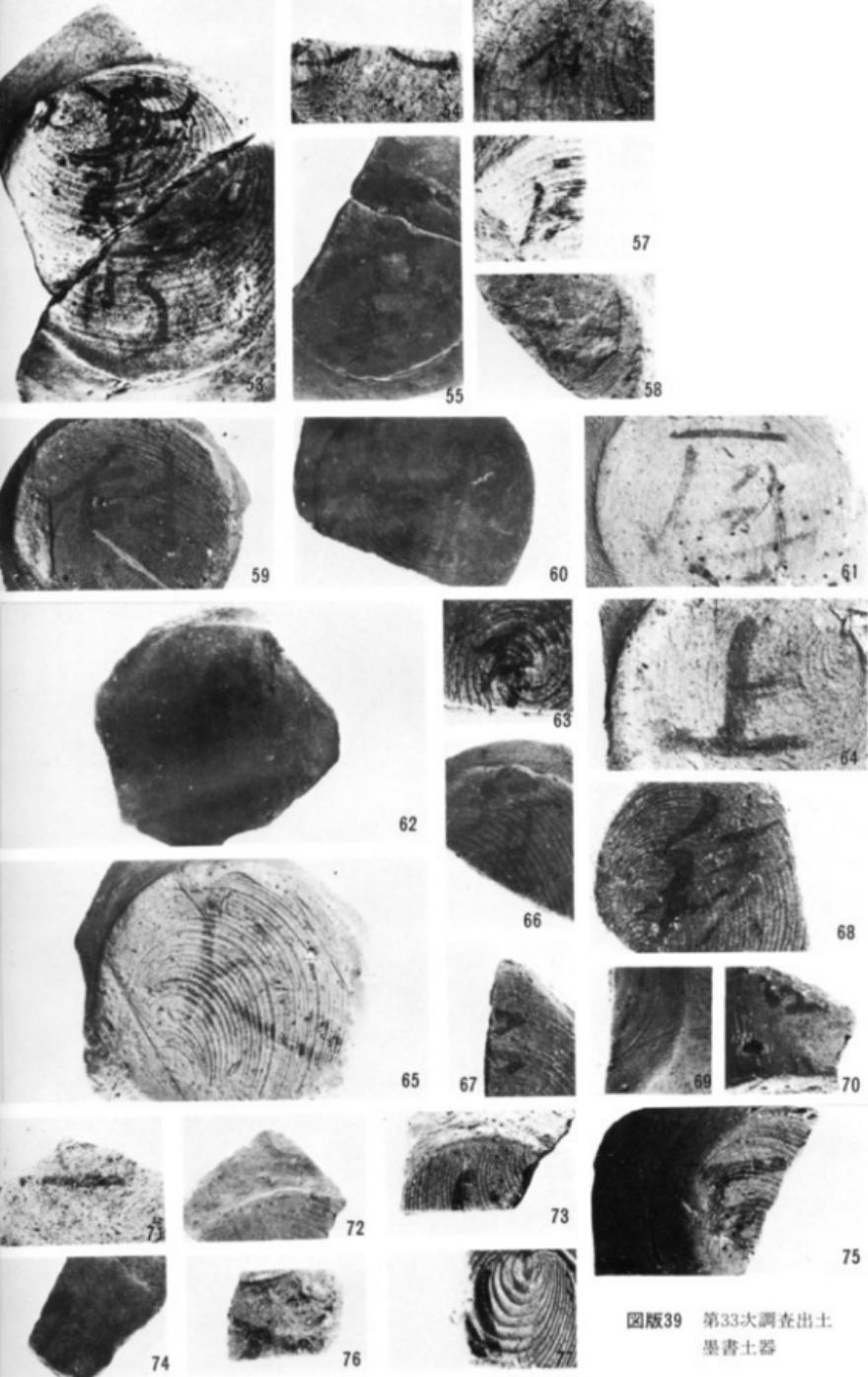


図版37 第33次調査出土墨書土器

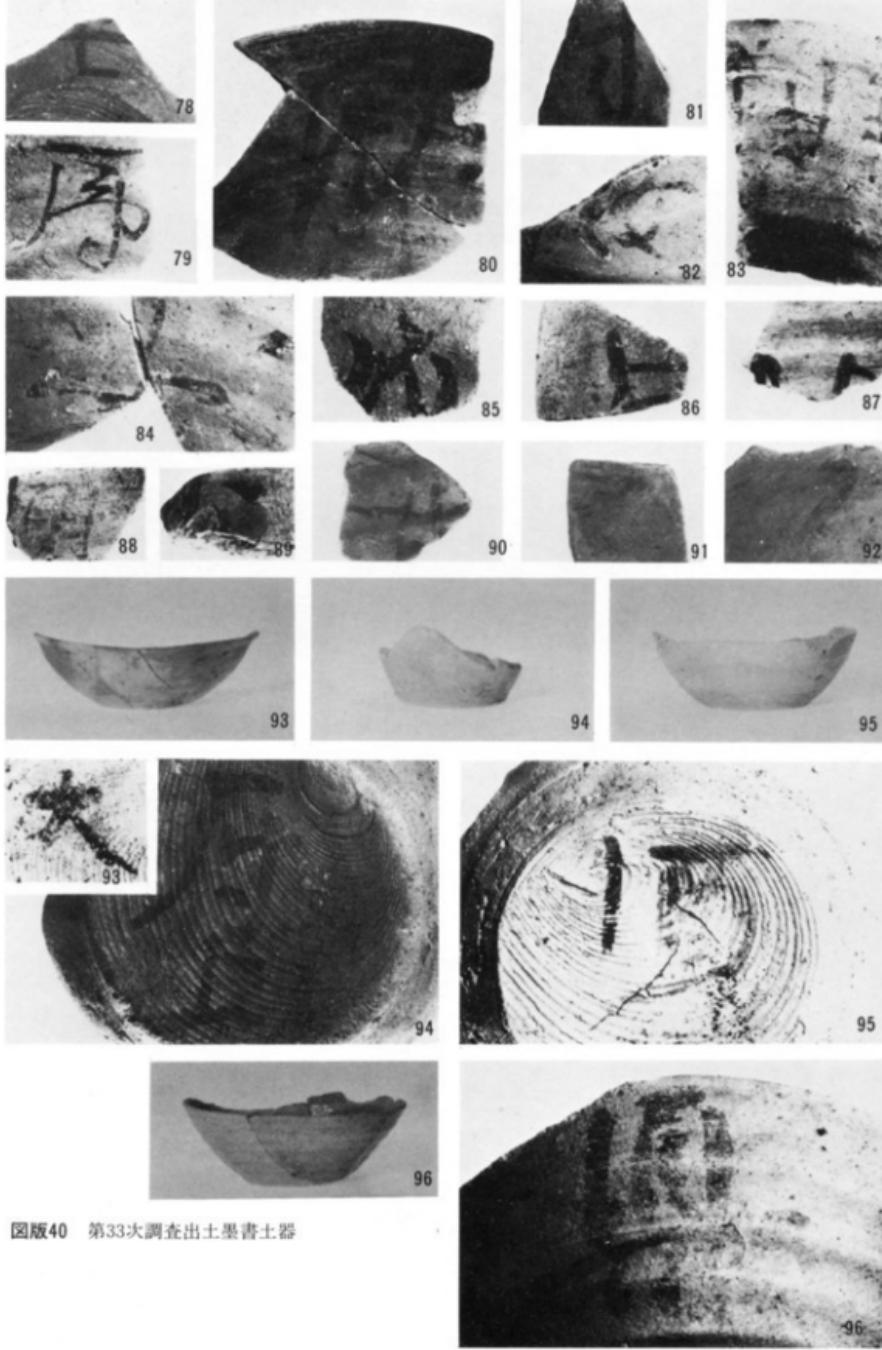


図版38 第33次
調査出土墨書土器

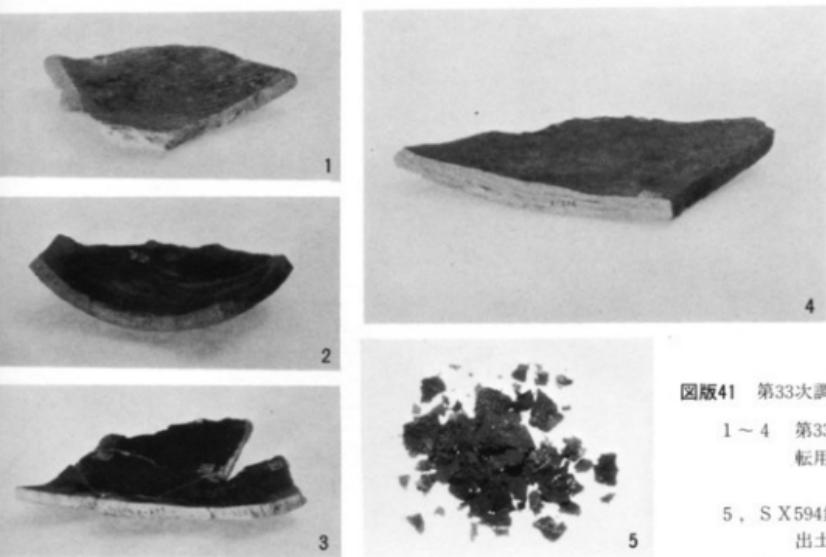
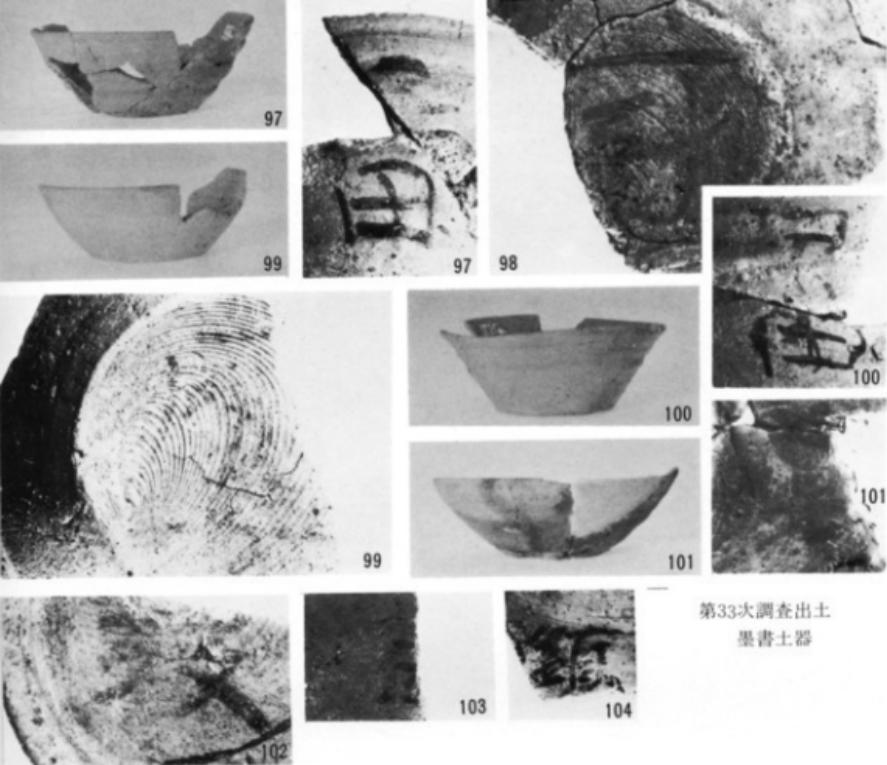
(47, 52は赤外線
(テレビカメラ使用)



図版39 第33次調査出土
墨書き器



図版40 第33次調査出土墨書土器



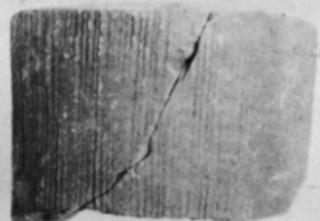
図版41 第33次調査出土遺物

1 ~ 4 第33次調査出土
転用硯

5 S X594鍛冶遺構
出土鉄片(粉)



1



1



2



2



3



3

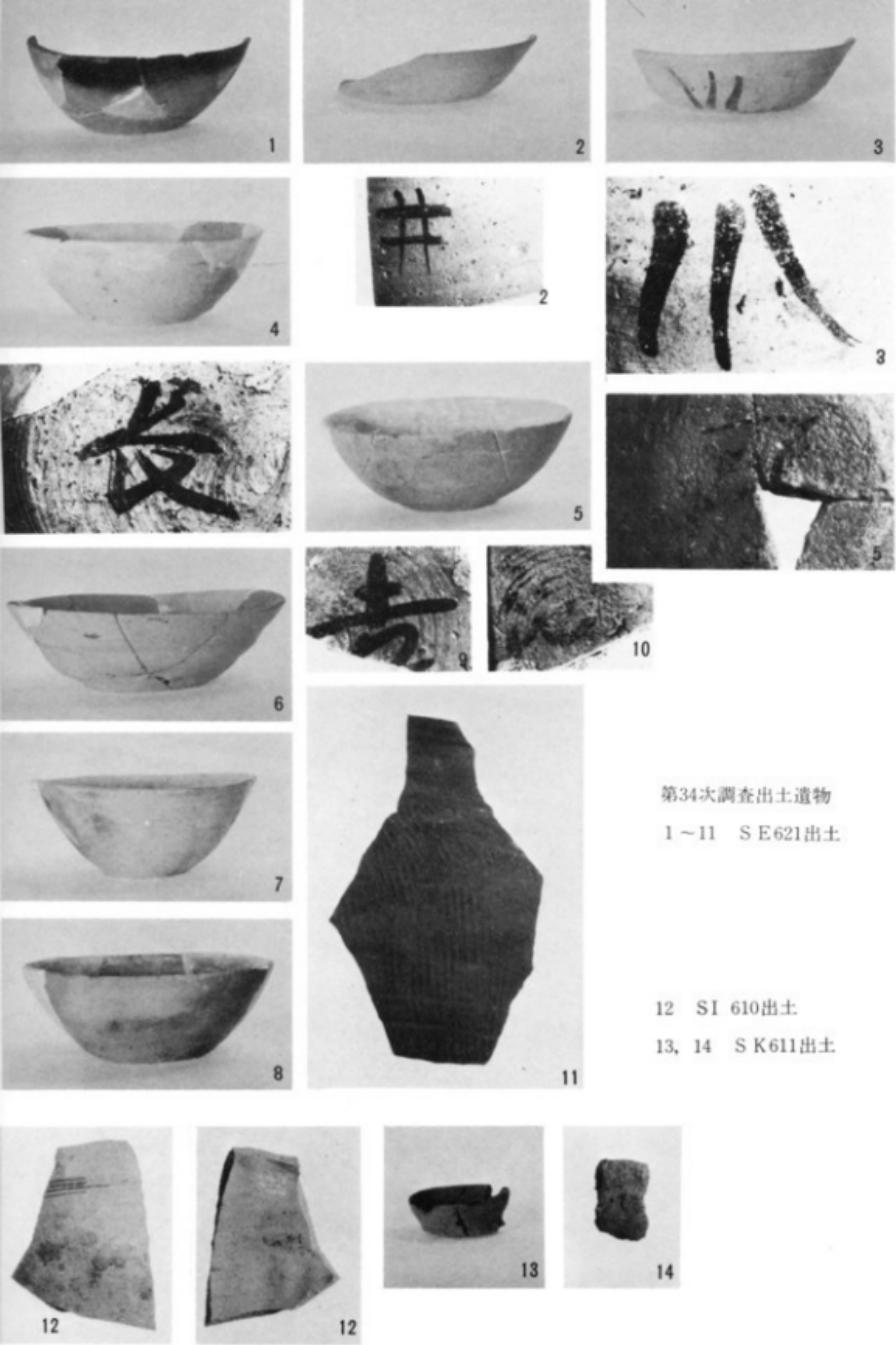


4



4

圖版42 第33次出土瓦

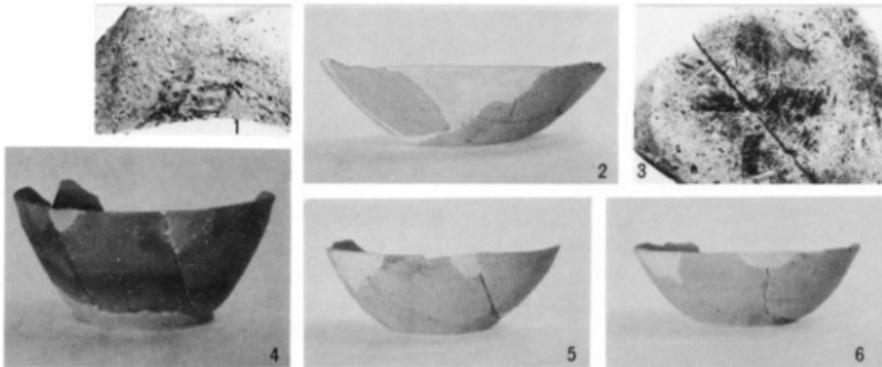


第34次調査出土遺物

1~11 S E621出土

12 SI 610出土

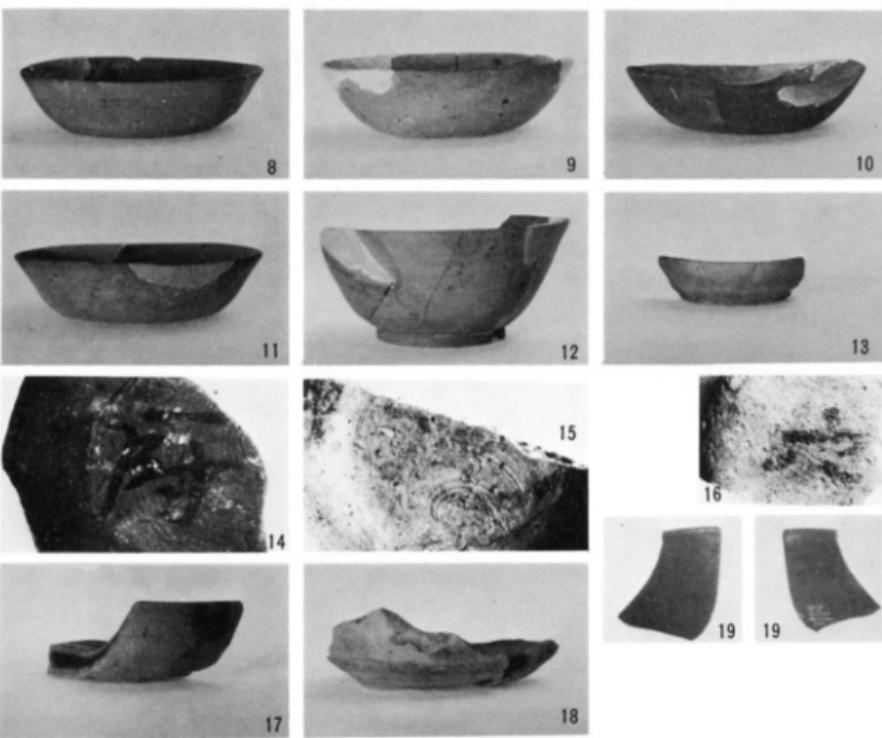
13, 14 SK 611出土

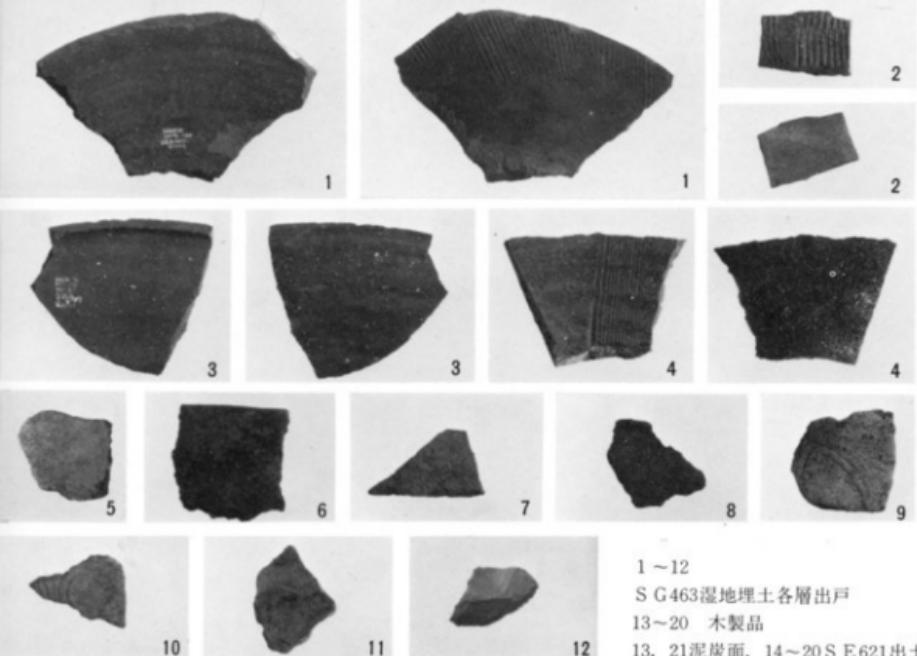


1 ~ 3 S K613出土

4 ~ 7 S I 622出土

8 ~ 19 S G463湿地埋土各層出土

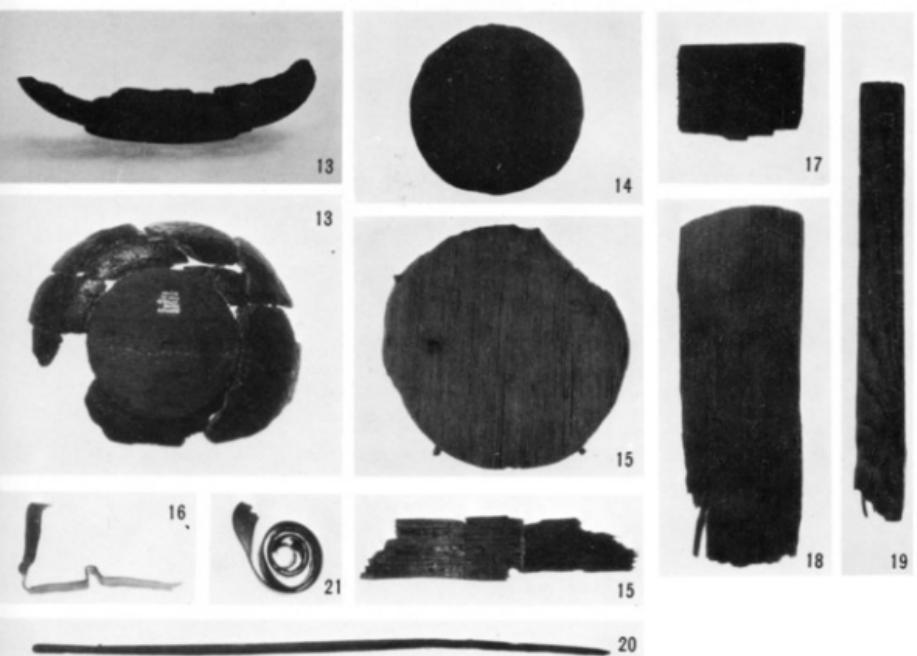




1 ~ 12
S G463 濕地埋土各層出戸

13~20 木製品

13, 21泥炭面, 14~20 S E621出土



秋田城跡発掘調査事務所要項

I 組織規定

秋田市教育委員会事務局組織規則 抜粋（昭和37年5月8日 教育規則第3号）
改正 昭和52年11月21日第11号

第1条

4. 第3条第4項に掲げる事務を分掌させるため、社会教育課に所属する機関として、秋田城跡発掘調査事務所を置く。

第3条

4. 秋田城跡発掘調査事務所における事務分掌は、おおむね次のとおりにする。

一、史跡秋田城跡の発掘に関すること。

二、史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。

II 発掘調査体制

1) 調査体制

秋田市教育委員会 教育長職務代行者次長 池田 正

社会教育課長 佐藤嘉子

秋田城跡発掘調査事務所

氏名	職名	所	属
佐々木栄孝	所長	秋田市教育委員会	社会教育課参事（兼）
小松正夫	主事	"	社会教育課（兼）
石郷岡誠一	"	"	" (〃)
日野久	"	"	" (〃)
西谷隆	嘱託	"	"
西島羽礼子	調査補佐員		

2) 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所



発行 昭和57年3月 秋田市教育委員会

秋田マイクロ写真印刷（株）